

# 地名研究会報

第9号

昭和60(1985)年9月1日

鹿児島地名研究会

## I. 第9回例会 6月2日(日) 教職員互助組合会館小会議室

(出会者) 池田信夫・江之口汎生・江平 望・小川孝三郎・片岡八郎・  
唐鎌祐祥・桐野利彦・佐野武則・中村明蔵・永山徹弥・西園一俊・花園正志・  
肥後芳尚・平田信芳・本田親虎・藤浪三千尋・松浪由安(17名)

## II. 鹿藩名勝考読会 P.27~P.31

[話題となった地名および事項] 智賀尾、伊集院、日置、屯倉、前代川、  
照島、他。

### 智賀尾(チカオ)

本田 智賀尾神社のことですが、今は郡山町にあると思うのですがね。昔は下伊集院村。戦後は町村合併で郡山に入りました。面白いことに、八重山小塊を取巻いて、智賀尾の支社が八つあるのです。また、江戸時代には、入来では、智賀尾が智賀岡神社といわれています。八つとは、東岸来の養母、市比野の竹田、市比野温泉からちょっと入った所です。郡山に一つ、入来に五つあり、八重山をずーっと取巻いて八つあるわけです。それでまあ、入来の方では近岡八社といえます。新田神社が史料に出て来ない以前からあるわけで、一之宮とあるように、薩摩では非常に古くから尊崇を受けておったのではないかと思います。中村先生の分野でしょうが、新田神社がなぜあんなにおそく出て来るのか、われわれには判らないのですが。

中村 時々考えるのですがね、よく判りません。

本田 延喜式にも出て来ないでしょう。

中村 延喜式でなく、和名抄に新多郷というのは出て来ますね。郷名としては出て来ます。ただ、神社名が出て来ない。

本田 紫尾神社も早いわけでしょう。

江之口 直接は関係ないかも知れませんが、私が今ちょっと思ったのは、神社の名前というのは大概土地の名前も付けたりするということ、まあ必ずしも、定説といえますか、ちゃんとしたものはないかも知れませんが、そういう傾向が多いので。八重山と智賀尾と古くは呼んでいたんじゃないかということも、今ちょっと考えました。それから志那尾神社ですね。志那尾も「尾」が付きます。紫尾も読み方によっては、まあ「尾」。なにか一つの信仰の形というものがあったんじゃないかと、今、ちらっとよぎったんですが。

本田 面白い形ですね。

平田 「チカ」と付く地名を日本地名索引で引きますと、30ぐらいあるのです。近井・近岡・値賀とかですね。全国的に見ると、いわゆる遠近の「近い」という意味の地名のようです。智賀尾はこれ(鹿藩名勝考)に書いてあるように尾は丘の省略ですから、近い岡ということに付いた地名ということになります。もうひとつ、人の名前に「親・近」というのがよく付けられるわけですが、たとえば、北島親房とか鎌田政近とか。いろんな「チカ」というのが付きますが、これは、(笑)。なにか「チカ」という文字が付いているのがいらっしやいしますが、(笑)、これはやっぱり、出世が近いよという願望があったのじゃないかな。

江之口 近いと云ったら、智賀尾のチカは、なにか対しての「近」なんですか。

平田 いや、だから。(笑)

江之口 智賀尾神社の場合は、なにか基準に。なにかひとつの文化圏というか。

平田 それがあるでしょうね。まあ、近野・遠野という表現がありますからね。近いということですよ。

本田 南の海から見たらですね。一番近い山です。

江之口 ああ、目印の山になってるんですね。

平田 それから、前回問題になりました「多賀」。賀が多いと解釈し、それと同類とみなくて「千賀」と読むと、湯桶読みになってしまいますね。それに



近いかも知れませんが、まあ、その二通りしか考えられません。しかし、本来はやはり「近い」という意味でしょう。

本田 結局、海から見て近い所になったのでしょうか。

平田 そうなっているのです。

本田 そう考えられますね。

### 伊集院(イジュウイン)

平田 伊集院という地名は、「イス」の木が多かったから「イス」とよばれ、それが「イス院」になり、さらに伊集院に訛ったのだというのが、伊集院郷土誌にもとづいて地名大辞典に書いてあるのですが、日本の地名例を調べますと、それに近いものに、石生(イシウ)という地名が二ヶ所ほどあります。沖縄にも伊集(イシユウ)という地名があります。石生と書いて「イシウ」とよんでいたものが「イジュウ院」と変わったのだったら、解釈が出来るなあとは思っています。あの辺に饅頭石という石に因んだ地名もありますから、「イス」の木に因む地名とするよりも、石が生まれるというところから付いた地名と理解した方が長いのではないかと思ったりしています。石が生まれるということは、古代の人々にとっては一種の呪術的な意味をもっていたのだでしょう。隼人塚にしても、大隅回分寺跡の層塔にしても、小石が飛び出して来るような荒っぽい砂岩を使っています。あれは風化して行くと、中から石が生まれて来るわけです。そういう意味で昔の人は、ああいう荒っぽい石を好んだということが考えられます。

### 日置(ヒオキ)・屯倉

江之口 日置はどうなんでしょう。よく、いろいろ文献も出ていますが。

平田 うーん、やっぱり、古代の伴部の日置部という考え方が一番いいのではないですかね。あの、誰だったの。

中村 井上辰雄。

平田 井上辰雄さんですね。日記部の論文。中村先生 それについてはどうですか。

中村 いや、僕はそれは反対なんです。まず、薩摩なんかには部民ということなんか考えたことはない。井上説には僕は反対です。

平田 ああ、そうですか。

中村 薩摩に部とか屯倉とかですね、結びつける方がよくありますけど、ちょっとおかしいのです。

平田 高山に宮下(ミヤゲ)という地名があり、これは「ミヤケ」に由来するというのが「里の字」に出ていましたけど。宮下(ミヤシタ)という地名は非常に多いのですが、「ミヤゲ」と読むのは高山のものだけです。他に「ミヤケ」という地名は、まだ気付きませんが、どう考えれば良いのでしょうか。この日置は。

中村 あそこはなんでしたっけね。隼人から回分に行く途中。

肥後 見次(ミツギ)。

中村 見次。あれと屯倉と見る説もあるようです。

平田 それは、なにに書いてあるのですか。見次が屯倉だというのは、隼人郷土誌?

中村 隼人郷土誌ですかね。なにかに書いてあると思いますが。

平田 それは、どうね?

藤浪 隼人郷土誌の以前のもの、戦前のもので、ちょっと私も記憶になく、忘れたんですが、確かありますよ。聖蹟を調査した時の人なんですがね、高屋山陵とか。その時の調査した本の中に、確かあったと思うんですがね。

小川 屯倉の関連で云えばそんな箇所があったと思うのですが、今ちょっと本の名前は忘れましたが。

中村 高橋貝塚の海岸側に、石碑が建っていますね。

平田 ああ、恐らく二千六百年記念に、いろんなのが建ったのでしょうか。

### 苗代川・照島

平田 先程読んだ箇所に、苗代川(ナワシロガワ)と照島(テラシマ)とル



ビが振ってあるんですが、これをどう考えますか。

本田 一般には「ナエシロガワ」と云いますよね。

平田 普通、「ナエシロガワ」と理解されています。中学時代、外地から引揚げて来た時の話ですが、猪苗代湖という地名のあることと、普通は苗代というので、この地名と私が「ナワシロガワ」と読んだら、皆から笑われました。これは「ナエシロガワ」と読むんだと。その時、違和感をもったのですが、鹿児島では「ナエシロガワ」が正しいと思うんですよね。ここにわざわざ「ナワシロガワ」と書いてあるのは、なにか意図的なものがある気がするんですが。同様に「テルシマ」と照島(テラシマ)とわざわざザルビを振っています。

江之口 地理纂考に「テラシマ」と書いてあるんです。それで、私は、最初は平べったい山だから平らな島だと考えていたんですけども。たとえば、阿久根の脇本にも、一つ、「テラシマ」。ここは戦争の時に砲台が置かれていたというようなことも書いてあります。それから西方の人形岩のすぐ北の方にちっぽけな島がありますが、照島(テラシマ)と名勝回会に絵入りで人形岩の所に書いてあります。それなんかを見ると、灯台みたいな役目も果たしていたんじゃないかなというようなことも考えます。

平田 照らす島ね。

江之口 はい。それから、寺があったというようなことは、まず考えられないので、どうもその辺じやないかと、私は思っています。

平田 テラシマ(寺島)であっても、テルシマ(照島)であっても、ある程度、その地名の由来というのは説明できるのですよね。どちらでも、だから現地と呼ぶのが正しいのではないかと。しかし、昔、「テラシマ」であったものが、ある時点で「テルシマ」に変わったかも知れないという問題が残されます。

#### 鬼ヶ迫・屯倉一個

平田 まだ完全に捨い出していませんが、鬼の迫とか鬼の〇〇と付いた地名も相当数鹿児島県にはあるようです。

佐野 ちょっと教えて頂きたいのですが、三宅という苗字は屯倉と関係はないものでしょうか。

平田 さっきの話と関係するんでしょうが、鹿児島県で見つかっていますか。

佐野 苗字にはあっても、地名にはないようです。

平田 苗字にあるのは知っています。どこからか、いつの時代かは判りませんが、移住者ということは考えられますね。

佐野 それから「ツクダ」というのがあちこちにあるようです。なにが。

中村 個じやないでしょうか。

平田 領主の直營地ということでしょうけど。

中村 屯倉に関する地名というのが全国にある。ミヤケ・ミタ・トンダ・トミタなど。宮崎県の児湯郡新富町というのが、新田と富田が合わさって新富になっています。先程も出ましたが、屯田(トンダ)ですね。あれを屯田(ミタ)と呼んだりしますので、屯倉と乍ら関係はあるとは思いますが、その由来を尋ねるのは非常に難しいと思います。

江之口 ツクダは20例くらい鹿児島県にあったと思うのですが、全国的にはどうも、859例のツクダという地名がもう既に捨い出されています。ただ、それが全部古いものということにはなりません。

平田 他にありませんか。では江平先生、10分ありますが。

#### Ⅲ 「キビレ問題の弁明」 江平 望

江平 今日頂いた会報の右側のこれだけで、私のどの辺が悪く、どの辺が悪いのか、私はよく判らないものですから。どうも出すのは気が引けるのですが、コピーをちょっと持って来ました。こたわるもんじやございませんので。他の方々も私同様お判りにならなかったんじゃないかと思いましたが、私もちょっと勘に采なかつたもんですから。ちょっと読ませてもらいます。与えられた紙数で少し縮めてあり、論旨が通っていないかも知れません。

「地名にみる古代人の自然観」



本紙連載「里の字」にはさまざまな地名が掲載され、その由来が明快に語られている。指宿郡喜入町の起源をなす古郡名「給黎」は『和名抄』に岐比礼(キヒレ)と訓じられているものの、語源不詳で、いまだに定説を見るに至っていない地名である。

これは「岐比礼」の読みの問題があるようである。『和名抄』で「比」の用例を見ると、例えば備前国の和名として記された「岐比乃美知乃久知」(キビノミチノクチ)の「岐比」は、同じく備後の「吉備乃美知乃之利」(キビノミチノシリ)の「吉備」に相当している。このように「比」は「備」と同じ濁音の表記に用いられている。つまり、「岐比礼」はキビレとも読めるのである。

では、「きびれ」とはどんな意味だろうか。それは「腰のくびれ」などを使う「くびれ」と同語と解さるよう。「くびす」(かかと)を「きびす」といい、また、鹿児島語で括(くく)ることを「くびる」というが、これを「きびる」ともいっている。いずれも「く」が「び」の母音にひかれて「き」となったのである。

そこで、あらためて「くびれ」を辞典で引くと、「物の中ほどが細くせぼまる」とあり、これは喜入町の境界図とぴったり一致する。すなわち、同町域は西の境界をなす薩南山地の稜線が、鹿児島湾寄りに通っているため南北に細長く、地図で測ると海岸線は十六キロあるのに対して、東西の最も狭い地点はわずか二キロしかない。まさに「くびれ」た地形になっているのである。

このように給黎は、本来「くびれ」の意味のキビレを表したものであったが、それがキヒレ、キイレと転訛し、室町時代に至って、「喜入」の表記が生じたのである。

山野を駆け回り、生活の糧を得ていた古代人の地形や境界を見る目は、現代人が想像する以上に正確であったといえよう。(S. 59. 10. 31 南日本新聞掲載)

題目を新聞社が付けた題目で、私は喜入考というふうに着いたのですが、まあ、こうして、プリントを頂いた時に「くびす」と「きびす」の用例が書いてございまして、結局、私が云った「くびす」と「きびす」は同じことばであると。私と

しては、「きびれ」と云ったのは、私の説を補強して頂いたような気がしたわけですが、だから、これは真向から反論とはと、思ったものですから。

平田 ミーと、ですね。

江平 もうひとこと付け加えさせて下さい。最後の二行に「地名は音で綴られた呼称であるから本来保守的で云々」。たしかに地名は音を基にすることは、私はいつも主張していることだし、その音自体、日本語が変化して来ているという事は、音韻の変化、また、いろんなことが、あるいは方言の問題でしょうし、時間的には古代語・中世語・近世語と音自体が変化しているから、地名研究の面白味があると思うんですね。それを、すべてを「強力な行政権力の行使がない限り、地名の変化は起らない」というのは、ちょっと。

平田 はい、判りました。説明を聞いてですね、私も早合点があったなあと思うのですが、これは「くびれ」から「きびれ」に変化したというふうには、私はあわてて読んだのですよね。

江平 それは別に。

平田 それは別に書いてないわけですが、改めて、おことわりいたしますけれども、キビレはクビレの意味だというご説明で、そして、キヒイ、キイレに変わったという説明。それで私も済まなかったなあも、今お詫言いたしますが、ただですね、キビレ説をとった場合、高い山の丘から見ても、国見として、こうキビレているなという国見的地形の名前の付け方になりはしないでしょうか。

江平 いや、それでも良いのじゃないでしょうか。だから、ここで最後に、「山野を駆け回り、生活の糧を得ていた頃の地形や境界名で、現代人が想像する以上に正確である」と付け加えてあります。

平田 まあ、そういう解釈が成立つということですが、ただ、国見のおおまかな地名というのが古い時代に付けられるだろうかということが、一疑問に残ると思うんですね。

江平 まあ、いろいろ想像は出来ますけれども、古代で、やはり、境界が設定



されない限り、郡名・郷名に使用しないはずはないのです。

平田 それで？

江平 境界はあったと思うんですよ。境界がなければ、郷の設定は出来な  
だろうし。

平田 さあ、これはどうですか。

江平 いえ、まあ、別にこだわるわけでもないんですが、一つの議論として  
出したわけで、よく理解した上での批評なり、反論なりは喜んで頂くわけです。

平田 弁明を受けまして、私もですね、誤解していたなあと思うのですが、  
クビレからキビレに変わったというふうに読んだわけですね。ご免なさい。

江平 いやいや。

藤浪 クビレという所は、県内に、どの辺に。

江平 私は県内だけかと思っていましたら、平田先生の調査ではよその県で  
も使われているみたいですね。

平田 たたですね。そのように高い所から全部を見て、この境域がキビレで  
いるからキビレという地名が付いたというのは、風土記的な地名解釈ではないかと  
疑問に思います。それから、全国を見ますと「キレ」という地名は他にもある  
わけですね。

江平 そうですか。

平田 和名抄にも岐例郷というのは、いくつか出て来ます。意味は判りませ  
ん。私が問題にしたいのは、鹿児島県、南九州には「レ」語尾の地名というのが  
割に多いんですね。奄美の方に行きますと、赤連とか〇〇連とか、たくさんあり  
ます。「レ」語尾の地名が南九州に多いとしますと、次のようなことが考  
えられるわけです。初代の神武天皇が「カムヤマトイワレヒコ」、イワレという地名が  
考えられる。それから、継体天皇が即位したのが「タマホイワレ」の宮です  
ね。そういう「レ」語尾の地名という観点から眺めて行った方がいいんじゃない  
かということだけ感じています。その意味はまだ判りませんが、では、あらため

てお詫が申し上げます。

江平 いいえ、理解していただきただけで。クビレとキビレとあげて  
ある前回のプリントがちょっと納得できなかったのですから。

平田 私が、クビレからキビレに転化したというふうに理解した早合点です  
から。まあ、そういうことはほとんどありませんと考えたわけです。

江平 どうも貴重な時間を失礼しました。

平田 前半はこれで終わって休憩にいたしましょう。どうもありがどうござい  
ました。

#### IV 問題提起 「霧島山麓の地名」 佐野武則

霧島山麓の地名ということ、なにか発表せよということになりました。私の  
専攻は地理として、桐野先生の「シラス地域研究グループ」に属しております。  
桐野先生いろいろな業績あるいは手法を踏まえてやっているわけで、果たし  
て地名研究の分野に私たち地理の者がどうアプローチしていけばいいかというこ  
とも考えます。この前、桐野先生が小字から見た地名の由来ということを書いた  
もんですから、私もその手法で霧島山麓の鹿児島県側の小字名が一体どうい  
うになっているだろうかということを書きたいと思ったわけなんです。書い  
てみまして、結局、あまり判らないということで発表ならんのですけれども、概略  
述べてみたいと思います。

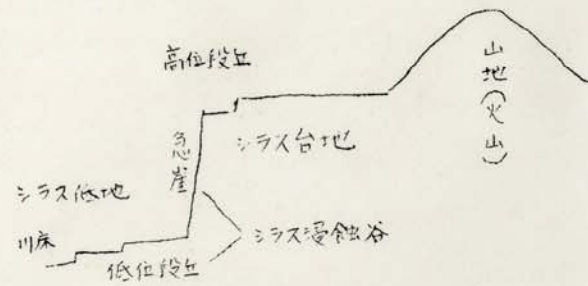
おき元にあげました台地の分布図、これは桐野先生が作られた有名な図です。  
大体鹿児島県の場合、本土の6割ぐらいがシラスに覆われています。私たちが  
いうシラス台地とは、高位段丘から上、急崖から上のことを云ってあります。ご  
覧頂ければ判ると思うのですが、川内川の流域あたりというのは、もうほとんど  
が浸蝕されて台地らしいシラス台地はなく、ほとんどが低地になっています。  
それから、霧島を中心としたあたり、それから鹿児島・伊集院を中心とした  
所、その辺とわかれわかれは中薩台地と呼んであります。それから曾於のあたり。霧  
島山麓に限って見ますと、十三塚原であるとか、あるいは春山原であるとか、須



川原・平野原・大野原、まあそのぐらいが大きいわけですが。それから、南の方に行きますと南薩台地とかあるいは大隅半島の笠之原とかあまり浸蝕は進んでいない非常に大きな台地が残っております。鹿児島県というのは大きく分けると、川内川流域のように浸蝕が進んであまりシラス台地が残っていない所と、それから、今申しあげました霧島の中薩台地、それから曾於あたりを中心とした相当開削されて低地と台地が錯綜している所、それに南の方の広い台地面が残っている所と、まあそういうふうに分けられます。

今われわれが問題にしております霧島山麓というのは相当浸蝕されている所で、低地もあれば台地もあり、早く云いますと、シラス台地に谷が入っている所です。霧島山麓の西斜面と云いますが、西側にあたる所は加久藤カルデラ。これはちょっと古く、数十年前なんですが、鹿児島県の中では一番古いカルデラで、その南側の縁に霧島の火山群が噴出して来たわけです。

地形的に説明しますと、いわゆる低地があり、われわれはここをシラス低地と呼んでいます。ほとんどはシラスがすーっと覆っていた所を河川が浸蝕して出来た



低地です。それから急崖があり、急崖の上に浅い谷と台地面があります。さらに一段と高い所に火山斜面が残っています。

次の図を見て頂きたいのですが、これは霧島山麓の湧水分布。これは、私どものシラス地域研究グループが2年間ばかりかけて、今から10年ばかり前に始良地域を調査し、5万分1図にドットしたものの一部です。非常に湧水点が多いことがわかります。これも大小さまざまなんですけれども、大体人間が使っております。人間が使っていないくても大きな湧水があるという所がこうしてあるわけですが。霧島山麓はとくになにが特徴的かと申しますと、大湧水が多いことです。南九州では規模の大きい湧水がある所になります。実は今年のはじめ、名

水百選というのが全国から選ばれました。鹿児島県からも三つほど選ばれ、その中の一つが、この霧島山麓の湧水群の中の一つ、栗野の丸池です。これは行って見られた方はご存知だと思いますが、毎秒3トンばかり、一日に30トンぐらいの大湧水です。とてもきれいな水です。その他、屋久島の水、川辺のシラス崖下の湧水の水とが選ばれております。宮崎県側で、小林に井手山という所がありますが、あそこも百選の中に入っています。霧島山麓だけで二つ選ばれていることとなります。

大体人間が集落を作る場合に、どこに、どういうふうにするのだからかを考えた場合、それを決めるのはやはり水だと思えます。飲料水を使うし、生活用水を使うし、あるいは灌漑用水として使う。近年では工業用水とか、いろんな使い途があるわけなんです。そういうことで、湧水を中心に研究を上げようというふうになっているわけなんです。私なんかはあまりよく判らないのですが、湧水の近くには集落があるし、それから湧水のある所には水神を祀ってあるし、それから湧水を中心として、いろいろな営みが行なわれて来ているなあということをおもうわけなんです。これを桐野先生は、湧水にまつわるいろんな事象を湧水文化と云っていいんじゃないかと云っておられます。鹿児島県でもそれぞれの地域というのは、いろいろな特徴を持っていると思うんですけども、そういうことで、どこに集落があって、そしてその地域性は一体なんだろうかとということが常々調べている内容になるわけなんです。霧島山麓は先も申しあげましたとおり、非常に湧水が多い地域になります。そして各集落を調べてみますと、上水道に存するのが大体昭和40年代の中頃のようなようです。早くて40年代のはじめなんですけども、それまではほとんど湧水を使っていたということです。湧水を飲料水・生活用水に使っております。鹿児島県では井戸が非常に早くからある所はありますが、この地域は井戸があまりない所です。それほど水が豊かであったというようなことが云えるような所です。しかも湧水で灌漑した水田面積が非常にこの山麓には多く、そういうことが非常に大きな特徴になります。



それからもう一つ。これも桐野先生が明らかにされておりますけれども、薩摩半島から庄内とか霧島小麓、それから大隅半島への移住者が多いということです。室町時代、薩摩半島は人口が多く耕地が少なく、百姓でも二男・三男という者は門からはじき出される始末でした。あるいは士族であっても、二男・三男というのはなかなか職はないという状態でした。そういうことで手に職をもちながら、あるいは農民の場合には新しい土地を求めて大隅半島とか霧島小麓、果ては向うの庄内とかに行ったといわれている地域なんです。ということで、結局はこの地域の開発はまあ新しいんだと云えます。ただ新しいと云いまして、もちろん、古代に由来するものもあるわけなんですけれども、まあ全体的に見たら、大体新しいのではないかと思います。ということで、なにかそう云った地名なにかないものだろうかと思うわけなんです。私の力をしましては、そういったところまで及びませんので、結局さっき申しあげました通り、小字がどういうふうになっているかと、桐野先生がこの前された手法でやらざるを得なかった次第です。

角川の日本地名大辞典の中に、各市町村の小字名が出ております。まあ、出ていない所もありますが、それをもとにしまして鹿児島県側の財部町・霧島町・牧園町・栗野町・吉松町という所を作ってみたわけですが、No. 2 を見て頂ければ判るんですが、地名と地形の関係を見てもみると、「原」とか「段」とか「平」とか「デラ」とか「野」と云ったようなのが非常に多いわけなんです。これらはシラス台地を示す地形地名だということです。その中でも〇〇原(ハラ)・〇〇原(バイ)という「原」は、シラス台地の大きな原面に近い所、広い平地のある所を云います。「段」というのは、シラス台地の所で、高位段丘面にあたるような所をこう云っているのではないかと見られます。現地を回れば、そんな感じがするのです。それから、〇〇ヒラというのがあるのですが、「平」と書いてヒラというのもあるし、「比良」というのもあるようなんですが、シラス台地の所で「平」というのを使っている所があるようです。「段」とどういふふうの違いなのか、まだ判らぬのですけれども、私はここにシラス台地と書きましたけれども、

〇〇比良という場合には、山地の傾斜面というか、ちょっとした開けた所を「比良」と云っているようです。大ざっぱにシラス台地と書きましたけれども、もうちょっと検討しなければいかんと考えています。

今度はシラスの浸蝕谷。浸蝕谷と申しますと、いわゆる「迫」・「谷」が入っている所です。鹿児島県の地形は大体、河床と台地と山地に分けられます。別の云い方をすれば、大きくシラス低地とシラス台地に分けられます。台地の縁にちょっとした浅い段があり、これを高位段丘と云います。そして、特徴的な急崖、またシラス低地には、もちろん、低位段丘が付いています。場所によって違いますが、大体鹿児島県の場合には、共通して二段ばかりの段丘があるようです。わけわけがシラス台地という場合、高位段丘から上のことと云います。さらにこの上に山地というのがあるわけなんです。特に今問題にしている所は、ここが火山になっているわけなんです。すなわち霧島火山。

シラスの浸蝕谷と云いますと、この急崖から下の部分、高位段丘から下の方の部分のずーっと入りこんでいる所を云うんですが、そんな所に「迫」とか「谷」とか「窪」とか「宇都」とか云った地名が多く見られます。私も、どこを「迫」と云い、どこを「谷」と云い、どこを「窪」と云い、どこを「宇都」と云うことは、まだ判りませんけれども、要するに、こう云った浸蝕地名がここには多いと云えます。

それから、シラス低地とは低位段丘を含めた部分なんです。ここは「牟田」とか「水流」とかいうような地名があるわけなんです。

結局、霧島小麓の西側の五つの町について地形から考えると、少しずつ違うようです。財部町、これは割合広いシラス台地の原面がある所で、しかも霧島の火山斜面にかかる所です。霧島町・牧園町というのは、どちらかと云いますと、相当浸蝕されたシラスの小台地があって、そして霧島の火山斜面も含む所です。それから、栗野町も大体そうなんです。同時に川内川流域になります。北方とか米永といった所は、川内川流域の低地になります。吉松町にしまして、そんな



所なんです。同じ霧島山麓の西側斜面と云いましてもちよーと違うようです。

大ざっぱにずーっと地名を拾ってパーセントをあげてみたんですが、特徴的なのは「原」と「段」という地名が非常に多いことです。〇〇原(ハイ)とか〇〇原(ハラ)というのが非常に多く、「段」というのも多い。また、「迫」という地名も多く見られます。とくに牧園町は「迫」のつく地名が小字の20%近くあります。それから「谷」とか「窪」、こんな地名がまあ多いです。

それで、レジュメの下の方に書いてあるんですが、全体的に見ましたら、「迫」という小字が非常に多く、「迫」が1位です。2位が「原」、3位が「谷」、4位が「平」、5位が「段」となります。シラス地形ですから、「原」とか「段」とか、浸蝕谷の所で「迫」、「谷」という特徴的な地名が非常に多いのは、当然といえば当然なんですけれども、まだ全県下としてみませんので、まだ判りませんが、シラス地域に行けば、ほとんどこういったのが一般的な傾向じゃないかと思えます。ただし、川内川流域であるとか、あるいは浸蝕の違いによって地域差がおのずと出て来るだろうと思えます。それから、これは気付いたことなんですけれども、シラス低地およびシラス台地に関する地名が全体の30%近く、大体半ぐらい、シラス地域では出て来ているようで、そういった地名が多いんじゃないかということを感じました。

それから、小字でも広い所と狭い所があるわけなんです。小字圏と5分/10分とをひき比べてみますと、土地のよい開発が早くから行なわれているような所が、小字が小さく分れています。それは当然といえば当然なんです。それから、火山斜面というような所は、もちろん、それだけ人が注目もしないし、利用されもしなかったんでしまうから、字もまあ大きいです。まあそんなことが云えます。

次のNo.3 霧島山麓の西の斜面に大浪池というのがありますが、その辺から北の方で山麓の開発がどういふふうになされたかということも桐野先生が詳しく調べられた図なのです。その図を見ますと、大体、シラス低地というのはほとんど「門地(カドチ)」になっています。「門地」になっている。これは特徴的なこ

と云ってよいと思います。薩摩半島と比べたら、ちよーとまた違うんですけども。それから、高位段丘から上の台地面および火山斜面に行きますと、「拘地(かけち)」が非常に多いようです。「拘地」が出て来ます。そんな傾向があるようです。この図はその小を示しているわけなんです。

それで、高度との関係すなわちシラス台地がどこで霧島山麓と接しているかということなんです。栗野町あたりで海拔300mで接しています。場所によって違うのですが、大体まあ400mとみられます。霧島山麓でも向う側でも小林の方では少し低くなり、海拔250mばかりになります。こちらは高いようです。これはもちろん、シラスが始良カルデラから来ているわけですから、当然そういうことなんです。

ところで、大体シラス面までは、藩政時代の末までにはほとんどが開発されているようです。ただし薩摩半島の場合には、藩政時代、人口が多くて土地が少ないもんですから、吉利あたりに行きますと、山の斜面まで開発されているんですが、大隅の場合にはシラス台地の所まで、幕末ぐらいまでには開発されていますけれども、場所によっては作人が足らないとか未墾地・未開地が多い所があります。とくに小林とか高原とか、あっちの側に行けばそういった現象が強いわけです。

そういうことで、シラスの所と火山斜面がいつ頃から開発されるかという点、一番最後を見て頂きたいのですが、霧島山麓の大体400mから500mぐらいの間が、明治以降農業集落として開発された所です。それ以上になりますと、特殊な所で、たとえば温泉があるから開発されたとか、あるいはまた大開拓とか栗野岳とかは、ちよーと高いのですが、このあたりは酪農というんです。普通の農業ではなく飼料栽培をして始めているといったような所です。それから、そういった火山斜面に明治以降の新しい開拓地があるわけなんです。しかも戦後開発された所が非常に多いです。しかし、これも高度成長と共にだんだん少なくなったり、あるいは廃所になつたりした所が多いようです。



それで、全く要領を得ないのですが、まとめてみたらそういうふうになるよう  
です。今後は、いろんな地名に地理分野からどんなふうアプローチして行くか  
を考へなければいけないだろうし、それから、桐野先生のいわれましたようい  
った泉下の小字を地形図とひき比べて、そういった特徴的な地名を曳き出すのも良  
いんじゃないかと思ひます。実際のところ、小字名と大字名、あるいはその他の  
地名との関連というものはどうなっているんだらうかということは、私はあまりよ  
く判らないのですが、これから教へてもらいながら知って行きたいと思ひていま  
す。

### [質疑応答]

肥後 それは、なにか質問がありましたら、お願ひします。

江之口 No.3の地図。これは、いつの地図なんですか。この原図ですね。

佐野 原図？ これですか。これ？

江之口 No.3の原図です。

肥後 No.3、霧島山麓の開発。

佐野 これはですね、原図は2年ばかり前なんですが、これを作られたの  
は、もう昔いんです。

江之口 それがいつ頃なんですか。

佐野 これは桐野先生、昭和30年くらいですかね。

桐野 これは慶大史学で発表されたものですからね、もうかなりなるのじやない  
かな。

佐野 昭和30年代でしょうね。

江之口 というのはですね、前回私は来なかったのですが、平田先生の発  
表の「市後柄(いちごがら)」というのが、これで見ますと、「市後柄(いちご  
はら)」となっているものですから。その辺がどうも。

桐野 私は、さっきもらった会報に「市後柄(いちごがら)」というのがあ  
ったから、こんな地名は霧島にもあったと、笠之原にも大隅にもありますよ。

「いちごがら」。面白い地名があるもんだと、印象に残ってるんですよ。「いち  
ごがら」がどういう意味なのか、全然知りません。

それで、この第3図は私が作りました。二重丸◎は拘地(かけち)の集落、一  
重丸○は門地(かどち)の集落ですね。そうすると、この霧島の山の方には深い所  
がずーっと拘地の集落なんですよ。それから、その拘地の集落の南の方ね、こ  
れはもう条件の良かった所で、早くから開発された所で、いわゆる門地の集落。  
それで、その拘地を開いたのは、右の方の下に「桂」と書いてあるでしょう、こ  
れは桂さんが開いた拘地という意味です。その辺はね、今でも桂さんの土地があ  
りますよ。桂とか新納とか、左の方の上の方には比志島と書いてあるでしょう。  
この辺の人はヒツツマどんと云ってありますがね。そんな人たちの開拓地とい  
うことです。そこに人間が入って集落を作った。それが拘地の集落です。まあ、拘  
地の集落がですね、ずーっと見事に並んでいるのが、霧島山麓、それと笠之原で  
すね。

江之口 この地の場合、このルビはということですか。原図に打ってあ  
ったのですか。

佐野 これは原図に打ってあるのです。地図に。

江之口 現在はどうなんでしょうか。イチゴハラと云ってるのでしょうか。

佐野 昨日見たのにはイチゴハラとあって、これはいかんと思ひてイチゴガ  
ラと直したのですが。

桐野 霧島の調査に行く頃は、「イッゴガラ」と云ったんですよ。

江之口 その辺が？

佐野 これはですね、昨日買って来た地図(2万5千分1)にも「イチゴハ  
ラ」となっています。

平田 新しいからでしょう。だから。

桐野 「ガラ」と云わずに、「ハラ」と云うんですか。

平田 いわゆる、「イッゴガラ」が判らんから、「イチゴハラ」とルビを付



けかいたのでしょうか。国土地理院も勝手に変えたもんですわね。

江平 これは改悪ですわね。

平田 はい、改悪です。

小川 最近のものほですわね。地理院が直接せず、業者を下請けに出すので。問題が多いです、最近の地図は。

江之口 はい、判りました。

佐野 それで、特殊な小字もこのように暮さしたのですが、七負（ナナカ  
ルイ）とか検校（ケンコウ）。あるいは火山山麓だと車場（カマバ）とか牧野と  
か、いろんなのがあります。

桐野 それからですわね、霧島の手前の方は早く開けた所です。水田が早く開  
けとるんだから。だんだん山の上の方にあがって行くにつれてね、土地条件が悪  
くなるから、開発がおくれるわけですよ。それで、手前の方になれば、なるほ  
ど門地になっている。私がここを調べました時にですわ、鹿児島県の集落の構造  
が、まず良い所に門地があって、その奥の方に拘地が出て来ると。そういうふう  
な一つの理論が成立つと思っていたんですよ。そうしたら、佐野君が、先生、そ  
れは違う、また足らんがと云うんですよ。それはね、聞いてみると、なるほど、  
それが良いように思うんですよ。聞いたことを私が云いますがね、佐野君に代っ  
て、私が云います。まず一番良い所に「門地」があって、その次に、佐野君の云  
うところでは「木場」が出て来ると云うんですよ。その奥に「拘地」が出て来ると。  
今までいろいろと「木場」の字を調べたこともあるんですが、そう云わねえと  
ね、なるほど、その方が良いでしょうね。拘地と門地の間に木場を入れる。だから、  
そういう配列になっている。これは人間が必要のことですから、物占め意識な  
んてことはないぞわね。大体大きめに云えば、そういう配列になっているとい  
うことは云えると思うのです。

それで私はね、この会で「木場」をね、もう一問題にしたらどうだろうか、と  
いうことを考えている。木場という地名は南九州に非常に多いんですよ。九州で

は長崎県も多いですわね。そして、大隅の方には、木場というのは薩摩のようには  
ない。大隅の方に行くと、岳（タケ）という。大隅の岳と薩摩の木場は、これは  
同じような性格のものだと思っるとるんです。輝北町の岳、あの辺には岳というの  
がいくつかありますよ。唐鎌君の郷里だから、よく判っと思っと思うんですが、大  
隅の方には岳という地名が多いのではないかと。ところが、現在私は姪良町に住ん  
でいるんですが、姪良町の山手の方に岳という所があるんですよ。木場もありま  
すが、岳もあるんですよ。だから、木場と並んでやっぱり岳はね、開発上の一  
つの位置を示すと思ってるんです。鹿児島県の木場とか岳とかの研究はね、地名研  
究上、非常に良いテーマじゃないかと思ってる。

今、佐野君の話がありましたように、シラスの地形と地名、シラス地名の集成  
ということも、今、私は考えているのですが、なんと云っても、シラスは鹿児島  
県独特のものですから。この独特な所に、独特な地名がこのように存在している  
と。これは良い研究になると思うのです。シラス地名集成というようなことでも  
ですよ、もうそろそろ知っても出来る時期に来たんじやないか。私たちの研究会  
のテーマにしても良いんじゃないか。

先ほどから聞いていて、地名研究の字々のと、わけわけの考えている地名の  
のとは、ちょっとニュアンスが違って来るとは云うんですよ。地理の字は短刀直入で、  
直接的になるわけですよ。たとえば、迫。こういう地形の所では「迫」が出て来  
ると。ところが、地名研究の所ではですわね、ああでもない、こうでもない、これ  
がこれに変わったと、（笑）。それが、私たちは、あまり間接的だね、ピンと来な  
い。（笑）。まあ、間接的な感じと直接的な感じというのは、歴史と地理の違い  
かも知れませんわね。そういう感じがしましたが、しかし、これは両方がですわね、  
進んで行かなければ、本当の全貌は明らかに出来ないというふうには思うんですよ。  
思うんですけど、今はあまり地名のそういう難しい移り変わり、そういうことを  
知らんもんですからわね、まだあまり興味がないところですよ。

江之口 桐野先生。地名というのは、やっぱり小字が大切で、しかもその現



地を第一とすべきではないですか。やはり地形用語が地名になる率が一番高いといわれていますし、そしてまた、その現場でその共通性というのがあるはずですから。木場というのが百通りあるはずはないですから。大体まあ共通する。現地を見るのが一番早い手取り早い理解の仕方ではないでしょうか。私はそう思います。

桐野 それはですね、その発生を考えると、必要に応じて人間は地名を付けるわけですからね。自分の家から、どこか仕事場に行く。昔は百姓ばかりやってるわけですから。そうすると、その場所の地形を見てですね、デラとかヒラとか、あるいはサコとか、というふうにだんだん行って行くだろうというように予想されるのですよね。大まかに云えば、その場所の特色をもって地名としていると。そして、そういった地名が出来る時、そこに住んだ人はその地名をとって名前にするというふうになって、どうも地名というのがその土地の特色をもって地名として来たんじゃないか。その特色をつくるのは地形が一番適当であり、その特色を作るということに地形と地名という問題が出て来るように思いますが。

唐鎌 私は地理だもんですから、先程、佐野さんが書いた地形というのは、これは桐野先生が長い間かかって作られたものですが、あれを色々私らの頭の中に入れておけば非常に便利だと思うのです。それから、近世以降のことに関連性があると云われたのですが、もっと長い時間から見ると必要もあるのではないかと。たとえば考古遺跡から見ると、鹿屋の側でいうと高位段丘の所に王子遺跡がある。それから、新聞にはあまり載らなかったけど、上祓川(カミハライガワ)の所に上楠原(ウエクスハラ)という遺跡がある。そしてあの有名な下祓川の井ノ上の、中村先生が書いておられる遺跡が低い所にある。まあそういうことが一つ。もう一つは、浸蝕谷の地名といいますが、たとえば、下流の方の地名は判らないのですけど、川内(カワチ)というのはなんですか。それから、中流に行くと大久保・大窪。これを大隅の方では「ホッポ」という。串良に南木(ホキ・ホノキ)という所がある。大体は「ホッ」という。

桐野 それは、中流?

唐鎌 大体、中流です。まあ、谷。中流よりはちょっと上流だと思えます。さらに上流に行きますと、浦(ウラ)という地名がある。“ウラをハウ”と云いますね。山のウラをハウと云います。あのウラです。まあ、云えば川末(コズエ)と云いますか、川の一番上流というのを、ウラと云います。

桐野 そのウラは、サズイの浦ですか。

唐鎌 はい。だからわいわいは海岸の浦をいつも考えているもんだから、あの字を付けるのだしようけれども、川の上流とこうよびます。たとえば鹿屋で云いますと、あの上段(カンダン)・下段(シモダン)という、あの一番上流は、大浦。浦と云います。あれは大須という所と浦という所が一緒になって、それで大浦と云います。わいわいの地形の方から云うとですね、浸蝕谷についても、上流の堀切りは「段」と云いますが、その他にそういう「浦」、その次に谷が寄って来る所を「流合」と書いて「ハッゲ」と呼びます。そしてまあ、その辺の深い谷のことを「ホッ」と云っている。そして下に行くと「牟田」というのがあるんだけど、牟田というのは鹿見島に草牟田というのがあるから昔からあるんじゃないかと、大隅では牟田というのはあまり気付かないのですけれども。シラス浸蝕谷と地形的な方からもっと緻密に眺めれば、いろいろあると思うんです。まあ、そういうような見方も出来るのではないかと、今、話を聞きながら思いました。

桐野 そのね、大隅にも牟田はたくさんあるんですよ。串良とかね、それから吾平など。それは、それがしもんね。

唐鎌 それは、まあ、下流のことでしょうけど。

桐野 上流の方には、牟田はあまりない。

唐鎌 鹿屋しか調べておりませんので、他の所は知りませんが。

桐野 大体、これは中流から下の所ですね。しかし、「ウラ」というのは、今はじめて聞きましたが、私はいっしょね……

唐鎌 吉田にも宮三浦という所があります。



桐野 ラーん。

佐野 郡山にも大浦とか小浦という所がありますよ。

平田 それでね、今ふっと思ったのだけど、万葉集ではね、「末」を「ウレ」と読むわけですよ（「ウラ」とも読む）。「ウレ」と「ウラ」というのは共通するなあと思います。「ウラ」というのは一番奥。それは、わりと古いことばだということでしょうね。

桐野 それで、私はね、海でないのに「浦」というのは、おかしいじゃないかと思っただけですよ。山の中に「浦」がありますもんね。蒲生のこっちから行った入口に、西浦小学校ですかね、そういうのがありますよね。あそこを通りながら、西浦小学校、ほんの山の上に来てからこんな「浦」とはなんということかと、私は思ったりしたことがしばしばあるんですが。海でないのに浦という。私はそういうふうには、私の範疇でないから、そう思っただけです。そうしますとね、大体今までここらあたりの人々は、この浦というのは海岸の人々が来たんじゃないかと、それでやっぱり浦と云うたると、そういうふうには云う人もあるわけですよ。うじゃないな。上流の方を浦というのであればね。浦というのは、なんじゃないでしょうかね、表・裏の裏で、同じウラじゃないと、それから来てもらんどかい。表・裏のあれのね、背中のオムツと……

佐野 ものの一番先、木の一番上ども、「ウラン先」と云ったり……

桐野 木のウラ、木のなぐち云いますかね。ウラン先と云いますかね。

永山 矢末（ヤノウラ）。末をウラと云いますよ。

桐野 「末」な。まあ、「末」じゃないと。

平田 まあ、一番先端でしょうね。

永山 金峰町の、金峰山の下に、浦之名とありますが、海からのものだとすると、いつ頃？ あそこまで、昔は海岸線だったのでしょうかね。ずーっと山の奥なのに浦という名前が付いています。

桐野 いやまあ、あそこまで海であったということば云えないことはないで

しょう。しかし、その頃は人間は住んでおらなんでしょう。浦之名という名前を付ける人間はおらなんでしょう。

佐野 志布志の先に、大浦というのがあるんじゃないですか。

永山 その浦は海の浦でしょう。

本田 薩摩郡の辺では、みんな浦・浦と云っていますよ。

桐野 なるほどね。

平田 集落の呼称としての「浦」という時期も考えられんわけじゃないですかね。

本田 郡山なんかは、郡山浦と書いてありますよ。それに、市比野浦と。鎌倉時代のものには。

桐野 山の奥の方は、大体、「浦」というのが、普通じゃないわけですよ。

唐鎌 浦谷（ウランタン）というのがあります。小さな川の上流に。それから、鹿屋の西原と高隈・楠元あたりの山隈に、小川観音というのが祀ってあります。

本田 鹿児島県の山の中は、皆、「浦」です。

桐野 それで今、川の上流を「浦」と聞いたから、これは非常にいい勉強をしました。川の上流の山奥の方を浦と。それで、鹿児島県ではそれが特別だと。（笑）。

江之口 そうしたら、日向（ヒユウガ）。日向（ヒムカイ）に対してヒユウガという日蔭・山蔭と云ったような意味に使われているものとは？

本田 蘭年田温泉の奥の上流は、浦川内（ウランコウ）。

桐野 蘭年田温泉の所を流れている川ですか。

本田 川でなくて、あの辺を浦川内と。

桐野 浦の川内？

本田 入来のあれ（大字）は裏之名でしょう。あれは上流の方。

片岡 表・裏の裏とは違うんですか。



唐鎌 川内とは、どういう意味ですか。

江之口 山間の小平地ということになっています。

本田 小字に存っていますが、昔はもっと大きな地域を云ったと思います。

江之口 それから、吉松町に宇塩(ウシオ)の小字を捨てていらっしやいますが、現地はどういう所なんですか。

佐野 どこですか。

平田 一番下の宇塩。

佐野 すみません、ここは小字一覽から拾っただけです。

平田 牛の尻尾?

江之口 山崩れの所の「ウシオ」という地名でないかなと思って。

平田 それもあるよね、大潮(ウシオ)・山潮。

江之口 崖地ではないかなと思って。

本田 漢字はあて字だから、あんまりあてにならん。

中村 桐野先生。この木場といわれたのは、焼畑と関係があるものですか。

桐野 これは、現在、中世の山間地域の開拓地ということになっていますからね。地理の方では、中世の山間地域の開発。

唐鎌 関東では「サン」という。

桐野 ああ、サンね。それで、九州では長崎と南九州が断然多い。長崎のね、なんとかという人が九州の「木場」を調べてね、存にかに出したことがあるんですよ。なにも書いてあったか、憶えていませんがね。

佐野 上野先生じゃないですか。

桐野 その人のを読んだ時に、南九州には木場が多いということになったんですが、自分で実際当たってみたんです。その時は、私は吉利村を調べている時だったものだから。それで、吉利村に木場というのが、確かにあるわけです。しかも、木場に門が七つあるんですよ。七門が木場の方面にある。鹿児島県の木場を、ずーっと調べて、その分布図も作ってあるんですけども、やっぱり多い

ですよ。ところが、現在の木場の人はね、木場・木場って、いやがるわけですよ。だからね、もうみまり木場とは云われないようにして、他の名を言うようにしてですよ。吾平町の郷土史を書いた時ですよ。あそこにも木場があるんですよ。それで、木場・木場という、みんな、木場ん衆が機嫌が悪いで、他の名を書くがということ、砂ヶ野とか駒走とかいうことで、他の名を書いて行ったんですよ。そうしたら、私が郷土史で書いたのが、その地の地名にだんだんなくなって来ている。(笑)。

本田 木場というのが、田舎ごろというような意味に使われている。

桐野 そういような、いやしめるような印象を与えている。

江之口 木場というのは、一般には焼畑という。まあ、そういう説になっているんですけども。木場という、こーちで、そういう言葉が残っているのが、どうもピンと来んのですけれども。なにも疑問はないのでしょうかね。

桐野 地名のそれは残りますよ。普通名詞でなくてですよ。木場という部落の名前になれば、ずーっと残りますよ。

江之口 木場というのは、どういう状態とさすのですか。たゞは荒畑とか。

桐野 もともとのそれは、中世ですよ。山間地域の開発地を木場と云うんだと。開発地に木場があるわけですよ。それで、その開発の当初は焼畑だったということは、それはほとんど間違いないですよ。そして、山間地域ですからね、どうしたって普通のやり方では畑にならん。だから、焼畑にするというのが当然でしょう。そして、そこに人間が住むようになって部落を構成すれば、その部落も木場・〇〇木場とよぶようになって行くわけですよ。そして、それが地名化すれば、ずーっと残りますからね。ただ普通名詞の段階で止まればね、これは途中で消えるかも知れませんが、地名化すれば、これは消えるものではないですよ。人間が居る限りはですよ。

江平 木場については、地主・小作の関係で見ると、小作地が多かったように思います。



桐野 昔はそうでしょう。

江平 だから、そういうことで、あまり好まれないということですよ。

平田 桐野先生が云われた地形地名というのは確かに、まあそうですね、6へ7割あると思うんですよ。それから、2へ3割が歴史地名でしょうけれども。そういう地形の所が、いつ頃開発されたかということが、地理と歴史の接点になると思うのです。そういうところには、今日の佐野さんの説明でもあったと思います。それから、地名の中には信仰的な地名がたくさんあるわけですよ。たとえば、No.2のですね、検校はやっぱり僧侶に關係のある地名でしょう。太羅・王子、それから伊勢谷、これは伊勢信仰ですよ。八王・西海寺、こんなものもやっぱり信仰地名ですよ。それから豊後連、国号地名というのはその性格を追求しなければいけないでしょうけれども。

中村 豊後連。私もだいぶ調べたことがあるんですけども。ちょうど霧島から西分へ抜ける道がありますね。あそこに鉄道のガードがあるんです。鉄道の下を通って。その一帯なんですけど、ちょうど行った時悪かったんですけども。なぜ、此処に豊後という地名があるのかということですね、行ったのですが、正月六日頃行ったら、たまたま公民館にお年寄がたくさん集っていたもんですから、いろいろ聞いたら、中世に豊後の兵と薩摩の兵が此処で戦ったんだと云うんですけども、どうもそういう事実は歴史に見出し難いのです。そして、すぐ近くの山の中腹にですね、石塔などがたくさんあるんです。それで、正月六日になにか行事があって、お年寄が焼酎を飲みながら、なんだかんだ話したもんだから、こーちも混乱して来て判らなかつたのです。

もう一つお尋ねしたいのですが、佐野さんのお話を聞いていまして、門地から木場があって、拘地へと移って行くというのがありますが、一つの時代でもあるわけですね。たとえばですね、金峰町の尾下（オクダリ）という所がありますね。あそこは、門がはっきり判る所です。ところが、あそこに行って人々に聞きますと、もともと自分たちは山の中から出て来たんだと、降りて来たんだと云

うんですよ。そして、その向うと、古い家はまだ往来があるんだと、いう所もあるんですよ。それでね、その山は木場だと思ふんですよ。だから、逆に木場から門地へという時期もあると、そんな気がちょーとするんですけどね。

佐野 それでですね、これは唐鎌先生も云われましたが、たとえば縄文時代とか弥生時代とかに、どこに集落を構えるかと云ったようなことなんかからですね、今どこをわかれわかれは沖積低地のこんな広い所が良いう云っているけど、時代によっては、一番良い空間とかあるいは土木技術上どうも出来ず、むしろ山間地であれば、水もあり、適当な耕地もあり、そんな所が非常に生活し易い。そして、近世ですか、時代が下ると共にだんだん土木技術も進み、門の改革も必然になって来るということで、新しく門を開いて行ったと、そういうことは考へられませんか。

中村 それで、尾下でいろいろ話を聞きますと、尾下は水田がありますけれども、かなりの湿田のようですね。田圃を作る時には、松の木を田圃に敷いておいたんだと。そして、今でも田舟を使ってね、収穫をやるんだと云うんですよ。下に降りて来るには、相当苦勞されていると思うのです。

佐野 堀川と云うんですよ、あの辺にあるんですが、万三瀬川の支流が入っているんですが、あの辺は、大体、縄文の頃までは浅い海だった。それで、早く云えば、沖積化が進んでいない湿地と云うんですよ。そういう意味では、耕地としてはあまりよくないし、新しいのでもないかと思ひます。

桐野 今のところ、木場から門に。つまり私がさっき申し上げたことの逆の現象もあるのではないかと。これはあり得るわけですよ。なんと云っても、開発の古い所がどこかに移動するわけですからね。それで、木場というのは中世の開発で、開発が非常に古い。なぜ山間の所が古くから開発されたか。それは、私は日本国中の集落がどういう傾向にあるのか知りませんけれども、私が調べました結果ではですね、かなり古いんだと云います。今、尾下の方に降りて来たと言われたが、後になると尾下から向うの大坂（ダイザカ）の方へ逆に



行っているわけですよ。だから、前は大坂の方から尾下へくだって来たし、古い開発地の人が新しい所へ移って来るというのは考えられるわけですけども、まあしかし、そういう山間地域というのは、割合に、想像以上に古いんだと云える。というのは、その当時を考えると、山間地域というのは、なにせ水が豊富なんですから、日照が悪いという点ではありますが、水が豊富なんですから。そうすると、弥生時代の日本は米を作るということが第一の進歩だったわけですからね。だから、山間地域は水があるから、ちよーと手を入れればすね、米を作れる条件にあるわけで、生活していきける非常に良い条件にあるので、山間地域の開発は進んでいたとみてよい。それからもう一つは、鹿児島県のような所はすね、たえず台風が来るでしょう。ところが、山の中のそういう谷間の所は、台風に対して安全なんですよ。そういうようなことも云える。それから、古い時代の人の生活空間としてはすね、ちょうどまとまった良い広さの生活空間であったという事も一つの条件になり得る。まあ、そんな事も考えて、そして実際に事実を調べて行きますと、開発が古いもんだから驚きました。

郡山先生という方がおられました、中世の研究者でしたから、それで、私はあの先生にそう話をしたことがあるんですよ。あの時は、先生から、しばらくしてから讃められてすね、いや、あなたの云うとおりだと、そげんやっどと、中世の山間地域というのは古いということもあの先生も云わねましてね、私も力強く思うことで、私たち地理的な立場から調べたのと、やはり一致して来るもんですからね。

それで、まあ、山間地域は古いんだけれども、だんだん時代が下れば下るほど条件が悪くなって来るわけですからね。条件は悪くなるわけですから、門がどんどん出来る時代になっても、その木場の方面までに門が及びかねるという場合もあったと思うんですよ。それで、実際の門の集落というのは、木場の手前。それから、その木場よりもっと条件の悪い所は、まあ、近世になって、門地の場所になって行く。それはすね、佐野君の大発見じゃないかと思っておりますがね。

佐野君を讃めてやっていいですよ。

江平　ちよっと、ひとこと。尾下のことですが、中世関係の史料に山之口と云うことで、狩猟民がいたことの文献があるみたいですよ。だから、そう云った山間狩猟民が尾下の話と関連づけられるかも知れんと思うんですが。

平田　今日は木場とか岳とか浦とか、追求すべき具体的な地名が出て来ました。穿鑑(牛尾)を崩壊地名だと考えると、シラス地形には崩れる地形名が多いはずですから、そんなことを鹿児島県の地名研究ではテーマとして追っかけて行けるかと、いうことですよ。

桐野　そうです。それはね、シラスの急崖があって、それがどんどん崩れて行くんですから、それに困んだ地名がありそうなもんだと思うんですよ。こまかく調べて行けば、ないことはないと思うんです。必ずあるに違いない。ただ、崩れることを「クエル」というでしょう。「クエ」という地名はあるんですよ。

平田　多いですよ。

桐野　崩(クエ)という地名はある。

永山　崩という苗字もある。

桐野　それは確かにあると思うんです。だから、そういう鹿児島県独特の崩(クエ)とか浦(ウラ)とか木場(コバ)とか、そういう地名もまとめてみるということも、いいんじゃないか。やっぱりね、こういう地名研究会があれば、鹿児島県の地名の特色を出してやるということは、県民にアピールする価値があるのではないですかね。

平田　大事なサービスでしょう。(笑)。

桐野　まあ、地名研究に一つの魅力をもたせるなにかを。まあ、郷土教育を教育委員会の方々は必かましく云うちよいいわけですからね。郷土認識のために、いいのじゃないですかね。

本田　崩(クエ)なんてのは知られていないが、日本語の標準語でしょう。

平田　古語にあるんですよ。



桐野 鹿児島弁でも“崩える”というから。

本田 昔は父のほう標準語だから。

桐野 それはいくらでも。鹿児島弁は昔の標準語だから。“あいがとどざした”というのも、昔の標準語だから。ただその、崖がね、他と比べて、地名化しておいても、数が少ないということなんです。あれが、生産にあまりつながっていないものだから。「段」とか「平」とかいうような所は、生産に直接つながるわけでしょう。だから、地名化する例が多いと思うんですがね。ところが、崖はね、崩れて生産どころではない。逃げかて、もう、のさんじゅうたという所ですから、それであ、地名まで成長せんじゅうたのじゅうたいでしょうかね。

平田 いね、先生。逆にあれですよ。崩れる地名を知らせとかんと、そういう所が開発されて災害が起きるわけですからね。そういう警告を発することにもなりますよ。

江之口 数は少ないですけど、たとえば「ホキ」とか「ホケ」というものが確かにある。あるいは「フケ」、湧水地。あるいはまた針原(ハリワラ)という開拓地。それから、上床とか大床という「床」ですよ。岡でもない、台でもない、原でもない、一つの地形用語。それから「坂」とか「尾」とかという地形に関する地名というのも、複雑な地形であればあるほど、その数も多いはずですから。

桐野 この「ホキ」というのは、いけな字を書くの。

唐鎌 土ハんに穴(坑)です。

桐野 土ハんに穴で、「ホキ」と読むんですか。

平田 今、出たんですけど、「床」というのはどういう地形地名ですか？床の間のようなニュアンス？

江之口 一応そうですね、床の間のような所。一段高くなった状態ということで、岡とか原とかは本来は区別していたようです。

永山 鹿児島市の西の方、岡別村に、炭床(スミトコ)というのがある。

江之口 炭床はまた別かも知れませんが。あの前床、マエトコとかメトコと云

いますが、眼の前にある障碍物といいますが、出た所をそう呼んでいます。

肥後 興味ある話がたくさん出て来ましたが、時間が来たので、これで終わらせていただきます。

#### 〔付記〕

(1) 問題提起・発表などのご希望、またはご要望があれば、遠慮なく申し出て下さい。

(2) 桐野先生ご提案の鹿児島県独特の地名を今担して調べたいと思います。

迫・平・段・原・野・宇都・谷・坑・浦・牟礼・前・宇塩・鹿倉・木場・岳・牟田・水流・流合・間・名・(敷) etc.

ご希望の地名をお選び下さい。現在、「小字一覧」から総管調査で「平」をリストアップし一つありますが、県内は4000〜5000の「平」を含む小字があるようです。リストアップ後、整理をすればなんらかのものか把握できると思います。

(3) シラス地名でなく、自分の苗字に関係ある地名を選ばれるのも、一つの方法だと思います。

(4) 居住地もしくは郷里の地名から調べるのも当然必要なことです。

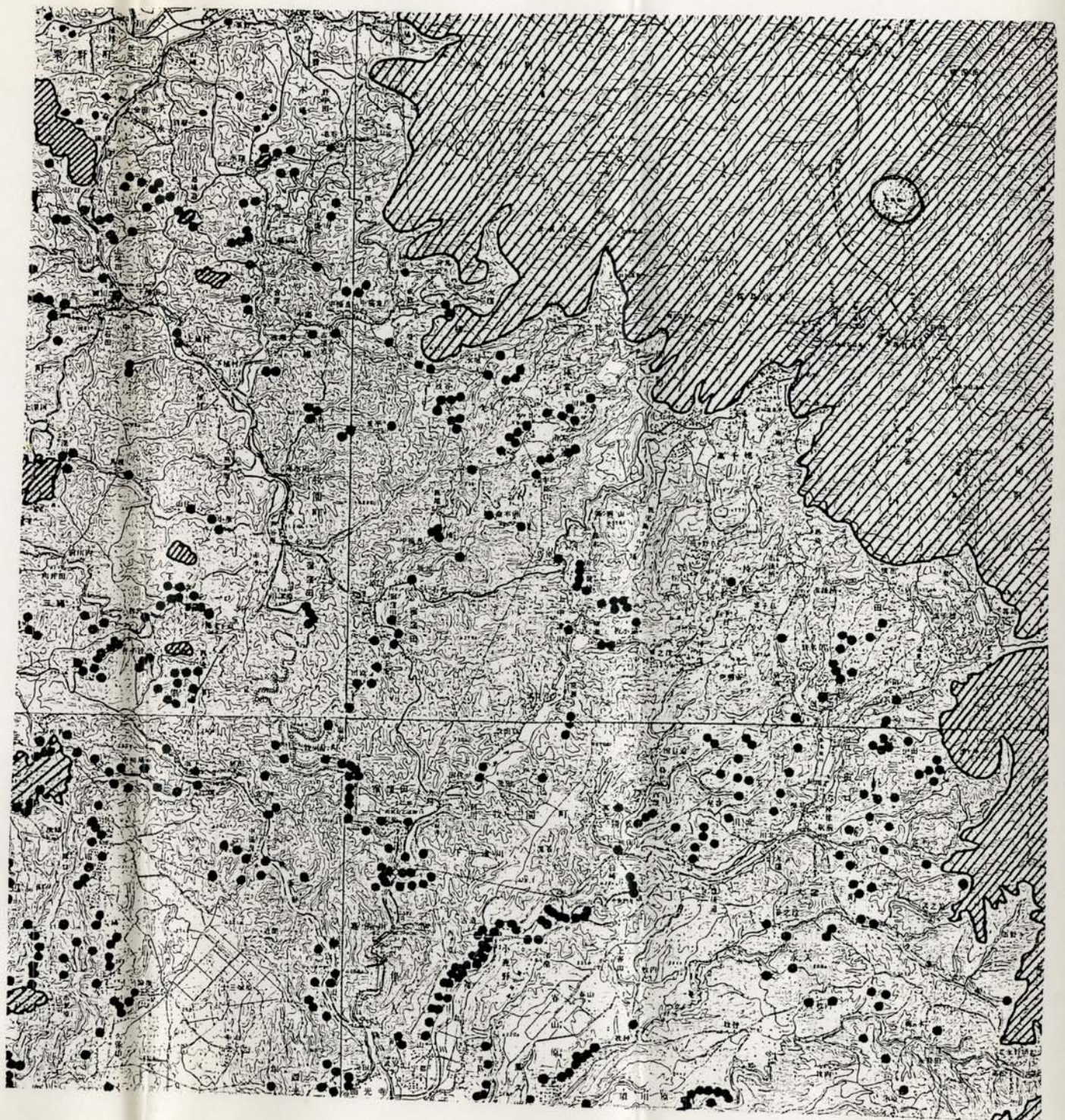
とにかく、今担して調べてみましょう。



(1) 台地の分布 (桐野原図)



(2) 霧島山麓の湧水分布





### (3) 霧島山麓の小字名と地形

No.2  
(角川・日本地名大辞典)  
で作成

地形 小字名 町・小字数	シラス台地				シラス侵食谷				低地		特殊な小字
	原	段	平	野	迫	谷	湮	宇都	牟田	水流	
財部町 636	(43) 6.8%	(23) 3.6%	11 1.7%	9 1.4%	(26) 4.1%	(42) 6.6%	9 1.4%	4	0	2	芒黄 ツル 檢枝
霧島町 184	(20) 10.9	2	1	6 3.3	(23) 12.5	7 3.8	4 2.2	0	0	1	草場(2) 市後柄 泉水 豊後迫 東多羅 王子原
牧園町 993	(82) 8.3	14 1.4	27 2.7	1	(195) 19.6	30 3.0	9 0.9	4	1	0	成政 下符鳥 伊勢谷
栗野町 476	(29) 6.1	2	9	8	(32) 6.7	11	3	2	4	1	牧野(2) 水湮 水堀 大水堀 大王
吉松町 263	8 3.0	1	4	0	7 2.7	5	0	2	0	6	ヤツ 妙 ハ 王 カ 財 西 海子 ウ 子 宇 塩
Total 2552	(174) 2位 6.8	(42) 5位 1.6	(52) 4位 2.0	24 7位 0.9	(283) 1位 11.1	(95) 3位 3.7	25 6位 1.0	12 0.5	5 0.2	10 0.4	

11.3%

16.3%

0.6%

※ 1位(迫)11.1%, 2位(原)6.8%, 3位(谷)3.7%, 4位(平)2.0%, 5位(段)1.6%



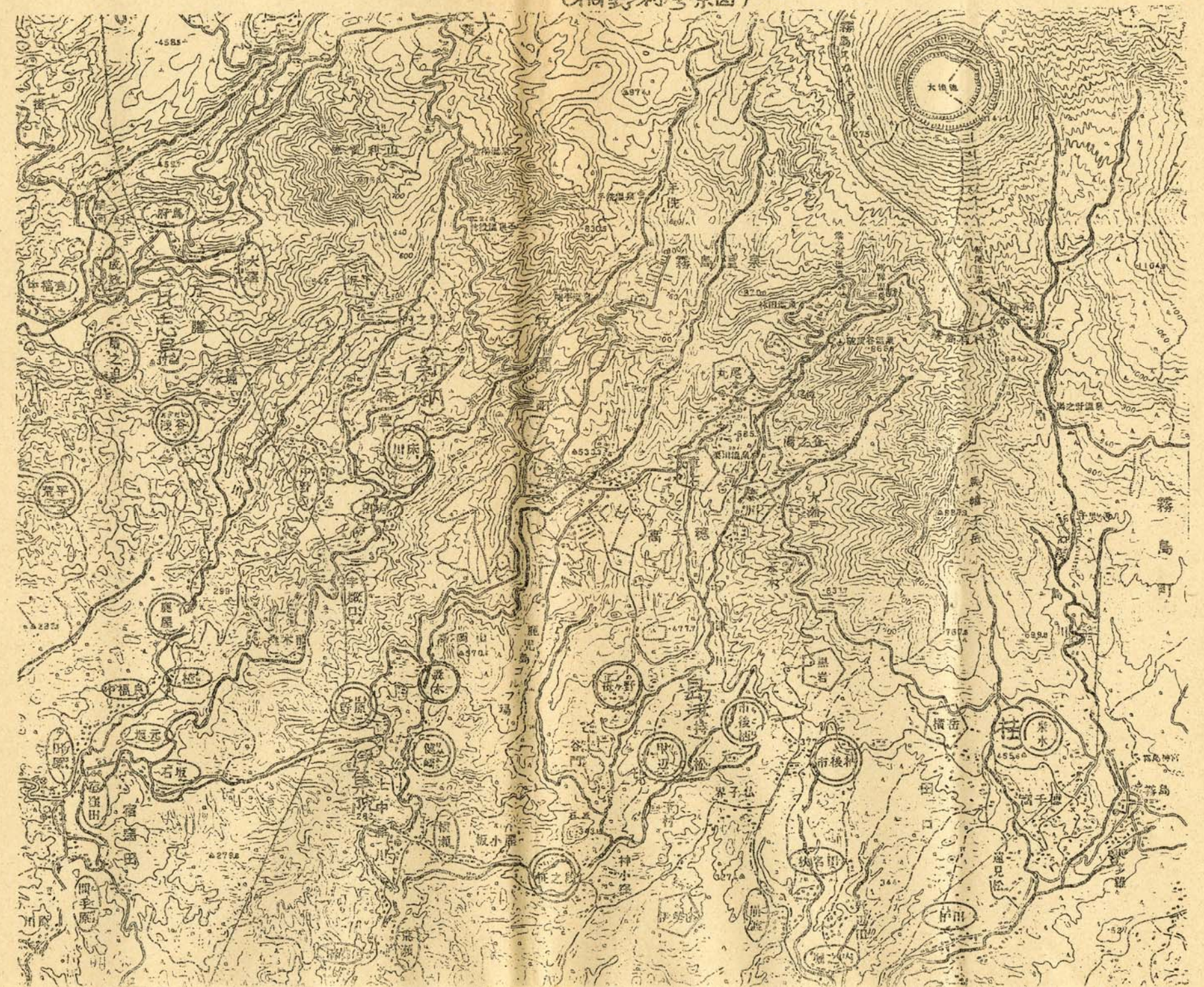
# (4) 霧島山麓の開発

(相野利考原図)

◎ 抱地

○ 門地

◇ 明治以後の開発地(除温泉地)





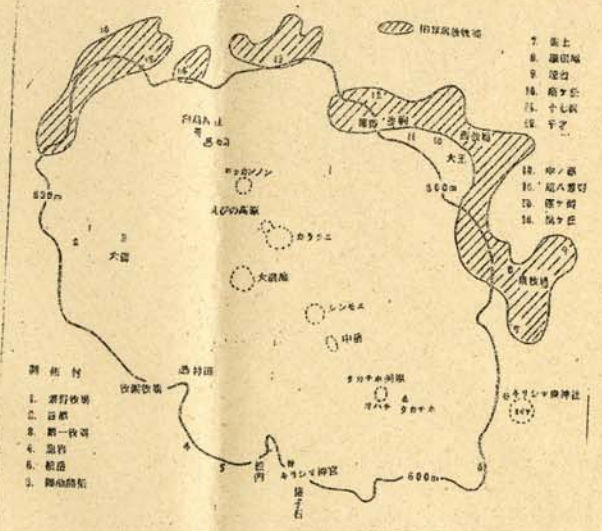
# まとめ

- 霧島山麓は南九州一の大湧水地帯である。
- 上水道設置までは湧水にほとんど頼っていた。
- シラス台地はよく侵食されて、シラス侵食谷がよく発達している。(迫, 谷, 原, 平, 段などの小字が多い。)
- 西目からの移住者が多い。
- シラス低地は古くより開墾地として開発(シラス台地には抱地が多い。)
- 火山斜面は明治以降の新しい開拓地である。
- シラス台地に 原, 平, 段, 野

“ 侵食谷に 迫, 谷, 窪, 字都 } などの小字が分布している。  
 “ 低地に 牟田, 水流

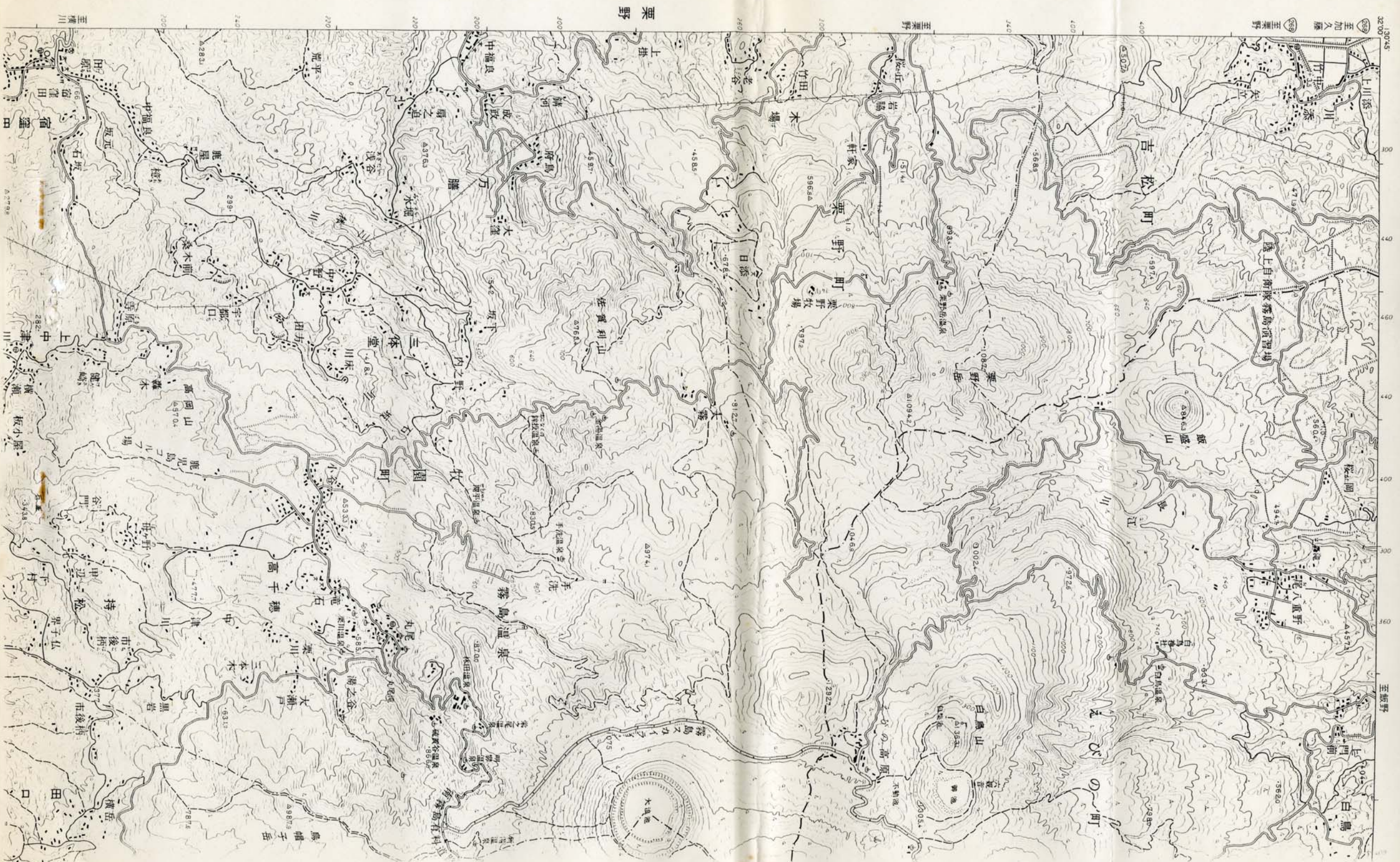
開拓村	入植年次	記事
大王開拓	大正 8年	霧島大噴火の難民 52 戸, 島津氏の杉山伐採跡地に入植、標高 800m 緩斜面
生駒・環野開拓	昭和 22年	旧陸軍放牧場の払下げ、引揚者など 500m 前後の高冷地、漬物用大根など
大霧開拓	昭和 21年	国有林の払下げ、満洲開拓団の引揚者 800m の高冷地、酪農、後継者の確保
猪子石開拓	昭和 20年	旧陸軍演習地の払下げ、当初 70 戸入植 昭和 50 年大手開拓業者退出、現在 1 戸

(5) 霧島の開拓村(明治以降)



火山山地斜面が開拓村





栗野

吉松町

栗野町

陸上自衛隊霧島演習場

飯盛山

白鳥山

大風池

鳥帽子岳



# 地名研究会報

第10号

昭和60(1985)年12月8日

鹿児島地名研究会

## I 第10回例会 9月1日(日) 教職員互助組合会館小会議室

(出会者) 江之口汎生・江平 望・小川亥三郎・片岡八郎・唐鎌裕祥・  
桐野利彦・佐野武則・永山徹弥・花園正志・肥後芽尚・平田信芳・藤浪  
三千尋・二見剛史・本田親虎・松田 誠・山口静也(16名)

## II 鹿藩名勝考証会 P.21~P.24

[話題となった地名および事項] 隈之城・宮里・志奈尾・平佐・  
白和・寄淵・又見崎。

### 隈之城(クマノジョウ)

平田 今日箇所では隈之城の「クマ」とか、宮里の「ミヤ」とか、それから志奈尾。東手はいいですね。日暮はそこに説明があります。平佐とか白和。その辺が問題になろうかと思えます。隈之城の「クマ」については、『千台13号』に小川先生が「クマという地名」を書いておられ、二通りのクマを説明されています。溪谷や盆地を意味するクマと、山を意味するクマ。鹿児島県には山を意味するクマが多いと。確かそうでしたね。小川先生。

小川 そうです。

平田 地名用語語源辞典などを引きますと、千曲川のクマ、川などの曲った所。それから隈之城のクマ。鑑餉隈なんてのがありますが、これは奥まった所とか隈(スミ)。辺鄙な処という意味らしいです。それから、神様に供える米、供米によった地名か?という見方。それから、動物の熊に因んだ地名など、9通りほどあげてあります。鹿児島県の「クマ」という地名を拾いあげますと、90ぐらいの小字があります。それらを見ると、一番多いのは、やっぱり動物の熊の地名が多いような気がするのですけれども。例えば熊ヶ谷。熊が出そうな谷とか熊ヶ迫

とかですね。熊ヶ山とか熊ヶ穴なんてのは、明らかに動物の熊だろうと思います。それから、隅っこの方の「クマ」という意味もあるでしょうし、山を意味する「クマ」があるかも知れません。人の名前の「熊」というのもあるでしょうし、また、熊という動物は日本では一番強い動物ですから、昔の人々が熊そのものを神として扱った場合もあるかも知れません。鹿児島県にはともとも熊襲という地名または隼人以前の存在というのがありますので、鹿児島県の「クマ」という地名は、どのように考えたらよいのでしょうか。小川先生、その辺のお考えをちょっと説明していただけないですか。

小川 『千台13号』では、山を意味するクマとか、あるいは谷に対する小高い所にクマという地名が多いことを述べたのですが。

平田 国分には「国分の七隈」という表現がありますが、あれは曲った所という意味があるのではないですか。それとも全部小高い所ですか。

小川 みんな、山です。

平田 みんな、山ですか。

小川 たゞしは、平隈という所があります。これもやっぱり微高地ですね。隼人町に隈之城という部落がありますが、ここも山です。川内の隈之城は、城の名前だと思うのですが。

片岡 動物の熊の場合ですね。南九州に熊が居たのですかね。

平田 居た可能性はあるでしょう。

片岡 見たこともない人の方が多かったのではないのでしょうか。

平田 えっ?

片岡 熊を見たこともない人が。北九州の背振には居ったような話ですね。南九州に熊は居たのだろうか。

平田 南九州でも昔は寒かった時代があることが考えられます。

二見 熊野神社というのが方々にございますね、全国的に。

平田 あれは熊野信仰がひろがって、熊野神社に因んで熊野という地名が付



いていと思うのです。

二見 それが下って、南まで来たという考は？

平田 熊野はそれで説明できますが、その他の「クマ」はちょっと説明できません。肥後先生、先生は長く高隈に居られたのですが、高隈というのは分類してもよく判らないのですが。

肥後 入りくんだ所という説が多いのではないですか。

平田 入りくんだ所ぞ高い所？

肥後 入りくむというのは山むたですね。山むたが入りくんだ山系ですね。

永山 大口に高熊山という山があります。

平田 鹿児島県にはタカクマというのは6ヶ所ほどあります。指宿の十町と十二町に高熊。加世田市津貫に高熊があります。杵崎市西鹿籠にも高隈、大口市木氏に高熊があります。また反対のクマタカというものもあります。これは熊鷹という鳥がいますから。

肥後 それは熊鷹でしょうね。今いわれたそれらの地名は、ただ字名を拾われただけで。

平田 はい。鹿児島県に「クマ」が付く地名が90ヶ所あるということだけです。まあ、クマというのはクマソと並んで難問だということを残しておきましょう。

### 宮里(ミヤサト)

平田 今、カードを回していますが、鹿児島県地名大辞典の「宮」の付く地名を全部拾ってあります。「宮」の付く地名を拾って一番驚いたのは、宮田という地名が182ヶ所あることでした。これは「宮の領地」ということでしょうか、ほとんど村ごとにも宮田があると思えます。宮里は2ヶ所しかありませんが、これもまあ、神社の領地という意味なのでしょう。ところで、川内では宮里のことを「ミヤシト」と云いますよね。それは宮人(ミヤヒト)なのでしょうかね。宮人(ミヤヒト)という地名は大口に1ヶ所あります。まあいずれにせよ、宮里というのは神領の意味でしょう。ただ、「宮」という地名を大事にしなけれ

ばならないと思っているのは、宮前・宮三前が29ヶ所、宮下・宮ニ下が27ヶ所、宮脇・宮三脇が65ヶ所、宮原・宮三原が39ヶ所、宮ヶ迫が29ヶ所、宮三後が38ヶ所、宮三上が28ヶ所あることで、こういう「宮」地名を抑えていくと、どの神社が「宮」とよばれていたのか、はっきりわかることになるからです。たとえば、川内に宮下団地というのがありますが、あれは明らかに新田神社が「宮」であつたわけですから、「宮」という神社は、三國名勝図会その他で見れば簡単なんですよ。けれども、小字を確かめて、「宮」がどれであるかをつきとめる手段になる大事な地名だと思つておられるのです。宮下を調べますと、さっき申しましたように29ヶ所あるわけですが、以前問題になりました宮下(ミヤゲ)というのは高山町1ヶ所しかありませんから、「ミヤゲ」というよみ方はおかしいと見当がつくのです。川内の方はいらしていませんが、宮里は「ミヤシト」と云いますよね。ミヤシトは人ですか。

山口 私はよく知りませんが、昔の人は宮里を「ミヤシト」と云ってました。此頃の若い人は、あんまり云わんやうですね。

平田 そうすると、みんな、ミヤサトですか。

山口 はい。時によっては、昔もそう云ってました。

### 志茶尾(シナオ)神社

平田 その次の志茶尾神社ですが、「シナ」の考は方には賀茂真判の「階坂(シナサカ)」という考の方と、本居宣長の「科の木」という考の方の二通りの説が昔からあります。科の木説を厳密な意味で唱えたのは谷川士誠という学者のようですが、本居宣長は「科の木」の別名が「シナ」だといっています。木の名前によっているか、階坂という階段状の地形で傾斜地を指す地名とするかのどちらかでしょうが、これは信濃国の国号とも関わって大きな論争点となっているのですが、現在のところ、傾斜地・階段状の地形という地形地名説の方が有力のようです。ところが、日本地名索引で「シナ」のつく地名を整理してみると、シナノキで解釈できる地名も半分近くあるし、シナサカと解しても良い地名もありま



す。この両方の解釈が時と場合によって使い分けられても良いのではないかと思います。たとえば品ノ木・級ノ木という地名は明らかにシナノキでしょうし、惣科高原などのようなものは蓼が生きている傾斜地と理解した方が良さそうです。その他、仁科とか保科など人の姓になっているものや、有名な地名で更級というものもありますが、なんと理解してよいか判りません。このような解釈に立つと、志奈尾というのは松尾・桐生などと同じように、シナの木が生えた所と解釈するか、階段状の岡と解釈するかで二通りに分かれます。ところで、志奈尾神社のある所は階段状の岡の所ですかね。

山口 階段？ 岡の中腹にはあるのですがね。山の中腹のなだらかな所にあり、そこに石段があります。

平田 シナノ木が生えている所と考ると、和名抄では大隅国取謨郡に信有郷という郷名がありますが、これは読むとすれば、信濃とか男信というよみ方が和名抄にはありますので、信は「シナ」と読み、有は「ウ」と読みますから、信有は「シナウ」になるわけですね。そうすると、地名の解釈としては、シナノ木の生えている所という地名になります。そういう地名ならば理解できます。以前、信有(シン)郷かと、ごまかした、というよりは、それで追求を打ち切ったのですけど、志奈尾を解釈してみても、信有もシナウ・シナオと読めば、意味の通った地名の付け方になるかと考えました。それで、シナノ木というのは？

肥後 現在、こっちはないですね。

平田 ないのですか。

肥後 さっき云われたように、ずーっと以前には、

平田 寒い時代ならば。

肥後 之一、寒い時代ならば。

平田 あり得るわけですね。

肥後 之三。

本田 科の木というのは栲(タク)；コウゾの木ですか。

平田 あれは本居宣長の説です。

本田 栲といえは、皮をむいて繊維をとるやつですね。

平田 そうです。

肥後 これは、コウゾですか。

平田 タク；コウゾですね。

肥後 それをシナノ木と、以前云っていたのですか。

平田 本居宣長はそう云っているのです。

肥後 ああ、それならば、あるんですがね。たくさん。

平田 あるんですか。

肥後 之三、コウゾはね。山コウゾはたくさんありますから、考之一かなかったな。

本田 昔は、それは自生しとったでしょうからね。

肥後 之三、今でもまだたくさんありますよ。コウゾならば。

江之口 志奈尾神社のことについて、この名勝考の記事には気になる部分があります。その祭神を見ますと、住吉大神とか熊野神という説が出されておりますが、この説をとっているのは、これだけなんです。神社志料とか地理纂考を見ますと、シナツヒコ・シナツヒメとかツキトミノカミをあげています。神社明細帳にはさらに建御名方神とかヤサカトメノカミとかを加えています。だから、白尾国柱がどういう意図でこういう書き方をしたかが気になるのです。シナツヒコ・シナツヒメというのは風の神ですから、シナツ・シナドと訛ったのではないかと。本当は志奈尾でなくて志奈戸ではなかったか、風の神様ではなかったかという考三方をしているわけですね。もちろん、「シナ」という音をいろいろ検討しますと、こういう解釈も出来ますけども、この場合は違うんじゃないかなと思うのですが。

本田 志奈尾神社そのものは、私どもは風の神の「シナ」じゃないかと、今までは思っていたわけですね。栲・シナノ木という解釈は非常に面白いですね。

江之口 木のよみ方というのは非常に良い加減といいますが、定説がないわ



けです。たとえば「クマギ」というのも引いてみますと、いろんな字を書いています。地方によって、どの字で表現したかというのの不統一であり、その辺は、ちょっと、まだ、はっきりそうだとすることは云えないんじゃないでしょうか。桐と書いたり、樺と書いたりして、クマギと読ませています。柳田国男の文だと、木をそのまま今の文字にあてはめ、Aというのが今のBだというようなことは、今の所は出来ないのではないのでしょうか。

平田 確かにね。以前、「奈良なる地名」で、溝手理太郎という人と論争したんですけどね。植物というのは気候が変わると、すぐ植生が変わる。だから、植物を目印とした地名なんてのはあまり成立しないというのが溝手氏の考案なんです。しかし、一度、地名として付いてしまうと、植生が変わっても地名は残りますから、そのことを私は反論したのです。人間が普通考えるのは、木が生きている状態を見て、それを目印にして名前を付けると思っています。たとえば、桐が生きていたら桐生と付けるでしょうし、松が生きていたら松生・松尾と付けるでしょう。全体を見て、階段状の地形だから、階岡。まあ、それも良いかも知れませんが、それから、今云われたシナツが風の神というのは気が付かなかったのですが、風の名前にそんなのがありますか。

江之口 風の神の名前がシナツヒコ。神名ですね。私はここを古代の一つの職業集団ツたいな人たちが住んでいた所じゃないかなと考えていたわけです。それを実証的に証明はまだ出来ないわけですが、たとえば銀冶集団ですかね。風といえば、昨日も台風(心号)が来ましたが、古代ではむしろ、その風ではなくて、フィゴをおこす風が神様として祀られる度合が深かったのではないかと。台風から守るために神を祀るという部分もあったでしょうが、それと同じくらいの比重で、いわゆるフィゴをおこす、クダラをおこす神様ということで、そのように考えたいのです。たとえば、「嵐」という地名が大和にもありますが、あそこもやっぱりそういう場所ですから。それらを考えますと、たとえば朝鮮の辺から渡って来た古代の川内の先住民たちがあそこに住みついて、その神を祀ったん

じゃないかなというようなことを思ったりするわけです。それで、金葉が出るとか、そこまでは云いませんが、それが出てくれば、うまいもんですけど、まだ見つけ出せません。ただ、それからちょっとさかった所に、久見崎のちょっと手前には、管浦という部落があります。そこに磯長長者の墓というのがあって、川内市の石塔編に収録されております。そこに伝説があって、実際に金葉が出ます。いや、金葉でなくて青銅ですね。ですから、普通の鉄より程度が高かったんじゃないかと思うんですが、そういうようなのが実際にあるものだから、なにかそれに惹かれます。磯長長者というのは要するに、そこに黄金を埋めた人が住んでいたと、地元では今も伝えていますし、その人の墓だという大きな立派な墓、古い墓が残っています。明治の頃に、その人が埋めた宝を掘り出そうというようなことがあって、掘ったんだそうです。ところが眼が悪くなった人たちがたくさん出て、タタリだということでは止めたとの話も残っているわけです。志奈尾神社の鳥居から、10kmぐらいですかね。磯長というのにもなにか気がかかります。今の場所とはちょっと離れているのですが、周辺にそういう物語といいますが、話があるものだから。それと、志奈尾神社を風の神としますと、新田神社にもとは宮里にあったという伝承があります。新田神社はまあご存知だと思いますけれども、新田神社の末社の一つに風の宮、ニート、早風神社というのが現在もありまして、それもやっぱりシナツヒコ・シナツヒメを祀っています。ですから、その辺が新田神社に変身して行ったのではないかなというようなことを、それはまああくまでも頭の中の話で、証明は出来ないのですが、一つの可能性として考えているわけです。それと、新田神社が兄神で、当社が妹神というようなことが角川地名(大辞典)の中に書いてあります。

平田 新田神社が兄ぞ？

江之口 いや、姉の神ぞ、志奈尾が妹だということですよ。それから、宮里の地はもと新田宮の故地なりというのは、三國名勝同会がそういう……

平田 いや、こっち(鹿藩名勝考)の方が古いんだよ。



江之口 ああ、それはまだ見ていませんでしたから。

### 平佐(ヒラサ)と白和(シラフ)

平田 33ページに行きまして、平佐郷の白和ですが、鹿児島県には「佐」のつく地名が多いようです。伊佐とか平佐とか帖佐とか。これは地名語尾のような気がするのですが。たとえば、渚(ナギサ)。波打際のことを渚とありますが、これは砂浜と意識した「サ」だろうと思うのです。それと近いのではないのでしょうか。白和というのは、白羽という神様でもあれば良いのですが、それにはちょっと気が付きませんでした。また白和という地名は茨城県にも静岡県にも同じ地名があるようです。福井県には白粟と書いて、シラフと読む地名があります。白和というのは日本地名索引でも他に三ヶ所ありますので、同じような性格の地名だろうと思います。川内ではこれをシラフと云わずにシタワと云っているようです。

本田 鹿児島の間は、ラ行は出来ないのです。ラ行は。

平田 全部ですか。

本田 白髪はシタガ。

### 斧洲(オノヅチ)

平田 斧洲はどう考えたら良いのですが、斧洲という地名は。

江之口 これはあくまでも私の考えですけども。鐘洲というのがありますね。鐘ヶ洲化学という有名な会社もありますけども。あれなんかは、よくもの本を見ていますと、昔、お寺の鐘が沈んで、夕方になると鐘が鳴るという伝承がありますが、これはいわゆる差込のカネなんですわ、直角の。直角に曲った洲がカネガ洲。その考えで行きますと、斧のように鋭角に曲った洲というふうに、私は考えております。東郷の場合、白浜の所と一ヶ所と、もう一つ司野の所に一ヶ所、似たような所があります。本米どっちから起ったのかということはお出来ないんですけども。そのような斧のように鋭い洲だと考えています。

本田 昔は「オノ」とは云わないでしょうね。「ヨキ」と云うんでしょう。鹿児島弁では「オノ」という言葉は使っていない。斧研は「ヨキトギ」と云

いまして、「オノトギ」とは云いませんから。

桐野 この頃は、鹿児島弁でもオノと云いますか。

平田 ヨキまたはテヨキでしょう。

本田 使っていた人はヨキと云うでしょう。今の若い人は使わないからメリットがないのでしょう。無理してオノと使っているのじゃないですか。若い人はああいうものは使ったことがないでしょう。だから若い人は学校で習ったとおりですよ。

江之口 初見はですね、永和4年(1378)で、「鋒」と書いてありますわ。やはり、それが「ヨキ」になるんですかね。

平田 鋒はキッサキ?

江之口 鋒洲村ですね。わりには古い地名です。

本田 いい、字は同じですけども。でも本当に、それでは、いつからそのように云ったかということになるんです。

### 久見崎(グミザキ)

平田 34ページの榎野。これは榎(イチヒ)の生えている野原ということでしょう。久見崎は柏崎とか松崎とかのように、菜豆の生えている崎を考えるのが一番よいと思います。

本田 川内川の河口は、久見崎の方でも京泊の方でも、少なくとも50年前は菜豆がいっぱいあったんですよ。

平田 ああ、そうですか。

本田 はい。あの穀に入れば。三月のお別れ遠足なんかで、子供たちを連れて行きますとですね、グミだ、グミだと云って、嬉しいのですわ。食べたらんほどグミがなっていますから。

平田 それはまさしくその通り、グミが生えていた崎ということでしょう。

桐野 それは、そこから来たんだな。

本田 海岸のグミの木といえば、もう、多いもんでして、海岸に行きますと



ね、50人ぐらい行ったって、食いとらんわけです。それは多いもんでした。

平田 ああ、そうですか。私は、まあ、頭の中でそう考えていたんですが、実際に見られた人が居られるのですから、グミにまちがいないですね。

桐野 グミというのは日本語ですか。

山口 植物名としてグミがありますね。

本田 よく久見崎が京泊の辺に別荘遠足に毎年のように行きましたが、皆、グミがとれるのを楽しみにしていました。

平田 では、ここらで前半を終えて、ちょっと休みましょう。後半は、唐鎌さんをお願いします。

### Ⅲ 問題提起 唐鎌祐祥『百引郷平彦村の門地名』

唐鎌です。出身は輝北町百引という所です。家は役場の下です。小学校1年から中学校まで9年間居りまして、後は大体、形の上では平田先生の後を追っかけている感じです。現在、県立図書館の奉仕課長としております。高校時代、桐野先生から教わりまして、以後ずっと、地理の方の指導を受けております。

先般、育英財団のお金を貰いまして、百引の史料と活字化しようと作業を進めております。甲南高校にかりましたので、宮下先生と一緒にその作業を進めていくわけですが、その中でいろんな資料を見つけたので、ちょっと報告も兼ねて考えてみたわけですが、たまたま問題提起ということで、考証が特にまとまっているわけではないわけですが、門の分布図の作り方というのを自分なりに考えてみたいと思って、門の分布図の作り方としました。そういうことの一例として、申しあげたいと思います。いろいろ教えて頂ければ、幸いですと思っています。

まず、百引(ヒビキ)とか平彦(ヒラボウ)とか唐鎌とか、変わった地名・苗字ですけども、その中の平彦村の小字について見てみたいと思います。小字というのは一番最小の地名であるわけですが、この蒐集にあたっては、とくに読み方が大切だろうと思います。漢字はあまり意味がないと云ったらおかし

くなりますが、先程もオノとかヨキとかが問題になりましたが、土地の人の読み方が非常に大切な問題になると思います。

これは山添(ヤマゾエ)という所の小字の図です。これはご存知のように、字絵図といわれる土地台帳に付随した地租改正の時のものです。わざと逆さまにしたのは意味があるわけですが、普通の状態で見ただけのわけだと思います。ニ、北と書いてある所から筆入れが始まります。そこが筆口(サオグチ)になっています。たしか、この字絵図は、百引の場合は明治10年へ14・15年ぐらいの間に、最初のは作られたのではないかと思います。作った人も名前が判っています。これには書いてないですけど、別の字絵図には、筆口・筆止(サオドメ)と入れています。筆と書いて「ニツ」。一筆・二筆とありますが、その百四十七筆。最近非常に字絵図に興味をもちまして、今始めたばかりですので、あるいは間違ったことというかも知れませんが、いろいろ教えて頂ければと思います。

筆口の所は百四十七番です。そこから番号順に、一筆ごとに検地筆(間筆)を入れて行ったわけです。筆の入れ方を簡単に書きますと、(板書)、谷がこうあったとします。谷の下から、こう眺めています。尾根がこういうふうにあるとします。そうすると、谷の下の方から一・二・三……と廻って、筆をこう書いて筆止になる場合もあるし、いろいろあると思うんですが、これを見ますと迫が続くわけですね。迫があり、ちょっと台地みたいになりまして、さらにこういうふうな山になっております。それで、ここから筆口が始まりまして、ぐるっと廻って山を越えて、そして宅地へと続きます。これにはただ、宅地と書いてありますが、どう読めば良いか判りませんが、別なにはほとんど、こういうふうに書いてあります。これはなんと読むのでしょうか。

肥後 郡村宅地(グンソンタクチ)。

唐鎌 普通に読めばそういうふうになるでしょう。そして、宅地で終って、筆止になっております。そして、次の松谷門(マツダンカド)の字に続きます。松谷の所がこんな形で入りこむようです。北と北で、こういうふうに入りこむよ



うです。(山添と松谷の字絵図をつなぐ)。そして、松谷。シラスを削った谷です。ここからまた、別な筆口が始まって行きます。地形をぞすね、うまく表現しており、これをよく見ていくと面白いと思います。

ここに自分のたけ持て来たのぞすけども、シラスの谷を浸蝕した迫になった所がありますが、私が見た限り、迫というのはぞすね、崖にこう寄り添っているわけですけども、ここは通り抜けられるぞすね、迫というのは。そして、瀬戸というのは、川やなにかがあって、人が歩いては通り抜けられない所を瀬戸という。迫は通り抜けられるわけです。そして、迫には狭い平地があるわけです。こういう所に田圃があれば、迫田といっているわけです。迫は通り抜けられるということ。瀬戸と迫の違いは、そういうところだろうと思います。

また、これには、大切なことは、地目が書いてあるわけ。すなわち、土地利用が書いてあるわけ。原野とかぞすね。原野にはさらに、官地とか山林とか書いてあります。その辺のところは狩倉山(カクラヤマ)というものにもつながりますので、古い字絵図というのはそういう意味で、また、大切な文化財だと思っているわけ。いろいろ云いますが、まあ、そういうぞすね、記入の仕方を書いてあるということ。

筆入れの仕方、これは恐らく、検地のやり方をそのまま踏襲していると思います。鹿児島藩の史料を図書館で見ますと、明治10年ごろまでは県の出した史料がほとんどありませんので、明治10年以降に鹿児島の場合はいわゆる明治になったんじゃないかと思うんですが、まあ、そういうことも考えていくと、検地の筆入れのそれを踏襲してあるという意味もあると思います。それが一つ。

それから、2枚目の松谷という字を見てもらいますと、墳墓地というのがあります。墳墓地、之一と、百八拾一番。それから、一番最後の百六拾五番というのが、松谷門の乙名の屋敷です。現在、松谷リキさんという方が住んでおられます。松谷門の墓地で墓を見ますと、皆、松谷門と書いてあります。松谷門の宅地は隣の山添にあって、墓地は松谷に在るということで、必ずしも地名とは一致してい

ないのです。まあ、隣接しているわけですけどね。そういうことです。

これらをぞすね、まとめたのが4枚目の図です。作られた本人に聞きましたが、これは苦心惨胆して作られたと思うのです。私は鹿屋のも随分見ているのですが、鹿屋の場合はこれを小字隣接図といっておりますので、小字隣接図としておきました。ただぞすね、問題もあります。例えば一番下の「中ウルシ久保」という一番下あたりの大きな小字ですが、これは現在はひとつぞすけれども、この中にぞすね、約90ぐらいの小字が実際入っていたというわけ。そういう小字はどう判らなくなっているということ。必ずしも全部、小字としては残っていないということ。あるいは、この小字を三つか四つ集めて総称する地名もあるわけ。これも判っていない。そういう調査もまた、地名の研究では必要であると思います。之一、ぞすね、あとで問題にします松谷門の所在地は、図の一番上の左側に9番松谷、8番山添とありますが、その所に、実はあるわけ。

以上で字絵図・小字隣接図の説明は終りたいと思います。

次に、平房村の門、ということですが、実は私の家のすぐ近くに住んでいる親しい方ぞすけども、「おいげー、これがあった」ということで、譲って頂いたのです。今度、白引の方に民俗資料館ができてますので、そこに送りたいと思います。「安政六年、白引郷土在門面」、面積の面というんですが、これはなんということですか。面積という、地図のこと、横辻帳ということぞすね。最初は郷土年寄から、ずーっと書いてあります。あとの方は無役。それから「白引麓村土方限在門」とあって、ずーっと門の名称が載っております。そういう安政六年の門によりますと、之一と、4ページと5ページの地形図をご覧頂ければと思いますが、その右側の方に平房の門名があげてあります。平房だけの門を拾いますと、3/1あります。桜田勝則という民俗学者が白引を訪れて山林調査をされておられますが、それによりますと、白引の園田という村長が、白引の門は1/5だとはっきり云ったと書いてあります。そういうことは、昔の人はよく知っておったと思いますが、1/5と書いてあります。これを見ますと、1/4。まあ、そういうことです。



たに三は、こういうことばもあります。上平房(カンヒラボウ)は10門あったと。その左の図ですが、これにも10門ありますので、大体数は一致します。

そこで、左側のこの図。一番上に平房村の門(乙名屋敷)分布図とありますが、実はまずかったなと思っております。平房村門分布比定図とか、あるいは明治初期の乙名屋敷分布図とか、本当はそうしなければならなかったのだ、と。正式には、あとで明治初期の乙名分布図としようかなと思っております。あるいは、平房村門(乙名屋敷)分布比定としなければならぬかなとも思うのですが。その勘ちがいとしたのは、安政六年と明治のはじめの門とは全く同じだと思ったところに、失敗があるわけです。

一番最後のページに、宅地地図があると思います。宅地地図を利用して調べていきますと、屋敷がこういうふうにかたまっているわけですね。その一番の乙名どんと云えば、まだ大体判りますので、調べていきますと、こういう形で残っているわけです。それを地形図に落したのが、これだということですね。そういう形で調べていきますと、安政六年のこれにありまうように、31の門が、乙名屋敷が確認されたということですね。

この安政六年の表を見ますと、必ずしも小字と門名は一致しない。一致する所もかなりあるけど、一致しない面もある。それから、門名と姓とは、かなり一致します。しかし、ご覧のように山添というのは、ちょっと判りません。かなり調べたのですが、判りませんでした。松永さんというのは、私たちが小さい頃はよく聞くものだったんですが、どこか平良の方に転出されて、そこは丸山さんという方の名前になっております。カッゴ書きで書いてありますけれども、これ(山添)だけないだけで、あとはちゃんと残っています。例えば、永田さんとか、田村さんというのは、これは養子・跡取りが入りこんで、こういう苗字になっております。まあ、そういうことで、門名と姓とはかなり密接につながりますが、小字名とはかなりずれがあります。それは何故かという点、桜田さんも書いており、小野重朗先生も書いておられますが、非常にめでたい名前をですね、付けた結果で

す。これをご覧になりますと、全部ではないですけどね、例三は北の方に桐葉(ユズリハ)なんてのは珍しい名前だ、これは古い門だろうと思えます。福留というのは福高と現在なっています。それから伊香の資料では高吉と書いてありますが、留吉と地名があります。まあ、こういう形ですね、留と高とかが有留とかですね。「留」というのは「高む」というのと同じだろうと思えます。そういうめでたい門名を付けたということもありまして、そういうことになっていっているのではないですか。そう云ったことで、門比定地の分布図は説明がつくと思えます。ただ、例三は天神門というのは、天神園門というのがあったのですが、ありがたすぎるということと遠慮して、田井村とか吉森とか吉田とか、そういうふうに変えた例もあります。そういうことでもあります、大体、門の名称を苗字としたということが判ります。まあ、当然といえは当然ですけど、実証的に説明する必要もあると思えます。

次に平房村松谷門の史料、「陽洲肝島郡白引郷平房村御檢地名寄帳、松谷門」を見ていきますと、次のような史料があります。最後から2枚目かと思えますが、北の方に五月免とか石牟礼免とか山添と、ずーと門地が書いてあります。それから、馬鹿とか足折とか、そういうのまで書いてあります。面白いのは、上の段の右側、3番目に、「かめ」「つる」「まつ」のところに下女と書いてあります。この下女というのをどういうふうに解釈するのかということですね。これは特殊な例かも知れませんが、この資料のこのところに、これは桜田先生が見つけられた史料で、実はこれを見つけないに行ったんですけど、なかなか、これがどこにあるのか、また判らないのですけれども。その人別帳の中に、「また鶴丸門に」、一番右側の方に、「なほ在方の下人について記すと、松元門に云々」とあり、その次に「鶴丸門に」とあります。「十四歳、名頭下せまつ」と書いてありますが、これが先程いいた「まつ」にあたります。そして、「右者同村松谷門名頭善兵衛下女かめ女子にて候也、又用無之に付、右幕左衛門方へ永代売渡候由、郡見廻屋証文有」と書いてありますけれども、結局、売買されておったということ



になります。そういった門であるわけです。松谷門というのほですわね。

門地を調べてみますと、最初にご覧頂いたこの図ですが、それを史料と照らしながら考察することが出来ます。地名の研究として、まあ、こういった使い方もあるということご申しあげらるわけです。字絵図というのは、先程いいましたように地租改正の時ですから、まあ、明治5~6年から、全国的には12年に終わったとありますけれども、鹿児島の場合は14~15年じやないかと思ひます。字絵図を見ると、こういう形ですわね。田圃と畑、あるいは山林の分布が示されております。まあ、いろいろ説明したいところもあるわけですが、省略します。

五一だけですが、門地が判らなかつた所が出て来たわけですが、そういう地名は、もう、失なわれたか、あるいは私の調査が不足だったかも知れませんが、それはともかくとしても、こういうふうには、ひとつの村に、かなり分散しておいたことが判ります。門地についてその分布図が作られたのは、あまりそうないんじやないかと思ひておりますけれども、その他、割替割とか、危険分散の形とか。実態としては、門地は分散しておいたとみてよいと思ひます。

以上、小字と門の関係について触れたわけですが、地名とか苗字の分布調査というのが門の分布調査と非常にかかわって来るとことを述べたかったわけですが、簡単ですが、以上で終わります。

### 〔 質疑応答 〕

肥後 今のことについて質問がありましたら。

桐野 うしろからは枚目の資料、平房村の門の分布図というところですが、こういう分布図を相当作っていかなければ本当の歴史は判らんのだと、思ひております。それで、非常に良いのもお作りになったと思ひますが。ただ、これを作る場合に、門の分布図ですから、門というのは広がりがある。乙名と名子も居って、宅地や屋敷も分散している。隣近所にたどと居ってほですわね。点で表わすと、どこで表わすか、というような問題が出て来るわけですから。地理的にいへば、門の位置を点で示すかと、分布図になると「一点」で表わすわけですか

ら、なにか「一点」に広がりのある一つの門を示さなければいけないわけですよ。それで、乙名の宅地をもってその門の位置とする、と。これは一つの名案だと思ひますけれど。乙名の宅地をもって門の位置とする。だから、ちょっと、下の方にほですわね、門の位置は乙名の宅地をもって門地の位置としたというようにも書くべきだと思ひます。門というのには広がりがあるんですから、一点で表わすには、なにかそれを明示しなければならんわけですよ。そういうような便宜をとらなければしょうがないわけですよ。あるいは、ここには門神がおりますか。門神の位置をもってその門の位置とするとか。大体、門神というのは、乙名の家にあるのじやないですか。そうすると、さっき云ったことと同じになります。もし乙名の宅地にない場合は、門神の位置をもって門の位置とし、ということもいんじやないかと思ひます。あるいは、乙名の家をもって門の位置とする。これでもいいんじやないかと。私は、その二つの方法ですわね、これをいすれかに統一して門の位置として、その分布図を作るということが良いと思ひております。これは乙名屋敷をもって門の位置となさしたわけですから、満点だと思ひます。これ以上のものは望めない。門神の位置か、乙名の家かにする以外に、合理的な方法はないと思ひております。

そして、こうして出した門の分布図というのは、安政時代の歴史を研究するには絶対に必要なんです。歴史の方はね、これをなさらんわけですよ。なさらんというよりは、出来ないと思ひますがね。門の構成がどうであったか、こうであったか、ということばかり、なかなか盛んに研究をして、その論文もたくさんありますよ。しかし、私なんかから見れば、地理を必った者から見ればね、それは半分しかおらんと、私はいっと思ひてるのです。地理的な方法論を出してほすわね、一村の門がどこにあったかということが明らかになって、一村の状態というものが把握できると思ひますよ。門の位置でほすわね、一村の状態が把握できる。だからね、歴史家の研究の欠点を補なっていると思ひます。門の分布図というのを出してある所は、たとえば、阿久根の郷土史を見れば出てありま



す。これは甲南高校におりました郡山先生あたりが指導して作らせた。阿久根郷土史の改訂版が出ているかも知れませんが、最初に出た阿久根の郷土史には門の分布図が出ております。ああいう地図が出た時には、本当に良いものだと思ったことを記憶しておるんですが、どうしても、歴史家の研究だけではね、その実体が明らかに出来ないということも、私は信じきっているわけですよ。だから、地理の分野からそういったことを知って、そして、歴史家が研究して、合わせてみた場合に本当の実態を明らかにすることが出来るんだというふうに思います。ただ自分の分野に入ってですね、他を見向きもしないというような態度はいかんのじゃないですかね。よくそういうものを知って、そのの本質というものが判るんじゃないかと、いうふうに思います。そういう意味でね、この百引の分布図はすばらしいことです。

われわれ地理屋から云いますとね、どういう地形の所に門があったか、と。というのは、いろいろな地形には、人間の住みやすい、あるいは生存しやすい場所があれば、奥に入っていくと、非常に便利が悪くて生産のしにくいという場所もあるわけですよ。そして、ついに絶対出来ない場所もある。だから、どういう地形の所に門があったかということも、私たちは研究しとるわけですよ。どういう所まで門はあるが、それから先の険しい所、条件の悪い所にはもう門はない。門はないが、拘地は出て来る。ここに佐野君がおりますがね、私は門の次には拘地があるということを霧島山麓で云ったんですよ。そして、彼が私に返事をしてね、いや、先生、門の先には屋敷がある。屋敷の先が拘地だと。これは名論卓説ですよ。だから、そういうふうにしてですね。門地の実態をだんだん地形との関係で見とっていくうちに明らかに出来ると思うわけですよ。そういう意味において、こういう地図が出来たんだから、さらにね、こういう地図をたくさん作ることによって、鹿児島県の門とか屋敷とか拘地とかいうものが、どういう地形の所に存在し得ているかということも明らかにしたらですね、藩政時代の鹿児島の農政の実態というものが、大体判って来るわけですよ。そういう意味において、私は、こ

れは非常に良いことをなされたと思って原稿をいただいております。

それからですね、この土地台帳ですが。この土地台帳は、これは明治22年の土地台帳。土地台帳と名が付いたのは明治21年からであります。それより前は土地台帳という名前が付いておらず、明治13年、地券台帳が出来ます。地租改正をするには、どうしても一筆調査をやらざるを得なかったわけですよ。豊臣秀吉が死んだのと同じようにですね、一筆調査をやらざるを得ないわけですよ。税をかけるためにやるんだから、一筆調査をみなした。地租改正は、鹿児島県では大体、明治13年に済んでおります。その時に作ったのが地券台帳です。この地券台帳は市成には残っていると思うんですがね。あそこで見ましたから。古い役場の時代で、あそこを探しました。これは税の対象になりますから、土地台帳は税の立場の人の所管ですからね、それで、税務課長さんが持って来てね、私にね、見せるのに出したり引っこめたり。あんまり人が来ておりますからというので、見せずにまた引っこめたりするんですね。そして、また出してと。それで私は見たんですがね。また、吉利村には地券台帳が全部残っています。それで、地券台帳を使った吉利村とか市成の小字名はそのまま土地台帳に引きつがれておったわけですよ。明治13年に地券台帳が出来て、明治18年に誤謬訂正をやって、そして、正式の土地台帳が全国的に出来るわけですよ。それで、今のわれわれが見ることが出来るのは明治21年の土地台帳ですが、それはその当字の村、今の大字ごとに、1番から番号が付いて、先程筆止めと説明があった筆止めからその次の大字に行った時には「一番」になるわけですよ。そして、それは全部連続しているのです。日本全国の土地台帳でですね、途中で切れている所はないのです。全部、隣が次の番になっているわけですよ。飛んで行って、番号が付くということはないのです。だから、そこに筆目とあるでしょう。その所に、入れる → 印を書いてごらん。入れる → 印を。

唐鎌 こうですか。

桐野 いや、 → 印を。



唐鎌 はい、ここでしょう。

桐野 はい、字目。入れる方は入れる → 印、出る方は出る → 印を。  
そんなふうに書いてある所が多いですね。ここから出るんだと。その次の「一番」  
になるんだということ。そこから、その次の小字につながっていくわけですよ。

唐鎌 とる引には、ここにですね、諏訪という神社がありますから、そこか  
ら始まって、松谷があって、川になる。ここから始まって、この左岸もこうずー  
ーと廻って、またここから次の平房村の一番になります。

桐野 そうでしょう。土地台帳というのは切れることができないので、番号  
も切れていないが、土地もですね、ずーっとつながっているから、今説明なさ  
ったように村と全部廻っているわけですね。土地も切れない、飛ぶ所がない。それ  
から、番号を飛ばすことがないわけですね。そうして、あとから見ると都合が良  
いわけです。そういうところをね、あとからずーっと当てますとね、そうい  
うものを作るという当時の人の知恵というものを、しみじみ感じますがね。それ  
からもう一つ。今あなたの云ったのは、松谷明でしたかね。松谷門の田畑はどこ  
にあったか知りませんか。これはその門のある小字に全部はないわけですからね。  
みな、飛んでいるわけですから。また、表で表わしてありますね。その分布図を  
作ると……

唐鎌 いや、ここに図で。

桐野 ああ、それですか。それが。

唐鎌 小字隣接図に全部、門地が出て来たのは印がしてあります。

桐野 之一、ちょっと待って下さい。うしろから何枚目ですか。

唐鎌 前から4枚目なんです。

桐野 これが松谷門の門地の分布図ですか。ああ、そうですか。そして、こ  
の大きさはなんです。この縦線が引いてある、その単位は。

唐鎌 縦線が入っているのは、これは小字の範囲です。

桐野 小字の範囲？

唐鎌 はい。

桐野 そして、その土地はどこにあるの？

唐鎌 土地はですね、ミ、この中にあると、そこまでは判らんのです。

桐野 その小字の中にある……

唐鎌 その中にあるが、どの筆か判らんということですよ。

桐野 小字の中にはいくつかの筆が、何筆もある……

唐鎌 何筆もあるわけですよ。

桐野 その中のどれかは判らんわけですよ。

唐鎌 判らんわけですよ。

桐野 したらね、その小字のあれでもいいんじゃないかな、真中でもいい  
のではないかな。小字の真中にちょっと印をつけて、そこにあったと註書きに書  
いておけばいいわけですからね。小字の位置はその中心で表わしてあるというこ  
とを書いておけば、そうすると、大まかな分布ということは判る。そして、小字  
の大きさというのは、それな大きな面積ではないんですからね。一番・二番とい  
うもののね、大きさはそんなに広い大きさじゃないんだから。まあ、一反とか二  
反とか、それぐらいの大きさだから。それは相当離れておいても、そんなにひど  
い差は出て来んだらう。だから、表のどこかに位置を出して、そして、そこに量  
まで出しておく。量も点の数で表わして知ると、これはいい分布図が出来ると思  
います。ミ、と、そういうのをしたのが、どこかの郷土史にありますよ。その量  
まで表わしたものが、どこでしたかね。私は関心があったもんだから、その頃、  
注意をしていたんですけどね。

まあ、そうしますと、耕作の実態というもの、門割の実態というものが判って  
来る。ただ門割・門割と云ったってね、しよっちゃん、歴史の史料だけをやって  
もね、門割が判つたらんわけですよ。村の実態は判つたらんわけですよ。ただ、  
門割・門割というばかりですよ。口の先ばかりですよ、その実態は判つと  
らんのですよ。その門がどこにある、そして、その門の構成がこうであったと、



どこまでやらなければ、そして、門の割替をしたわけですから。どのように門の割替をなされたかということは、いまではなかなか判らんわけですけどね。

もうひとつの、大変いいのはですね、うしろから3枚目の右の表ですよ。ところで、右の表の一番上の見出しですがね。門名・小字の有無と書いてありますが、小字の有無というのは、それはどういう意味ですか。その門名そのものの小字名があるかないかということですか。

唐鎌 門名と同じ小字があるかどうかということですか。

桐野 門名と同じ小字があるかどうかということですね。そこで、さあ、例えは四番の松永門は、松永という小字はないというわけですか。

唐鎌 はい。

桐野 意味は判りました。そうだからと思ったのですけどね。なにかそこに意味があるのだろうかと思っていましたから。これはどうも。

佐野 ちょっと質問させて下さい。うしろから3枚目の、今のその回なんですけど、平屋門と書いてありますが、これは全部、門ばかりですか。屋敷というのは？

唐鎌 これは門だけです。

佐野 門だけですか。

唐鎌 それには、門だけです。

佐野 屋敷というのは、ないものですかね。

唐鎌 上巻引に行くとあります。

佐野 さっき桐野先生も云われましたけど、門というのは、まあ大体、20石から30石ぐらい。大体20石以下というのが屋敷。規模の小さいものが屋敷とされているんですが、それで、門がどこに分布しているか、あるいは屋敷がどこに分布しているか、ちょっと興味があったものですから。もう一つは、拘地がどんな分布になっているか。私もシラス研究で大事にしているのは、門がどこに分布しているか、畑がどこにあって、門地がどこにあるかということなんです。

もう一つは水神さんがどこに居るかということ。それから門神がどこにあるか。それから、墓地が門毎にあるものか。それはよく判らんのですけども。門の実態を調べる上では、そういった水神、要するに湧水がどこで、門ごとに祀ってあったかとか、水神があったか、それから門神ですね、それから墓地が本当に門ごとになっているものか。恐らくない所もあれば、いくつかの門が寄っている所もあるんじゃないかと思うんですが。非常に難しいとは思いますが、まあ、その辺のところをいろいろ付き合わせてみれば、もっとその実態というものが判るんじゃないかと、そういうふうに思っています。あれこれ、これからなにか比較でもあれば、それからしなければならんと思っています。

唐鎌 門の氏神様についてはですね、調べてはいるんですが、資料には載せなかったんですけどね。それと墓地の有無ですが、これは先程桐野先生がいわれた地券台帳に-----（テープ切れに気付かず、10分ばかり記録中断）

本田 -----を課したというのが、入来の例にあるんですがね。やはり、ほんの少量ですけどね。あそこ少しずつあるものを拾い集めたんだらうと思うんですけども。やはり、あったんじゃないかと書いてある。だから、門がそれと半端作っているわけですね。

桐野 そういふことはね、人間の社会であればね、ありそうなことなんです。だから、そういう例が鹿児島にあるのか。最初からそういう原則は作らなんでしょうがね。歴史が流れて行く間には、そういうのが結局普通だから。そういうものはあり得ないんじゃないかと、私は思っているということです。

本田 しかし先生。それを作っておったと云っていいんじゃないですか。

唐鎌 わかりました。まあ、地名の研究ということで話しているわけですが、私はやっぱり、地名の研究の、その体系化といいますか、知識の集積だけでなく一つの体系化といいますか、そういうことも今後話あっていかなければならぬんじゃないかと思っています。

平田 今、唐鎌さんから地名研究の体系化とか、この前、桐野先生からさう



針が出されたのですが、今日お配りしました会報9号の一番うしろ、註記の2に  
ですわ、シラス地形名というのをまとめていいんじゃないかとの提起をしてお  
きました。迫・段・原・野・宇野・牟礼などいろいろあげてあります。私は苗字  
に「平」の字が付いていますから、現在「平」の付く地名を拾いあげつつありま  
す。またさぐらいいのところですが、もう1500ぐらい拾っています。果下のものも  
拾うと400〜500出て来ると思います。それらを整理すれば、なにか出て来るた  
らうと考えています。例に出した地名を分担して、誰かどんなことでも迎ると決め  
て頂けたらと思います。半年もあれば地名大辞典の小字一覧から拾えるのではな  
いでしょうか。みんなで取りかかれれば、なにか出来るのではないかと思います。

肥後 今、この場で申し出るのですか。

平田 それぞれ、興味のある地名を選んで下さい。「平」と私が迎えます。

肥後 私は鹿倉・木場・兵など、山に関係のあるものも迎えてみたいと思  
います。

桐野 みんな、自分の希望を言うんですか。

平田 希望を言うて、手分けをすれば、なにか……

桐野 それは、あなたの希望

平田 自分が取組んでみたいという地名。

桐野 その地名の名称をいうわけですか。

平田 はい。そうしたら、同じ地名がダブっても構わんわけですけども、手  
分けをしたらと思います。

桐野 それならね、私だけ、迫関係の地名。

唐鐘 私は川の地名。河川流域のいわゆる地形地名。

桐野 迫関係の地名は、佐野君と一緒にしようかな。その方がよかぬ。

平田 江之口さん。崩とか宇塩とか、崩壊関係の地名は？

佐野 迫とですね、原(ハイ)の関係は桐野先生と。

桐野 佐野さん、対をとったね、上と下と。それですかが。

唐鐘 私はそれから、牟田。

平田 たぬか、段とか野付。

桐野 原と段は一緒だが、いいですか、原と段。

本田 それと、平までだが。

平田 平は私が拾います。500ばかりありますから。

桐野 それはな、迎っけいな、歴史の人は歴史の方から同じものを見てい  
いわけだな。

平田 はい。たぬか「浦」は。この前話題となった。

本田 私が浦三名に住んでいますから。

平田 ああ、浦三名ですか。江平先生、ご希望はありますか。花園先生、  
「宇野」は、宇野というのを全部、とにかく小字一覧からひっぱり出してですね。  
そして、それを整理してあげれば、整理がつくと思うのですか。

花園 贈於郡方面に「早馬」という神社が出て来るんですがね。地名でもあ  
るんじゃないかと思っけているんですが。

平田 早馬は既に私が扱ってあります。お父りになっても結構ですけど、  
松田さん、「名」とか「間」はどうですか。なにか中野佐あたりには面白そうな地  
名はないでしょうか。それぞれ、なにか自分のテーマを選んで迎えていただけ  
ば、シラス地形名というのがまとまるのではないのでしょうか。まあ、迎えてしま  
しょう。



白引郷平房村の門地名について (地名研究会 S.60.9.1)

唐鎌 祐祥 (県立図書館)

1. 平房村の小字地名

(1) 字絵図

(2) 小字隣接図

2. 平房村の門

(1) 安政6年の門

(2) 門名と小字名 名字

(3) 門比定地の分布図

3. 平房村松谷門(昭和4年)の門地分布について

(1) 門地とどの比定地

(2) 門地比定地の分布図

4. まとめ

「門」分布の調査

1. 文献の探索

2. 地名、名字の分布調査

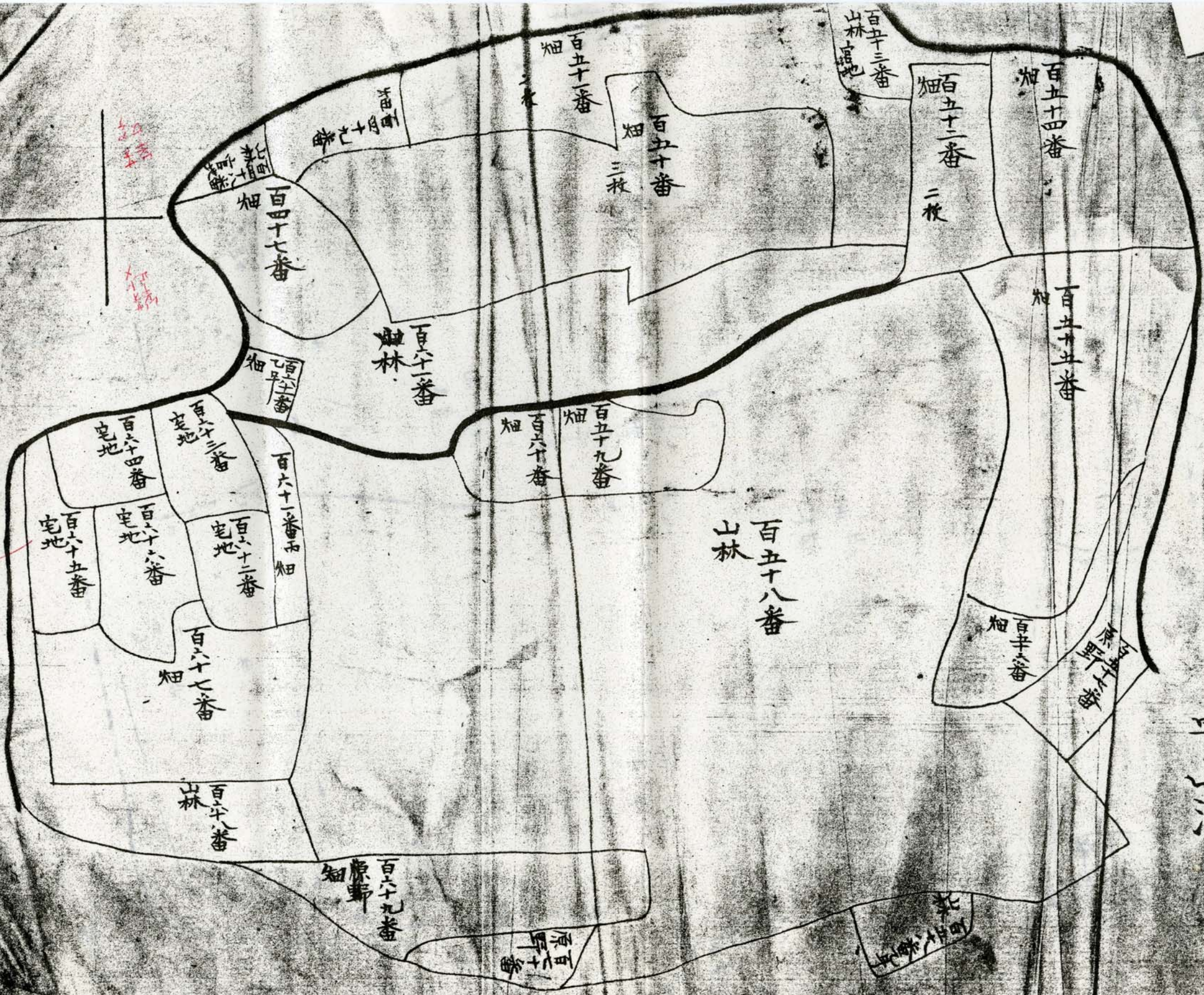
3. 聞き取り

} → 分布図の作成

(地名研究の体系化)

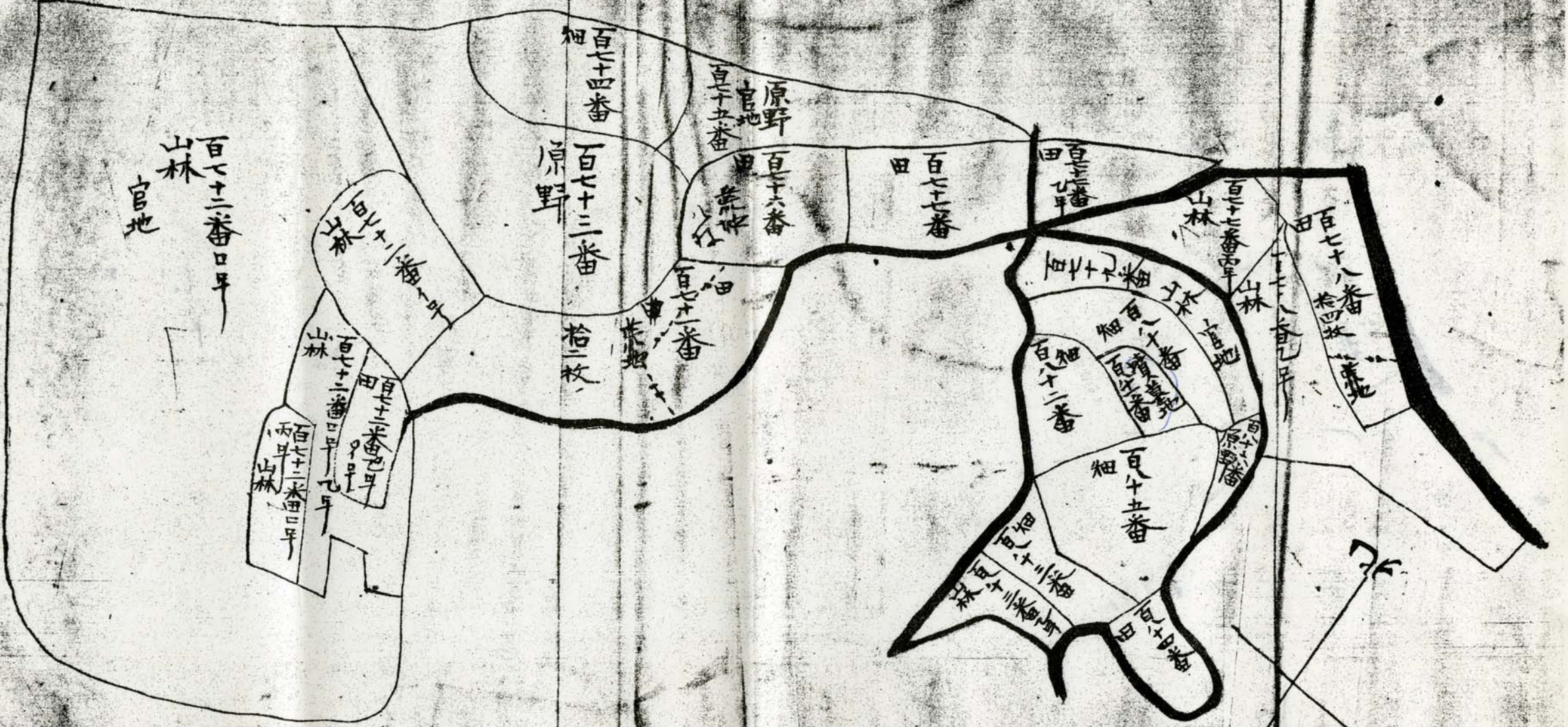


第八番  
字山添





第九番  
字松谷





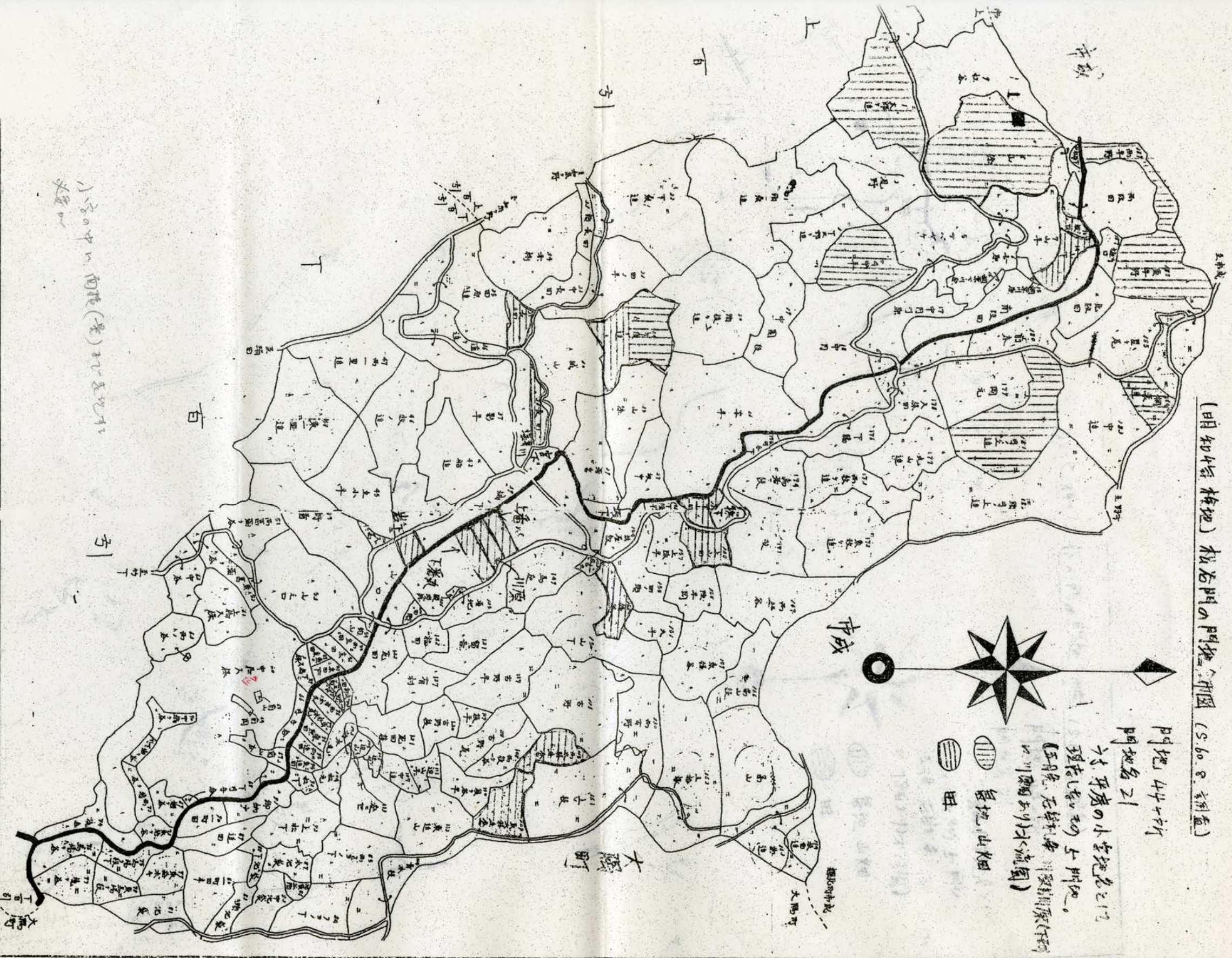
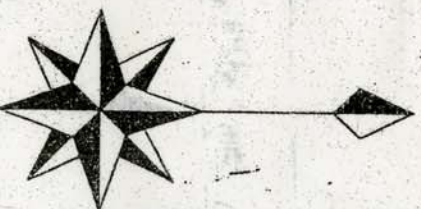
(明知44年梅地) 松右門の門地分圖 (S. 60. 8. 新編)

門地 44ヶ所  
門地名 21

大平原の小麦畑を以て  
理合し給ふ所と附地。

(五月迄、石壁村身川段新原(河  
川)限りて水流通)

-  山地、山畑
-  田



小字の中、向地(景)を以て表現す  
大馬行



安政6年 平塚村の門(7名屋敷)分布図



(右表参照)

2名の位置を以て、門の所在を表現す。  
 (各地)  
 門神の位置を以て、門の位置を表現す。

安政6年(1859)平塚村門と現在の小字・姓。(S.60.8調査)

門名	小字の有無	姓の有無	備考
1 松谷門	松谷・松谷下	○	上平房
2 桐葉	桐葉・桐葉原	○	"
3 因元	因元	○	"
4 松永	X	○	" (転居→丸山)
5 岩下	岩下・白岩下	○	"
6 井之上	井上・頭井上	○	"
7 久保田	久保田	○	"
8 丸山	丸山	○	"
9 霧丸	X	○	"
10 中村	X	○	"
11 山元	X	○	中平房
12 山添	山添	X?	"
13 地福	X	○	中平房 (現在永田氏)
14 新城	X	○	"
15 福留	X	○(福留)	下平房 (現在田村氏)
16 屋地	屋地	○	"
17 福田	福田	○	"
18 上蔭	X	○	" (転居屋敷なし)
19 留吉	留吉	○(留吉)	"
20 米森	X	○(米森)	"
21 櫻園	X	○	"
22 有村	有村	○	"
23 有留	X	○	"
24 花田	花田・花田下	○	"
25 松元	松元	○	" (現在田口氏)
26 馬庭	馬庭	○	" (転居・屋敷なし)
27 山口	山口	○	"
28 久留	久留	○(久留)	"
29 福元	X	○	中平房
30 永田	X	○	"
31 米吉	X	○	"

エズリハ

門 20石~30石  
 屋敷 規模約1.5m四方

拘地  
 水神  
 門神  
 馬地



明和4年檢地 松谷門・相地と4の比定地 (360.8調査)

松谷門々地		比定地 (小字:字絵圖 明治10年代の地名)										備考
門地名	門地数	小字名	郡村定地	墾地	田	畑	小字土地利用(地目数)				現地発着	
							原野	山林	原野	山林		
五月免	1	中田										(不明)
石井礼免	1	中田										(不明)
山添	5	山下	山添	5		17	2	5	2			松谷門の元田 地。是れ松谷に 松谷門の元田 が1原12歩
山下	1	上田	山下			17		3	1			
番丸	1	下田	上番丸			4						
			下番丸			15						
坂口	1	中田	坂口			11		4	3			
山ノ田	1	下田 (門附)	上山田			4		3				
			下山田			9						
大膳 唐倉	2	下田	*東大膳唐倉			4	3	3				堤田等記
			*西大膳唐倉			10	3					
鎌谷	2	下田	鎌谷			8	1	1	1	8	1	他に東西新谷 (畑・原野・山林等) 中長田・頭春田 などあり。
長田	4	下田	長田			9		1				
川原	3	下田	川原			10						
川原田川原	1	下田										松谷川原・桐葉川原 桐葉下田等。中門附
岩下	2	下田	岩下			16						
後追	3	下田	下後追			11	6	5				
			頭後追			13	6	4				
太郎追	3	下田	太郎追			14	7	3	1			下太郎追(畑・原野8)
井之上追	3	下田	井之上追			12	2	2	3	1		頭井之上追(畑・原野・山林)
桐葉追	1	中田	桐葉追			1	17	6	4			
水流藪	1	下田										小字なし。

明和4年4月18日 陽州所属郡引野村 領地名寄帳 松谷門 松谷ノ方所蔵

松谷門々地		比定地 (小字:字絵圖 明治10年代の地名)										備考
門地名	門地数	小字名	郡村定地	墾地	田	畑	小字土地利用(地目数)				現地発着	
							原野	山林	原野	山林		
平野	1	山畑	東平野			11	3	3				
			西平野			6	5	2	2	1	1	
榎渡	2	山畑										小字なし。 (渡口はあり)
中平	3	山畑				7	3	1				

松谷 明和4年 領地名寄帳 留鳥丸門 (一部)  
(松田 勝徳氏寄帳より。門地名のみ省略あり)

山角	下田											
水流島	山畑											(水字なし)
山下	中田	山下			17			3	1			前出
坊之前	下田	坊之前	1		6							
山ノ口	中田	山ノ口										(字絵圖なし)
山ノ口	下田	山ノ口										(同上)
追ノ山	下田	追ノ山										(同上)

引野 宗白改人別帳

なほ在方の下人についてしるすと松元門に、

一、四三歳 他入頼宗 (名前の名) 次  
吉野右衛門下人長

有長次亦水尾頼大廻利右衛門下人にては處手根兼中永井殿  
次郎方へ永代ニ買入置以得共入用無之山にて安元兼中竹井助  
左衛門方へ永代ニ買入置以得共是又入用無之間所平房村松元  
門名頭免右衛門方へ永代ニ召抱以處右登右衛門下人成之願申  
以處御免被仰付之旨云々

また前丸門に

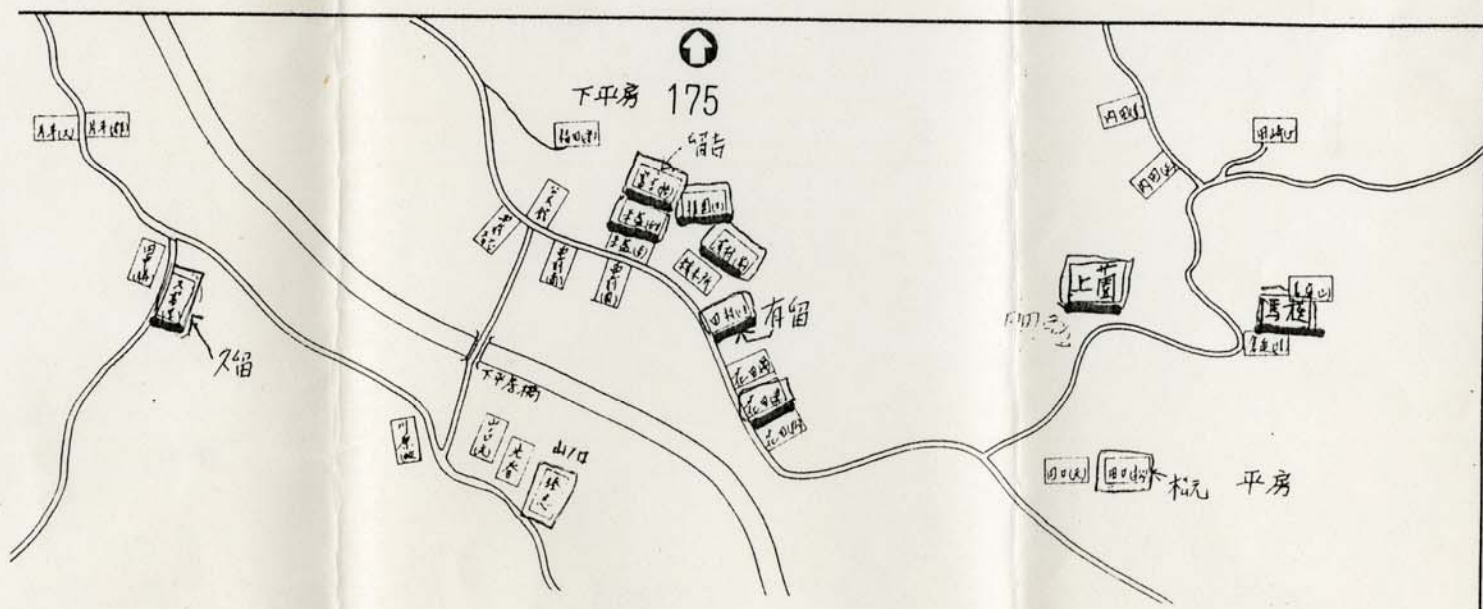
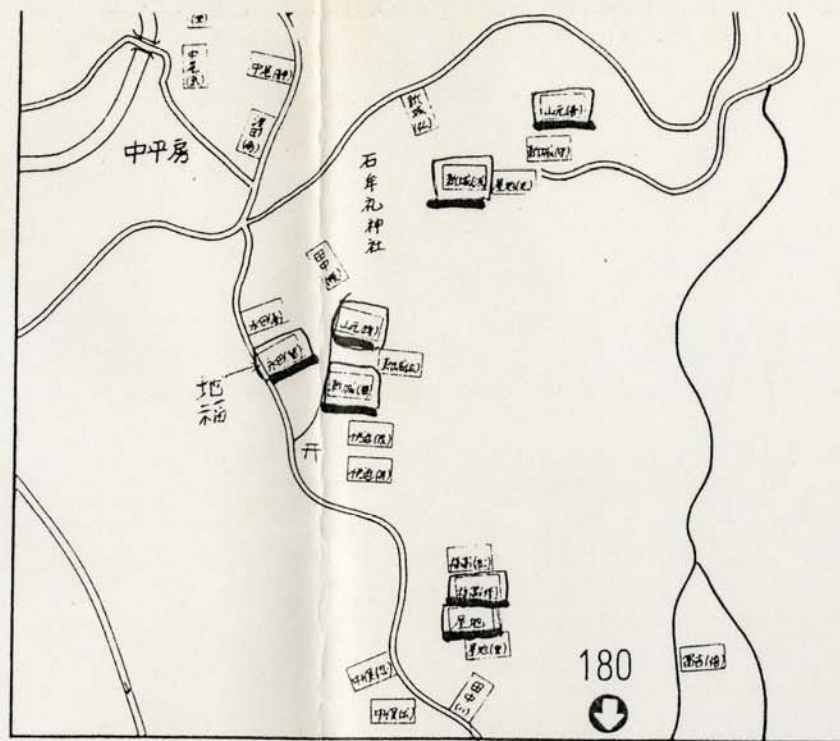
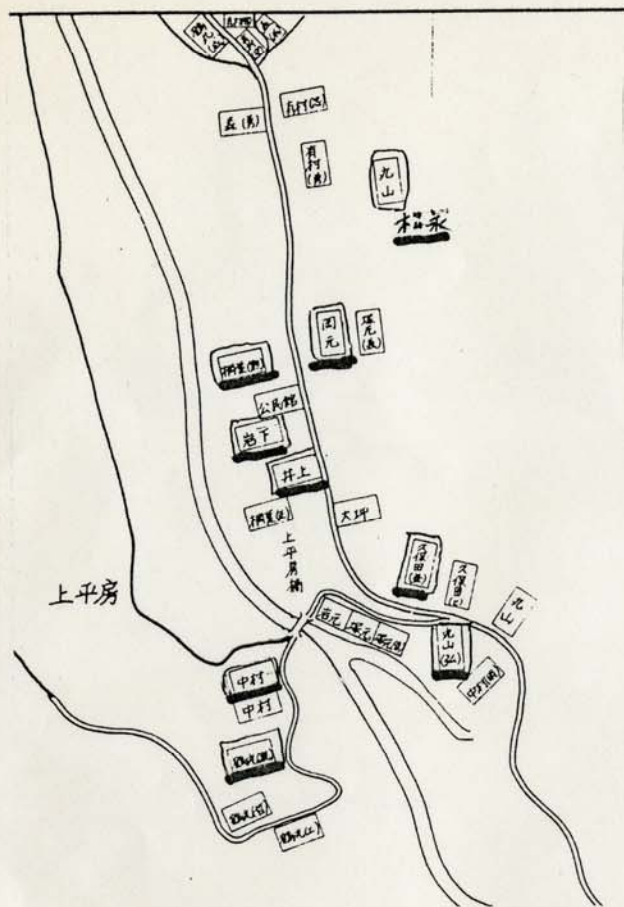
一、十四歳 眞首宗 (名前の名) 次  
吉野右衛門下女ま

右者同村松谷門名頭兼兵衛下女かめ女子にては處入用無之に  
付右左衛門方へ永代ニ買渡候山那見廻庄屋殿文有

なほ松谷門の下女かめの條をみると、此女は三五歳で  
十八歳になる娘つるをも抱へてゐるが、かめの夫に當る  
ものゝ名前はない。

榎田勝徳氏  
大隅引野村の門と氏神より





輝北町平房の宅地地図  
(旧工名屋敷分布図)  
(一部)



北御推五郎 松谷門 男八人 牛式疋  
 礼迎凸 女拾四人 馬拾七疋  
 中屋敷廿二間 式反式畦 名頭 善兵衛  
 大豆貳表貳斗八升  
 一茶拾匁 糶貳合四夕  
 一柿壹本 糶貳升  
 一柴竹三拾束  
 一當三拾壹歲 名頭 善兵衛 一同貳拾八歲 妻  
 一同貳拾三歲 名頭妹 長加免 一同五拾六歲 名頭 母  
 一同三拾歲 名頭下女 かね 一同拾三歲 右同下女 万石  
 一當九歲 名頭下女 まつ 一同六拾歲 名子息持 三左衛門  
 一同五拾五歲 妻 一同貳拾七歲 名子息持 勘十郎  
 一同貳拾歲 右勘十郎妹 七人 一同拾五歲 右勘十郎弟 太郎  
 一同六拾四歲 名子息持 權平 一同七拾歲 妻  
 一當三拾壹歲 權平子枝折 次郎右衛門 一同貳拾五歲 權平女子 けさ  
 一同拾七歲 權平女子 七人 けさ 一同貳拾七歲 名子息持 御右衛門  
 一同貳拾歲 御右衛門妹 まつ 一同拾六歲 御右衛門弟 鉄右衛門  
 一同五拾貳歲 御右衛門 母 一同八拾五歲 名子息持 善兵衛 俊家

2

中屋敷十三間 十六間 六畦廿八步 鉄右衛門  
 大豆貳斗七升七合  
 一柴竹三束  
 中田廿四間半 九畦廿七步 七町十七 吉左衛門  
 糶四表貳升  
 中田九間半 壹反三畦 七町十六 同人  
 糶七表八升  
 山添 五間半 壹畦廿五步 吉左衛門  
 糶十間 大豆九合  
 山畑八間 五畦拾八步 同人  
 糶廿一間 大豆五升六合  
 同所 十五間 九畦 伊兵衛  
 下島 十八間 大豆貳斗八升八合  
 山下 十二間 壹反拾貳步 七町十九 吉左衛門  
 糶廿六間 糶七表六升  
 下田八間 壹反貳畦 七町十四 五兵衛  
 糶四十五間 糶六表貳升  
 坂口 九間 五畦三歩 七町廿二 庄兵衛  
 中田十七間 糶貳表貳斗九升

3



# 地名研究会報

第11号

昭和61(1986)年3月2日

鹿児島地名研究会

I. 「南九州の地域文化を考ふる」研究発表会 昭和60年12月1日 黎明館

## 波見という地名 平田信芳

波見という地名が肝属郡高山町にあります。三・四日前、松の木が60本以上伐られたと報道された柏原の対岸になります。私が波見という地名を知ったのは教師になりたての昭和28年4月、学校の遠足で出かけた時です。レンゲの花が咲きほこって、ヒバリが鳴いており、そういう田圃の道をたどって松林を通りぬけると、黄色なルーピンの花盛りでした。青松白砂の海岸にルーピンの色が加わって、すばらしい景色の所だと思いました。柏原の海岸、遠足の場所として戻わしい所だと思いました。その時、5分1回を持っていましたので、珍しげに向側はなんという地名かと聞いたら、「ハミ」とのこと。波見と書いて「ハミ」。面白い地名だと思ったわけです。一般に月見に一杯とか花見に一杯とか、それから雪見酒というのがありますが、波見(ナミミ)で「ハミ」。これは並みの地名じゃないなと思ったのです。

地名を調べるようになってから、月見山とか月見岡という地名は見ましたが、花見とか雪見とかですね。そういう風流な地名・優雅な地名というのは、地名になじまないということも知るようになりました。だから、波を見ろということでは波見(ハミ)と付いたのではないと、疑問を持ち続けていたわけです。

固分に赴任し、大隅国府周辺の小字復原をやっておりましたら、資料にあててある隼人町見次・固分市野口に龍波見という同じ波見の文字を使う地名のあることを知りました。龍波見(タツバミ)という所はどういう所になるかということ、現在、ソニー固分工場がある所の向い側になります。新川の右岸の台地が浸蝕作用で大きくえぐりとられたような地形になっています。そこが龍波見という所

になるわけです。これは龍が食べたという発想から付いた地名だと直感しました。昔の人は、大雨が降って土地が崩れると、これは神の使者である龍が食べたんだとか、神の使者である鳥が食べたんだとか、神の使者である猿が食べたんだというふうに考えたに違いないと思ったわけです。この点に関して、私、民俗のことに暗いので、民俗関係の先生方、県内に龍食とか鳥食というもので、なにか祠を設けて祀ってあるような所をご存知でしたら、後で教えて下さい。

龍波見; 龍食が浸蝕崩壊地名であると気付いた時に思い出したのが、万葉集にある山上憶良の歌でした。「飢食めば子供思ほゆ粟食めばまして思げゆ何処より来りしものそ眼交にもと懸りて安眠し寝さぬ」の飢食むとか粟食むということばです。「食み」というのは、「食む」という動詞の名詞形に違いないと考えたわけです。これは現在使っている「噛む」とか「噛み」という表現よりも古い形のことばになるので、ハミという地名の起源は相当古いものであるのに違いないと思います。また、波見(ハミ)は重箱読みをしています。重箱読み(ハミ)の地名というのは、まあ、おかしいわけですから、これは単なるあて字にすぎないことになります。

鹿児島県では、種子島に羽生(ハブ)、川辺郡に羽牟(ハム)という苗字が多いのですが、これらも同類のよび名から来たに違いないと思います。そう考えると、奄美大島のハブも、噛みつくというようなことでつながって来るのではないかとこのように思っています。また、私たちが子供の時に聞いた流行歌に「波浮の港」という歌がありますが、これと同じ系統のことばにもとづくと思われる。

問題にしている高山町波見という地名が、史料上、いつ現れるかということ、鹿児島県地名大辞典には旧記雑録の巻二十六、18号文書が引いてあるのですが、正平十二年(1356)の比志島文書に、「羽見村地頭職」という記録が出て来ます。14世紀の史料は羽見村で、波見ではないわけです。同じく鹿児島県地名辞典を見ますと、肝属氏の支族で、波見を名乗る氏があるそうです。現在、鹿児島県に残っていないかと思って電話帳を繰ると、出水市に1軒、波見という家が載ってあ



りました。肝馬氏支族の波見氏につながるか否かは断言できませんが、苗字としても残っていることが確かめられます。以下、用意したレジュメに従って、説明します。

まず、ハミ。高山町波見。それから志布志町安楽に同じ字を書いた波見という地名があります。大根占町神三川の堀波見。これは意味が判りません。鳥喰が変ったのかも知れません。

その次、動物の名を頭に付けたものを拾いあげたのですが、まず、ツツバミ。隼人町見次、隼人町住吉、国分市野口、野部町下野部。これらは「ツツグイ」とルビが振ってありますが、本来は「ツツバミ」だろうと思います。カタカナで書いてあるものが鹿児島市坂元、野部町北保、大根占町神三川。鹿屋市野里は「ツツハミ」。鹿児島市大明神はルビが振ってありません。姪良町三捨町・姪良町西餅田は「ツツグイ」とルビが振ってあります。指宿市生見は「ツツハミ」、吉田町宮之浦は「ツツグイ」です。串良町有里はルビが振ってありません。輝北町市成は「ツツバン」とルビが振ってあります。以下、ツツバミ・ツツバン・竜伴・竜神。この類も龍喰のあて字だと思います。ただし、竜神は「リウジン」の場合もあるでしょう。それから、立番、立羽山。これはツツバン山ということなのでしょう。下から二番目、南種子町西之の竜屯坂。これはツツアンザカと読むのかリウアンザカと読むのか未だ確認してありません。

その次、猿喰。サルハミ・サーハン・サイハン・サイクレ・サルグイなどいろいろな読み方をしていますが、県内で30例ほど拾いあげてあります。栗野町米永のサルハミ、福山町福山のサルハミ、長島町指江がサルグイ、東郷町安楽のものにサイクレ、市来町大里がサイハン、東市来町伊作田がサルグイとルビが振ってあるだけで、他は振ってありません。また、吉田町本名に猿飯(サーハン)という地名があります。

蛇喰(ジメバミ)。これは全国的に見られる地名です。次は突喰(シシクイ)です。猪喰はシシクイと読むのでしょうか。その次は鳥喰(トリバミ)。例にあ

げた栗野町幸田は「トリグイ」と書いてあります。そのうしろに書いてある末吉町諏訪石のものは、片仮名で「トリバミ」と書いてあります。大口市川岩瀬のものは、漢字で「鳥場美」となっています。露喰はツルバミと読むのでしょうか。雀喰、これはスズメクイと読むのでしょうか。それから、鼠喰(ネズミクレ)。

鼠が食ったとか猿が食ったとかいうような崖崩れの地名、崩壊地名が非常に多いように思います。氷喰(ミツクレ・ミツクロ・ミツクイ)という地名も同類と考へられます。道暮・氷黒・氷栗などは、そのあて字だろうと考へます。その次はツチクレと読むのかツチバミと読むのか、柳喰はまだ確かめていません。

このような地名を拾っている時、米喰(コメコミ)という地名があることに気が付きました。これらはいずれも鹿児島県地名大辞典の小字一覧を見ている時に、拾い出したものです。米喰という地名を拾い出した時、思い出したのは大隅国風土記逸文のことでした。

大隅、田ハ、一家ニク、米トヨマウケテ、村ニツゲメグラセバ、男女一所ニアツマリテ、米ヨカミテ、サカブネニハキイレテ、チリチリニカヘリヌ。酒、香、イデクルトキ、又アツマリテ、カミテハキイレシモノドモ、コレヲノム。名ツケテフチカミノ酒ト云フト云々。風土記ニ見エタリ。(塵袋、九)

資料の2の猿喰(サイクレ)。これは南日本新聞が昭和58年から昭和59年にかけて「里の字」という連載をやりましたが、その中の一つです。殿様の馬が作物を食ったからといって、殿様の馬の所為にするわけにもいかず、猿が食ったという説明をしたという話を収録しているようです。これも崖崩れの地名だと思われます。このように小字を拾いあげてありますと、県内のあちこちに崩壊地名が、たくさん出て参ります。

こういうことから、「ハミ」というのは、先程述べたように「喰む」の古語である「ハム」の名詞形であると思へます。だから、「ハミ」の付く地名は、昔の人々が非常に恐れた地名であるに違いないと思うのです。また「ハム」と「ハブ」はつながるんじゃないかと思うのです。ハブとハムではどちらが古いかと



ということですが、「ハム」から「噛む」に変わったであろうことは容易にうなづけます。ハブとハムを比較すると、ハブの方がむしろ古いのではないかと。そうすると、ハブ→ハム→カムというふうになって来たのではないかと思うのです。またハムとカムがどの辺で変っているかという点、大隅風土記では「クチカミ」となっているのに、万葉集では「瓜食めば」というふうになっているので、ハムからカムに変るのは、奈良から平安の頃ではなかろうかと推定されます。

「ハミ」という地名から、そういうことばの変遷を思いつきました。鹿児島県の地名には、非常に古い時代のことばがたくさん残っていることが予想できます。その作業の過程で、風土記にいわれていることと結びつくような「米カミ」という地名を探し出しました。恐らくそういう伝承は消えてしまっていると思いますが、その土地を探し出せば、なにか面白いことが判って来るかも知れません。

崩れやすい地名の名前を列挙しても別にどうってことはないかも知れませんが、地名を調べる者としてですね、こういう崩れやすい地名の所に団地を作ることは避けた方がよいということと一般の方々に紹介することにもなろうかとも思います。地形は原形にかえるといわれますが、そういう所を開発してもらいたくないものだと思います。

予定に時間になりましたので、以上で発表と終らせていただきます。

### 〔質疑応答〕

原口 どうもありがとうございます。鹿児島県のシラス文化に大変かかわりの深いご発表をいただきました。波見の意味、大変古いものであるということばの変化、鳥喰など鳥と獣に関して祀ってある所はないでしょうかという問いかけ、西之の竜庵坂のよみ、こういった事柄が出されておりますので、ご質問あるいはご存知の方がいらっしやいましたら、フロアの方から是非ご発言願いたいと思います。あ、どうぞ。

佐野 川辺の上山田にあると思うのですが、あれは土喰(ツチクレ)と呼ばれるようです。それから、ハブ・ハミというのは崩壊地名・浸蝕地形だといわ

れましたけれども、鹿児島県の場合、シラス台地が6割ぐらいで、シラスの崖の所は崩れやすいと、とくに二次シラスの場合は崩れやすいといわれています。地名というのは、その土地・地形をうまく名付けているといわれるのですが、そういうことで鹿児島県にはハム・ハミといったのが多いというふうには考えてよろしいでしょうか。

平田 レジューメの最後に書いてありますが、他の県でもハミ・ハブは見られます。それから、小川豊という河川工学の立場から地名を研究されている方が、「危険地帯がわかる地名」という単行本を出されたり、「地名と風土」の第2号にも「災害と地名」という論文を書いておられますが、猿喰(サルグイ)という地名例をあげて、全国的に見られる崩壊地名だと指摘されています。しかし、龍喰には気付いておられません。それから、単に「ハミ」という地名は、鹿児島県にしかないようです。「ハブ」は全国を見ましても多いようです。蛇喰・鶴喰・鹿喰・猿喰・龍喰を日本地名索引から出しておきましたが、ハミよりもハブという地名の方が多いいいます。

原口 ハミというのは鹿児島だけに残っているというのは、时期的に大変古いと考えるのもよろしいでしょうか。

平田 そう考えております。

原口 鹿児島県で崩(クエ)というものがあります。崩というのは地名になっっていないのでしょうか。

平田 「崩」地名というのはもっと多く、170ヶ所以上あります。それから氷洗と書いて「ミツザレ」というのも30ヶ所以上あります。

原口 氷洗(ミツアライ)？

平田 はい。

原口 他にございませぬでしょうか。それでは時間の関係もございませぬので、これで平田先生のご発表も終らせていただきます。どうもありがとうございます。



## II. 第11回例会

昭和60年12月8日(日)10時〜12時

薩摩国府跡・薩摩国分寺跡の現地検討会(小字説明)

[参加者] 池田信夫・江之口汎生・木場武則・富永清志・西藤一俊・平田信芳  
本田親虎・藤浪三千尋・松田 誠・山口静也・山田慶晴・他に川内郷土史研究  
会員など12名(計23名)

### 大都(オオド)

平田 現在では「オオド」と標準語的な読み方をしますが、昔は「ウド」とか「ウドンバナ」(ウドン島; 大都の端の意)と呼んでいたそうです。地名の解釈としては、国分寺の大きなお堂に由来すると説明されています。古くから薩摩国分寺址として知られ、地上に残る遺構としては、塔址だけが、昭和19年、国指定となっていました。昭和39年、私が薩摩国府跡の新説を出して発掘調査をはじめ、その条里を復原した時、六町四方の薩摩国府に隣接する二町四方の国分寺域を想定し、その条里の交点に国分寺金堂がのっかって来ると見当をつけていました。昭和40年・41年、薩摩国府跡の調査が実施されたのですが、その時、予算分担のことで県と川内市の話がずれ、その端緒をとらえただけで薩摩国府跡の調査は、二年で打ち切られる憂目にあい、その腹いせに国分寺金堂と 관련한発掘調査届を県に出しました。そうしたら、県があわてて、必ず調査予算を組むからと発掘届の撤回を求めて来ました。今思うと、私も當時は若かったなと思います。その時、考古学とは政治的駆引の強い学問だなと思いました。そのような経緯で昭和43年から45年の薩摩国分寺跡の調査が始まり、その最初の調査で金堂址が陽の目を見ることになりました。薩摩国分寺跡調査の火付け役は、この私一人なのです。昭和53年以降に行なわれた史蹟指定のための調査および用地買収には、今日見えておられる吉満先生が大活躍をされました。史蹟公園整備事業には、私はノーマッチでしたが、こいほどみごとに整備された公園を見ますと、感無量です。このように立派な国分寺跡は、全国68の国分寺跡でも、そんなにはないと思います。

### 下台(シモダイ)

平田 大都の南側は「下台」になります。以前、下台公民館がありましたが、西金堂が発見されて、追加指定区域になりました。

### 国分(コクブ)

平田 公園の西側に小さな道がありますが、この道が字大都と字国分の境界になります。また公園の入口から西に伸びる道路が国分と下台の境界になります。下台・国分の地域には、未調査の国分寺遺構の西側半分が住宅地の下に埋蔵されており、また国分地区には、江戸時代の国分寺の坊さんの墓も残っており、下台・国分地区には、布目瓦・土師器・須恵器の破片がいくらかも見られますので、歩きながらその都度遺物の紹介をすることにします。

### 西原(ニシハラ)・薩摩国分寺石造層塔

平田 この石造層塔は、その昔、当時の水引村の村長さんが、大都からこっちに移したといわれています。

吉満 もともと、あっちだったんですか。

平田 はい。ここに水引の村長の家があって……

吉満 井上真という大小路の病院長のお父さんなんです。

平田 ミ、親父さんでしょう。その村長がここに移したんだそうです。

吉満 ああ、なるほど。

平田 でも、もう、ここに移ってからだいぶなり、もとあった位置が判らなくなっていますから、ここに置く以外にないでしょう。

吉満 井上先生がおっしゃるには、一時、前に移したところ、たたりがあって、不幸が起きたと。それでおそれをして、またもとの位置に直したとのこと。

平田 こいれと大体同じ形式のものが国指定の隼人塚ですね。隼人塚も大体この様式です。国指定の大隅国分寺石造層塔は仏像が彫ってないだけで、大体形式が同じです。仏像を彫ってない大隅国分寺のものには、平安時代の終りの康治



元年十一月六日という有名な銘文がありますから、それより後のものが倭人塚であり、これだろうというふうに考えられます。大きさは違いますが、倭人塚と大体同時代のものですから、あちらは固指定、こちらはなにもしられていないというのは片手落ちだと思います。ただ残念ながら、これは移したというケチが付いているだけに、指定の対象にもなっていません。

木場 これはヒビが入ってあったかぬー。

松田 墨畧があったかも知れないわ。

吉満 江戸時代、国分寺があった所はこっちですかぬ。そして、しかも藁葺きであったと。そういうことですかぬ。

江之口 三國名勝回会に出ていますね。

平田 三國名勝回会に出ているのはですね、鳥居の右側です。

吉満 ここですか。

平田 はい、宇杉山の一角。ここは字では西原の端っこになります。川内郷土史はこれを(尼寺原:ニジハラ)とカッコ書きにしています。鹿児島市の西田町というのも、昔、薩摩国分尼寺の田があり、それが尼寺田の地名になり、さらにそれが西田に変わった可能性も考えられますから、西原は本来尼寺原であった可能性はあります。ここらを掘れば遺物はたくさん出ます。私は国府の一角だと思えますが、国府の一角に尼寺があってもおかしくないわけですから、尼寺の候補地である可能性は強いわけですね。私が考えておいた尼寺候補地の一つは計志加里(ケンカリ)の台地なんですけども、これにトレンチを入れる間がなく川内を去りました。尼寺のもう一つの候補地は天辰庵寺です。ちょうど、国分寺の真東になります。あまりにも離れております。現在、杉林になっています。それから今一つの候補は泰平寺。泰平寺は国分寺の真南の所であって、これは外原(ホカハラ)と読むのかな。

山口 外原(ホカハラ)です。

平田 外原という所が泰平寺の寺域です。泰平寺が尼寺という説もあります。

泰平寺の平瓦と天辰庵寺の平瓦は同じもので、時代が同じだろうと思います。天辰庵寺の軒丸瓦・軒平瓦の様式は10世紀のもので、時代がちょっとくだらという難点があります。それから、国府の西端、圃口(カザグチ)の方に尼寺を求める説があるのも、どこかで聞いたような気がします。

池田 尼寺は条坊にのっかるのですかぬ。

平田 のっかると思いますよ。

### 菅原天神

平田 薩摩国府と神社の配置を考えると、東北隅に文の神である天神社があり、西南の方向に新田八幡があります。八幡といえば武の神です。文武の神が両翼に対称的に配置されていることになりました。また、この天神が勧請された安和2年(969)という年代は、薩摩国分寺再建の年代を考証させてくれます。その後の薩摩国分寺は、大宰府の別当寺に安楽寺というものがありますが、その安楽寺領になっています。安楽寺領ということは、大宰府天神と表裏の関係ですから、そのような関係でここに天神様も祀ったと考えられます。また、天神様という文の神が祀ってあることから、その麓の一带のどこかに国学の存在を考証させてくれます。奈良時代には国学という薩摩国の大学があったわけですね。ですから、このあたりを掘れば、薩摩の国学が明らかになる可能性があると思います。その意味で、薩摩国府跡から国分寺跡にかけてのこの国分寺の台地は、どこを掘っても遺跡だらけだということも川内の方々にはよく知っておいて頂きたいと思えます。

### 芸の尾(ゲイノオ)

平田 ここは、宇芸の尾という所なんですけど、この芸の尾という地名には、疑問を持っています。というのは、日本全国の地名を調べてみても、「ゲイ」とつくのはほとんどないからです。安芸国を芸州ということはありますが、これは別問題です。「尾」というのは「丘」の意味ですよ。それで、次のように読み解くことができるだろうと思うんです。安芸国の芸(キ)という字ですから、芸の尾と



川内町大小路小学校



井 3.0

3.8

上川内町

外園

宮内町

川内北中学校

川内高等学校

新田神社

市立保育園

新田神社

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

市立保育園

天馬川橋

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

天馬川

口瀬

流馬大



「キノオ」と読めば意味が出て来ます。「木の尾」という地名は各地にあるので  
す。「キ」というのは古代の城のこと。城のことを「キ」ともいいますから、城  
の尾すなわち城のあった岡とみれば、中世の文書に出て来る「川内国分城」とい  
うものと結びつく可能性が出て来ます。この山一帯が川内国分城の可能性が一番  
強いと思うのです。この麓に、薩摩国府がありますから、国府背後の「逃げの城」  
があっても不思議でないわけです。そう考えると、この山が城としては一番都合  
が良い地形です。そして、見晴らしもいいわけですね。

向うが妹ノ岡です。妹ノ岡(セノオカ)の南、削られている所が屋形ヶ原(ヤ  
カタガハラ)。屋形ヶ原が、昔、国司館の跡だという説があって、三國名勝同会  
以来、薩摩国府跡だと考えられていたわけです。屋形という地名そのものがそん  
な古いものではないということと、あそこは二町四方しかとれませんので、国  
府の大きさとしては不相当と見たのです。国司館があったかも知れませんが、国  
府を考えるのは、眼下にずーっと広がるこの台地の方が格好の地であり、遺構・  
遺物も多いようです。

まあ、そんなことで、この芸の尾という地名には首をかきげているのです。こ  
の下の方に、鴨ヶ迫(カモガサコ)とか後牟田(ウントムタ)があるのですが、  
私が調べた当時、使用した地図の範囲外でしたので、その範囲の確認をしていま  
せん。川内の方々に、ついでに折、その範囲の確認をお願いしたいと思います。  
それから、妹ノ岡との間の低地が水洗(ミズアライ; ミツザレ)という所です。  
水が洗うわけですから、これは大雨の時には水が洗ったという危険地帯ですから、  
こんな所は開地化しない方がいいと思うんですよ。

永原 水洗って、どこな?

平田 その道路の下の方。

永原 この辺は、後牟田じゃなかと。

平田 後牟田は、その南の方。

永原 あそこには、さっき、あんたがいうた-----

平田 屋形ヶ原?

永原 屋形ヶ原のあそこ何処は後牟田と云いますよ。あそこには森が残ってい  
るでしょう。あそこには、私の土地があるんだけど、後牟田になってるよ。

大坪 あそこすい、後牟田になっちゃいけ。

平田 それなら、越ノ巣(コッノス)はな?

永原 ちょっと待った。今人とは間違いじゃ。あそこは越ノ巣じゃ。

平田 こっちの方が後牟田でしょう。

永原 そうそう。こっちは道があるんだけど、そこらあたりが後牟田ですよ。  
昔の火葬場の所の道路付辺が後牟田。

平田 後牟田は広かど。これが屋形ヶ原な。この空欄が。それで、この旧道  
が-----。

永原 そこは田圃になってるわけだな。

平田 そうそう。

(?) どう理め立てて、住宅が立ちよるですよ。

平田 そのうち大雨が来たら洗われるかも。(笑)。まあ、昔の地名という  
のは、そういう意味で大平にしなければと思います。向うに見える体育館の所が  
虚空蔵ヶ峰(コクゾウガミネ)。虚空蔵菩薩を祀ってあったんでしょう。また、  
川内高校の北側の方に、いろんな地名があるんですが、実際に歩いてみられたら、  
よく判ると思います。川内高校と体育館の間が住連木(シメノキ)になります。  
しかし、これは宮内町に入ります。

(?) 体育館のどの辺が住連木ですか。

平田 北側です。

(?) 向う側とは違うんですか。

平田 向う側の方は、折宇都(オリウト)とかいう所です。

(?) 虚空蔵ヶ峰の所を折宇都とか云いますね。

永原 体育館の所?



平田 虚空蔵ヶ峯の別名が折宇都です。折宇都というのは宇絵田にあるもので、俗称が虚空蔵ヶ峯ですね。

(?) 北側の方は住連木?

平田 はい。この住連木も四つぐらいの小字があったようですが、もう消えてしまっています。それから、あそこにお寺があったとかな。大蔵経を納めてあるお寺が、寄宿舍の横に。

永原 うん。あいはなんとかいう。

平田 あの一帯が八幡田(ハツコウダ)。

永原 うん、うん。

### 入来原(イリキバル)

平田 ここが、昭和29年、川内高校が登抵した建築遺構のある所です。この一帯を掘れば、薩摩国府の遺構というものは、はっきりして来るんですけどね。

江之口 これなら、また掘り易いかな、また畑やで。これは家が建ったりすれば-----。

平田 それは川内市の仕事です。この一帯は大事にとっておかねばならぬ所です。

本田 入来原と入来と、どんな関係があるのかな。

江之口 先生。入来が判らんかね。

平田 うーん、判らん。今、川内高校から北にのぼった五叉路の所に出て来ている。こっちが下原(シモハラ)ですね。この道路から向うが、上原(ウエハラ?)。今、通って来た所が、入来原。

(?) この辺は、やっぱ、国分寺町な?

平田 この道路から東が国分寺町、西は御陵下町です。

### 川内高校近辺の小字

平田 現在は、地図上のこの地点にあります。こち側が風口(カザグチ)になります。あの辺が下原。そこの一段高い所が兵庫原(ヒョウゴバル)にな

ります。また、いくつかの小字をまとめて、風口と呼んでいます。今歩いてる道路の右側が日駒(ヒノコマ)で、左側が前田になります。この辺(川内高校付近)は、字を国府といいます。昔は川内高校の校庭を横切っていた道があり、それが旧道になります。

(?) 私たちが川内中学に出る時には、ここに道路が通っていました。こっちは東運動場と呼んでいました。

平田 そうですか。川内高校の敷地は、南北でちょうど1町あるんですよ。まあ、109メートルですね。そして、東西に3町。この大きさが、昔の条里制を考える時の1町の間隔です。

(?) ははあ。

平田 この辺は中原です。川内高校からちょっと北にのぼった所です。当田(トウデン)というのは、普通、頭田と書くのですが、祭の費用に当てるための田圃です。

(?) これは、当田(トウデン)と読むの。アタリタかと思ってた。

平田 今、石走島(イシバシリジマ)の真ん中を通って東に向かっています。

山田 この辺に大きな田之神があったはずだが。

江之口 あそこやーど。菖<sup>ササ</sup>ががぶさーちーらい。

### (質疑応答)

平田 地図を見ながら、最後の話をしましょう。今日は国分寺町と御陵下町を歩きました。薩摩国府跡の真ん中に南北の道路がありますが、この南北の線の東が国分寺町で、西の方が御陵下町になります。大小路の方は廻っていませんが、田之神島・暮橋とか金風とかの小字があります。面白そうな小字は、鹿兒島本線が川内川にぬける所の、一っ・二っ・三っ目ですね、国料という地名。小川先生がこの前、国料の話もさしましたが、ここになります。それから、大小路(オオショウジ)の一番北側に中宅間(ナカタクマ)というのがありますが、この北の方に宅満寺という寺があったので、その宅満寺に因って地名です。



松田 今日のことだけでなく、この前、黎明館で話をされた時のことですが、地名を考える時には漢字にとらわれるなということでした。でも、この前の時、古文書に羽見と書いてあるというんで、漢字にとらわれたような感じに受けとったんですけどね。波見は書いてなく、羽見が書いてあるんだと。それから、昔を考えるければいけないという意味で史料を提供されたんだなと思ったんですが。

平田 いや、違いますよ。喰む(ハム)・喰み(ハミ)のハミにもとづく地名なのです。

松田 地名を考える時には漢字にとらわれないというのは基本なんですか。

平田 そうです。新しい時代になって来ると、ある程度、意味は付いていると思いますが、漢字があて字になって行くのは、後の人たちが文字を知らなくて、勝手に村役人とか書記といった人たちが書いてしまったのが多いわけですよ。昔の人でしっかりした知識をもった人が書いた文字というのは、案外活きているんですよ。だから、その兼ね合いが難しいんじゃないですかね。

(?) 菅原神社ですけど、これは国分寺とか国府に関係があるんですか。

平田 関係があると思います。どうせ、周りには神社を守り神として配置しますから。----- (以下、録音されておらず、省略)



# 地名研究会報

第12号

昭和61年6月1日

鹿児島地名研究会

於教職員互助組合会館

I. 第12回例会 昭和61年3月2日(日)

(出席者) 片岡八郎・小川玄三郎・中村明蔵・永山修一・西園一俊・肥後芳尚・平田信芳

二見剛史・山口静也 (計9名)

II. 壺藩名勝考読会 P. 35~P. 41

(問題となった地名および事項) 可愛山陵・管薩摩国・新田神社・丹生・穎娃郡

## 可愛山陵(えのさんりょう)

平田 可愛山陵。今日は江之口さんも江平先生も見えていませんが、「え」という語の意味は①入江の「江」という場合②兄国・弟国という兄弟の「え」③古事記などでは可愛と書いて「え」と読ませ、すばらしいとか良いという形容詞の意味で可愛山と解釈しているようです。江之口・江平のお二人がおられたらその意味について聞いたのではないかと思うのですが。まあ「いい山」という意味と「江に面した山」。そういう自然発生的な地名だろうと思います。なにか問題にしてみたいという地名はありませんか。

中村 問題ではないのですが、39ページ下の段の真ん中あたり、「可愛山陵、今薩摩国穎娃郡にあり」。「えの」と続ける所まで言っているのだろうと思います。だから穎娃(えい)と読まれない方が良いでしょう。和名抄には「えのこおり」となっています。それから、さっきの40ページの上の段の真ん中でですね読み方に迷われた所ですけど、「慶雲見管薩摩国」太宰府が管轄するという意味だろうと思うのです。上に太宰府が付きますので。

平田 なるほど、太宰府が管轄している薩摩国に慶雲が見えたということですね。

中村 そういうことだろうと思います。それからついでに下の段の最初の行、禅寺の「寺」は誤りでしょう。禅師。寺は師の誤り。

平田 そうでしょうね。

中村 ちょっと気付きましたので。

## 新田神社(にったじんしゃ)・丹生(にう)

平田 今日読んだ所では新田神社が最初はどこにあり、後、遷ったと説明されていますが、それは事実のようです。新田神社に行くと、中腹に礎石が残っています。本来そこに新田神社があり、そこから遷ったということは行かれたら判ると思います。

今日は新田(にった)というのは一体どんな位置にある地名かということについて整理して見ました。

プリントにもとずいて説明します。タイトルを「新田神社と新多郷」としましたが、日本地名索引から

「新田」をなんと読んでいるかの地名例を探しました。①「にった」と読むのが秋田・岩手――兵庫まであります。同じく「にった」と読むのに山形県

のものは「日田」と書いて「にった」と読みます。それから静岡県と長崎県に仁田(にった)と読む地名

があります。②「にいた・にいだ」が青森から大分まで。福岡では新多(にいた)。新田(にいた)



は青森・千葉に、(にいだ)は秋田・福島・高知にあります。それから宮崎県には自衛隊の基地がある新田原(にゅうたばる)の③新田(にゅうた)があります。「にゅうた」という地名で「入田」と書くものが岡山〜大分にあります。④新田(あらた)と読むが大分県に1例ありました。しかし、鹿児島荒田八幡にみられる荒田の例は全国的にあります。⑤新田(しんでん)というのは江戸時代の新田で、全国にあります。

これらを整理してみますと、どうも「にいた・にいだ」が一番古いのではないかと思います。これが中国・四国・九州とか東北・関東とかの辺境の方にあります。「にゅうた」は西日本に多く見られ、「にった」は東日本に、「しんでん」は全国に見られます。これは5万分1図に現れた地名から考えられることです。「にった」が東日本に多いとすると、薩摩に「にった」が出て来るのは何故だということになるのです。そこで、和名抄郷名の「新」の用例を拾いあげてみました。

新田(にいた)と書いてあるのが、陸奥・播磨・出雲もです。薩摩国高城郡は訓みが振ってありませんが、これは新多(にった)郷と読まざるを得ないだろうと思います。「にふた;にゅうた」と読む例が陸奥・武蔵・上総・上野・下野の新田。こころ辺が新田義貞の新田荘という地名・苗字が出て来る所でしようが、延喜式の民部の所では「にった」と書いてあり、兵部の所では「にふた」と書いてあります。ところが、この「にふた」と読むのは、備前国は例外として、和名抄にあるのはほとんどが東日本にある地名です。しかし、現在では「にった」と呼ぶのですから、これはちょっとおかしいなと思います。それから「にふかわ」という例が越中国に1例ありましたが、現在は「にいかわ」と読むのだそうです。

以下、新居(にいい)。4.の「にいい;にい

のみ」。右側のものは全部「にい」と読みます。3.の右側になしとある新居郷は、和名抄に訓みが振ってないものです。6.新井・7.新見・8.新野・9.新屋。新屋、これはどんな意味かという郡司の新しい館のある所;郡司の新館の地を新屋(にいや)という、地名語源辞典などに書いてあります。11.新治は、有名な新治です。12.新蔵・新分・新名などの「にい」地名もあります。

さっき述べたように和名抄では「にふた」と読むのがあるんですが、この地域は現在ほとんど「にった」と読んでいる所が多く、不思議な気がします。「にった」と呼ぶのはほとんど東日本であり、薩摩国だけが飛び離れて「新田(にった)神社」と呼ぶのは、「にった」が一般的になった頃に付けられた名称ではないかという疑問を持ちます。ふと思いついたのですが、「にい」というのが一番古い呼び名だとすると、鹿児島弁で「にか靴」とか「にか服」とかいます。以前から気になっていたのですが、「新か」というのは「新しい」の古い表現・古い言葉じゃないかなという感じを持ちました。

薩摩国高城郡新多郷ですが、訓はありませんけれども新田神社がありますから、「にった」郷と読まざるを得ないだろうと思います。今年になって「日本姓氏大辞典」というのが角川書店から出ました。苗字が13万収録されているのですが、それを見ると新田は「にいだ」という苗字か「にった」という苗字で、「にゅうた」と読む苗字はないようです。和名抄の「新多」という字を書いた苗字も、「にいた」と読むか「にいだ」と読むかで、「にゅうた」と読む苗字の例はないようです。だから、和名抄に書かれている「多」という字を書いた「新多」のよみは、昔から「にった」と呼んだのであろうと思います。

こういうふうには5万分1図に出て来る現在の地名のよみ方の例と和名抄の例とを比較してみると大体どういう読みが古く、どういう読みが新しいのかの

見当がつくのではないかと思います。まあ、「にいだ」が古くて、その次変ったとすれば「にゅうた」それから「にった」、そして「しんでん」というふうになるんじゃないでしょうか。

片岡 5万分1図で見たのですが、東郷町に黒仁田という地名があります。それから蒲生に赤仁田という地名、栗野の方に白仁田。この仁田とはつながりがないのですか。硫化水銀の「丹(たん)」とは関係はないのですか。

平田 なんと云えば良いですかね。一般にこっちは湿田を牟田といいますが、関東の方では仁多(にた)といってるようです。関東武士が下向して来ますからニタという表現も入って来るんじゃないかと思うのですが。

片岡 宮崎の新田原は「丹」が出ていた所ではないかと、ちょっと類推して考えたんですが。

平田 新田の「にゅう」は丹が出る田んぼですか

片岡 はい。溝辺の丹生附(につけ)という

平田 ああ、丹生附がありますね。

片岡 入来(いりき)もひょっとすると丹が出る「にゅうき」ではなかったのだろうか。それがいつの間にか「入」の字を当てちゃって入来と読むようになったんじゃないかと考えたりします。

平田 そこまではちょっと言えないのではないですか。

中村 去年ちょっと用事がありまして永山さんと一緒に宮崎県新富町に行ったんですがね。新富は新(にゅうた)と富田(とみた)とが一緒になって、新富になったものです。文武天皇二年、698年ですから、日向国が朱砂を献上したという記事があるものですから、ちょっと訪ねたわけです。新富町を訪ねまして、朱い砂が出る所があるという現場まで案内されたんですけど、私どもは専門じゃないもんですから、それから先は硫化水銀であるのか酸化鉄であるのか、なんとも云えません。去年の宮崎県考古学

会で芸大の顔料を追求している人が発表されたようです。結果的にはそれを聞かず、それが硫化水銀なのか否かを聞かなかったのですが。案外、酸化鉄らしいという話。朱い土が出る所があるんですがね。

平田 酸化鉄が丹で、べんがらですね。硫化水銀が朱になる――

中村 えー、朱になるんですね。

片岡 朱はある程度とると無くなるんだそうですね。量が限られているわけですから、痕跡をとどめなくなる。酸化鉄はどんどん酸化するから、多い所は今でも残っているようですけど。朱をとる所は根絶してしまい、地名だけ残って現在は朱は全然出ないと書いてあるのを読んだのですが。

平田 丹の産地の丹生田との関連もあるでしょうが、こんなことも考えるのです。「にいだ」が「にゅうた」と「にった」に分れたとすると、日本の方言で買物を表現する場合、東日本では「買った」と言い西日本では「買った」というものと同じようなことを「にった」と「にうた」の使い方に感じるわけです。

中村 1の3の新田(にゅうた)、これは宮崎の例ですね。宮崎の新田が古い記録では、この字(入田)になつるとということなんです。鎌倉時代じゃないですかね。

平田 そうしたら、「新」が「にゅう」と読むことは?しかし「にゅうた」の例が和名抄では沢山出て来るもんですからね。

中村 ただ宮崎の場合「入」の字を使った時代があるということです。現在の牟田が「にった」ですね。それから1の1ですが、「にった」の例に当然群馬県が入って来るだろうと思います。群馬県新田郡というのがありますから。

平田 ああ、そうですか。見落したんですね。

中村 例の岩宿遺跡は新田郡ですから。

平田 ジャー時間が来たようですから。



## 熊襲という名称について

中村明蔵

熊襲(クマソ)というのは、よくご存知のことでこれは地名にも人々の集りである族名にも使うようです。だから、地名・族名、両方になってる言葉なんですけれども。この熊襲というのが、現在どのように理解されているかということをお話したいと思います。現在、一番大きな歴史辞典としては吉川弘文館が出している「国史大辞典」があり、これに「クマソ」という項があります。それをはじめとして河出書房の「日本歴史大辞典」。これは全巻揃っております。それから「日本古代史辞典」。一番コンサイス的な辞典としては角川の「日本史辞典」があります。ほとんどが「球磨・嚙嗟」というのを説明文の中に入れてあります。多少表現の違いはありますが、まあ球磨嚙嗟から来ているということです。大体肥後の球磨郡の球磨であり、大隅の嚙嗟郡の嚙嗟であるとしています。ただ嚙嗟の文字はかなりいろいろな文字を使ってあります。今の字にはありませんが、「ソ」はたとえば口偏だけで真ん中の貝が脱けているとか(嚙)、逆に口偏がない贈嗟があったり、「オ」の方も口偏がなかったり、いろいろな字がありますが、それはまあ、それぞれの出典の違いです。この中の「日本古代史辞典」のクマソの説明は、実は私が書いたものです。まあ、辞典ということですのであまり変った説明をすることは許されない一面がありますし、それから字数の制限がありまして、あまり詳しい説明はできない制約もあります。「日本古代史辞典」というのは実用的ではないのですが、ややニュアンスの違った表現はとったつもりです。あまり自分の考えを出せなかったわけですが。

この球磨・嚙嗟にもとづくという考えを広く広められたといいますか、それを論文の中でとりあげられたのは津田左右吉博士だと思います。津田左右吉

博士が「日本古典の研究」上巻の第二編第二章の中で次のように言っているわけです。ちょっと読んでみます。「さて、この「ソ」はどこかという、統紀の和銅三年の所に日向隼人曾君云々という記事があって、この曾はすなはち襲であることが推測せられるが、そうすると前に述べた大隅分国の記事の嚙嗟がそれに当るらしい。ところが、肥前風土記の巻首や豊後風土記の日田郡の条には大足彦天皇の征討せられた球磨嚙嗟と書いてある。これを見ると、これら風土記の書かれた奈良時代には熊曾の曾は日向の嚙嗟だと考えられていたようであるが、これは多分昔から受け継がれてきた知識であろう。然らば、熊はなにかという、前に引いた風土記はともに球磨嚙嗟と続けてある。球磨が嚙嗟の北に続いている今の肥後の南部、球磨川の流域の地名として用いられている文字であることを思うと、風土記の作者は熊曾の熊をこの土地の名と考えていたらしく、そしてそれはやはり「曾」について述べたと同様、上代からの知識が受け継がれたものと思われる。結局、津田左右吉博士が云われたことは、風土記に取りあげられている球磨嚙嗟の知識が奈良朝のものであるから、これがクマソの語源としては正しいと云うことなんです。それが結局は現在いろいろな辞典、小さな辞典にも引き継がれていると思います。もう少し津田左右吉博士のものを引用したいのですが、続いてですね、こういうことをいっているわけです。「大隅国の嚙嗟と肥後国の球磨が連なって一つの名称化した理由については、クマソが密接なる関係を有していたことが推測される」。だから、球磨と嚙嗟が密接な関係をもっていたことが一つの論拠となっています。その次に「アルサス・ロレーンと言ったりムクリ・コクリと言ったり」、まあムクリ・コクリというのは蒙古と高麗のことで、いわゆる元寇

のことだろうと思うのです。まあ、とにかく「アルサス・ロレーンとかムクリ・コクリと言ったりするように同一の事情下にある隣接地あるいは共同に働いた二つの勢力を連称することはあやむに足るまい。さらに一步進めて考えると、この二つはその中の一つが全く滅びたか、また他に服属したか、いずれかの関係において一つの政治勢力に統合されたのかもしれない」と津田博士は述べておられるわけでありまして。この理論が結局現在のいろいろな辞典に反映されているだろうということなんです。

そこで今日はそれについてちょっと異説を唱えてみようかと思っているところなんです。まず、風土記は一般的には奈良時代に出来たと考えられております。この書物に黒板に最初に書きました字(球磨嚙嗟)を使っておるもんですから、一見して熊襲を球磨・嚙嗟とする語句の裏付けがあるわけです。そして文献をよりどころとする人々には一種の安堵感といいますか、文献の裏付けを与えていますから、消極的ながらもそれを認めようとする態度が出てくるわけです。私は、これは基本的には誤りではないかと思っております。それで、結論を先ず申しますと、大隅国の嚙嗟郡は正しいと思うんですけども、球磨がそれにひっ付いたとは思われないんですね。球磨というのは「曾」に付いている形容詞だろうと思うわけです。時間がありませんので端折りながらちょっと申しますと、先ず景行天皇の条。さきに津田左右吉博士も引用していましたが大足彦といわれた景行天皇の熊襲征討の話が日本書紀ではどう記述されているかといいますと、これは年紀も書いてあるんですけども、ちょっと省略しまして、日本書紀の景行天皇の条に「朕聞く、襲国に厚鹿文・走鹿文といふ者有り」。熊襲と書かずに襲国と書いてあるわけです。「是の兩人は熊襲の渠帥なり。衆類甚多く、是を熊襲八十渠帥と謂ふ」。この記述からする限り、同じ文章の中で人を指す時は熊襲と云い

ながら、国を指す時は襲国と言っているわけです。襲国に熊襲が住んでいるんだという言い方をしています。それから、同じ景行天皇の条ですけれども、またクマソが反乱を起すもんですから、次にヤマトタケルが出かけるわけです。その時にはですね、「熊襲国に到る」。日本書紀でここで初めて熊襲という言葉が出て来るのです。「熊襲国に到る」。そして熊襲の魁帥、まあ首長に当るものがいて、「名はと取石鹿文、亦川上泉帥と曰ふ」。例のよくご存知のヤマトタケルノミコトが川上タケルを一童女の姿に変装して刺殺すという有名な話が続くわけです。まあそういう表記がなされています。それから、同じような話は古事記にも出て参りますけれども、古事記は一貫して熊曾という表現をとっています。ソの字が嚙嗟ではなく、この字(曾)を使っています。これが、古事記の方です。

ところで、再び景行天皇の時の「襲」にかえりますが、景行天皇はこの時どういうコースをとっているかがわかります。景行天皇は襲国に至るまでの間に周防国から豊前に渡って来ます。今の大分県・福岡県のあたりに渡って来て、そして日向に入って来るわけです。日向に高屋宮という宮を建てて、そこから襲国を討つわけです。だから、日向の一部を本拠地としてですね、そして、襲国を討つということになります。そして、熊襲を服属させた後、今度は西といいますか、北西のに向い大淀川をずーっと遡って行ったような形のコースをとっております。今ん小林あたりに当る夷守を通過して熊襲に抜けております。私は、これは非常に重要なことだと思えます。襲国を討ちに来ですね、そのコースの一つに熊襲を通過して帰って行くということ。これは文章から見てもですね、こちら(襲国)は当然服属していない表現ですから。ところが熊襲。熊(あがた)という朝廷と関連のある地名が出て来る。これは、それ以前に服属している所なんです。それが同じ記事



の中に出て来る。だから球磨と贈噓を結び付けられないという私の論拠の一つになるのです。球磨と贈噓は同質の状態ではないわけです。この熊は明らかにこの球磨だとし、一方では県(あがた)がある。他方では朝廷に背いている熊襲がいるという状態で球磨贈噓と続けられるのかということなんです。それから、私がもう一つあげたいのは津田左右吉博士が何故アルサス・ロレーンとかムクリ・コクリとかの例をあげるのかということなのです。あげるならば古代の文献の中で複合した地名の例をあげないのか。結局例が見つからないわけです。だから外国の地名をもってきたり、後世いわれているような地名というよりは国名であるムクリ・コクリいうものをあげてくる。これは全然学問的な究明の仕方ではないと思っております。熊曾(クマソ)を説明するのは、なんの例にもならないと思うんです。

地名の複合という問題についてもう少し言いますと、地名を複合する例は後世にはいくらでもあります。薩摩と大隅を一緒にして薩隅といったりですね、現在でもさっきの新富の例ですけども、新田と富田を一緒にして新富というとかですね、そんな例はいくらでもあります。古代に地名をそのまま二つ並べて複合する例があるのか。結局、津田博士はそれを見付け出せなかったということだろうと思うのです。風土記の中でクマソが出て来る例というのは、私が調べた範囲では肥前・豊後・筑前と、九州の風土記に出て来るんです。当時の西海道の風土記に出て参ります。それから播磨風土記の一つ出て来るんですけども、播磨風土記はこういう字(久麻曾)を使ってあるのです。ちょっと伝本・異本もありますが、播磨風土記にはこの字(球磨・贈噓)を使っていないのです。

そこで、地名をただそれだけで球磨・贈噓の連合したものではないということは簡単に否定できませんので、すこし球磨と贈噓の歴史を探ってみたいと

思うのです。球磨の地域というのは、ご存知のように今の人吉盆地を中心とした一帯を指しているわけですけども、いわゆる球磨川に沿った地域ですね。そして、この球磨川は肥後の八代平野に注いで行くわけです。八代平野というと古代史では早く肥君という大豪族の根拠地を思い出すわけです。一方、贈噓という所は今の国分市・隼人町を中心とした霧島山麓だろうということ。これはもう鹿児島の方はご存知なんですけども、よく県外の方はとんでもない所、今の贈噓郡の地域を指すのです。まあ、その二つに大きく分れるんですね。その本拠地が、球磨の本拠地と贈噓の本拠地。これはまあ 歴史的に見てもかなりの違いがあると思います。途中で国見山系という大体 900メートル級の山があって、今でもあそこを越えるのは車でかなりな難所なんですけども、そこを越えて一つの勢力があったとはどうしても思われぬ。文化的にもかなり違うと思います。たとえば、球磨郡の方の古墳のあり方ですね。板石積石室のようなものも一部にはありますけども国分市一帯にはないですね。川内川流域には同じようなものがありますが、ところが、球磨地方はもっと変わったものの方が多く、先ず高塚古墳(前方後円墳・円墳)がかなり見られる所です。それから球磨川流域は装飾古墳のある地域です。北の方の装飾古墳とはちょっと違いますけども、そういう装飾古墳のある地域です。結局そういう文化がどこから出て来るかというのと、球磨の地域は九州西岸から球磨川を通して入って来る。だから、文化圏としては九州西岸乃至北部九州の文化圏に属する一帯であるということです。それに対し襲の根拠地というのは古墳から見ると高塚古墳が全然ない所です。国分市向花の亀の甲は地下式横穴の文化圏の一番端に当る所で、そこから金銅製の三累環の柄頭をもつ大刀などが出土している地域なんです。それは現在城山の国分市郷土館に展示されていますが、まあ 古墳のあり

方が基本的に違う所ですね。そういうことから考えてもですね、連合した勢力がある地域ではないということなんです。そういうことと今度は大和政権がどういふ入って来ているかというコースをたどって見ると先程述べた景行天皇が通って来たコース。これがやっぱり一つの勢力のコースを占めているわけで、これは九州で見られる畿内か瀬戸内型の古墳の分布と関連があるようです。畿内か瀬戸内海沿岸かその起源は別としまして、ああいう前方後円墳・円墳の分布と関連があり、古いものが豊前にあり、そしてその後日向に見られる。さらに大隅の沿岸に入ってくる。そういう順番に入ってくるのを見ると、やっぱり、景行天皇が通って来たコースをそのまま来てるわけですね。今度は西の沿岸を見ますと、高塚古墳はご存知のように出水郡の一帯に僅かにある。とくに長島とか阿久根とかですね。その辺にしか見られないと思うのです。そして、服属した人々は畿内に一部移住させられてるわけです。移住されている隼人の代表というのは、大隅直と阿多君ですね。この二つ以外に豪族を示す例としては見えないわけです。畿内では他に例は見えない。結局こういうことから見ますと、曾君というのがこの地域に後で出て来るわけです。姓をもっている豪族の中ですね、曾君というのが後で出て来ますけれども、これが全然移住していないのです。移住していないということは最後まで抗ったということでしょう。大隅・阿多という地域は早く服属したのです。大隅直というのは、大隅の志布志湾沿岸で古墳が見られるあの一帯でしょうし、阿多君というのは薩摩半島の勢力であったと見てよく、こういう地域は早く服属させられたわけです。ところが、最後に大きな勢力として残っていたのが薩摩君と曾君であろうと思うわけです。とくに曾君というのは鹿児島湾の一番奥部にあり、一番攻めにくい所であった。そして実は曾君の勢力というのは8世紀まで抵抗を

続けてるわけです。それで、この「曾」ですが、大隅・阿多が服属した段階では、大和政権にとっては、南九州を抑えるためには「曾」を抑えることが大きな眼目になっていたと思われま。そういうところから、熊曾という表現が出て来るのではないかと思っているわけです。

そこで、熊という言葉の使い方なんですけども、古典の中ではいわゆる動物の熊の字を書いてあるわけですけども、熊が使用される例をというのを見ると熊鷲という例があります。これは人名なんです。同じ日本書紀の神功皇后の所に、肥前国の荷持田村に羽白熊鷲という者がおり、「その人となり強く健し」と記してあります。「強く健し」、これは先ず一つの性格として、熊に附随する性格だろうと思います。彼はその名の通り身に翼があって「能く飛び高く翔り、皇命に従はず、つねに人民を略盗む」と云われています。そしてやがて、天皇は兵をこぞりて羽白熊鷲を討ちて殺したという記述があるわけです。この伝承に見られるその熊という性格が熊襲のもともとの熊の性格であろうと思います。結局、強く健きものであり、そして皇命に；天皇の命に従わない。そして人民をかすむ。そして結局は殺される運命ですね。こういう意味がこの熊にはあるんだろうと思います。時間があまりありませんので途中端折ります。

最後になぜ西海道の風土記が球磨・贈噓という字を用いたかということなんです。これはこういうことではなかったかと思うのです。風土記はかなり完全な姿で残っているものが五つあるわけです。その中の二つが豊後・肥前の風土記です。九州が二つ入っております。その風土記の内容を研究してみますと日本書紀の記述にかなり類似したものが多く、基本的には日本書紀と親子関係にある；日本書紀を見ながら書いてあるということなんです。それぞれの国で国司が書いておりますから。ところが九州の場合



は太宰府を経由して朝廷に差出しているわけです。そこで私が考えましたことは、これは太宰府の官人；役人が字句を統一してたんだらうということが考えられるわけです。そして提出したんだらうと。それからもう一つは、この九州の風土記というのが果たして奈良朝に出来たのかということなんです。これについては折口信夫とか田中卓といった研究者の論文には肥前風土記の例を採りあげてあるんです。肥前風土記はその内容からすると、10世紀前半の成立とみられる、と。というのは、風土記を10世紀に、また出せという命令が出ているわけです。これは延長三年（925）のことなんです。この時の風土記が九州の場合残っているのではないかと。そうしますと、それも太宰府を通じて出したと思うのですけれども、太宰府の役人たちには本来のクマの意味がもう忘れられて来ていたんじゃないか。なんのことが判らなくなって来ていたということが一つ。もう一つは風土記の基本的な性格として佳い二字を使うということがある。この熊という一字を佳い二字で表現するとなると、こういう表現（球磨）になって来てんじゃないかということを考えてたわけです。それでまあ、九州の風土記が四字で書いてあることは、一見すればこれは地元で書いてある風土記ですから非常に説得力をもつようですけども、実は成立過程から見ると、かなり杜撰なものがこれにはあるんじゃないかということなんです。これは推定の域を出ませんけれども、そういうことを考えてたわけです。そういうことから、一般的に言われているこの「クマソ」というのは球磨・贈嗟との結び付きだという説を否定して、これは要するに、本来襲国を云ってることであって、それに皇命に従わない「クマ」が上に付いたんだということを考えて発表したわけです。長い論文の中からかなり端折って結論と直接関係がある所だけ述べたので、お判りにくいことがあったかも知れません。時間がありませんの

で、この辺で一応終りたいと思います。

### [ 質 疑 応 答 ]

肥後 ただ今の発表について、なにか質問がありましたら。

二見 始良郡の東部、今の霧島町とか隼人町とかに東襲山・西襲山などの地名がありました、ああいうのはいつ頃からですか。

中村 あれは江戸時代の郷名じゃないでしょうか

二見 江戸時代？

中村 江戸時代の郷名。曾郡（ソノコオリ）とかいう地名があそこにありました。襲山とか曾郡とかあるのは、本来あそこが「襲」の中心であったという一つの傍証になると思うんですが、それから「襲」自体の意味をちょっと云い忘れてしまったけれども、「襲」というのは日向が大和政権の支配下に入ってから後の、いわゆる日向に対する「ソ」であったと思います。というのは、「ソ」というのは「背・背中」ですね。それが「ソ」の本来の意味だろうと思っているのです。また、「クマ」の地名的な語源を探って行けば「クマ」というのも「ソ」と同じような意味があると思うのです。その「ソ」に近い意味が本来あって、太宰府の役人たちが付けたのだらうと思います。九州には「クマ」と呼ばれる所が沢山ありますし、国分市付近にも七隈といわれる所があります。そのような私の考えた「クマ」の他に、考えたというより今云ったようなことを、この中（論文）に書いてあります。「クマ」というのは、かなり複合した言葉の意味があって、その中の一つには、あそこはクマの地だといわれる地名的な表現もあるんじゃないかということも、ちょっと述べてあるんです。しかし本来は日向に対する「ソ」であらう。だから、日向が大和政権下に入った後、あの地域を「ソ」として意識しはじめたんじゃないかということも考えているんです。

永山 地名の総称ではなく、地名に形容詞が付く

かどうか、例は他にないものでしょうか。

中村 これは結局は地名ではないと思うのです。風土記に出て来る場合は全部、族名ですね。風土記に出て来る場合、地名としては使われていない。風土記を読まれたら判る。景行天皇がやって来てクマソを討った時に、これが（球磨・贈嗟）が出て来るのです。だからそういうことでなくて、族名として用いられているということなんです。その点もですね、津田博士はちょっと風土記のその表現の所をもう少し検討する必要があったんじゃないか。

平田 現実に球磨という地名もあり曾於もある。それを太宰府の官人が 球磨贈嗟と一緒にしてしまったとは考えられませんか。

中村 ただそれをですね、さっき云いましたように、ただ単純に球磨・贈嗟としたと云うんじゃないで、風土記には佳い字を使えということで、日本書紀に熊襲とあったのを球磨贈嗟と引っ張っていったと思うのです。単純にだれか一人が思いつきでやったことが、こういう今の定説に結びついて来ているようになことではないかと思ってるんです。太宰府の役人のだれかがやったことがですね。

平田 太宰府の役人が球磨と云った場合にはやっぱり、いわゆる球磨川流域の球磨地方を考えたでしょうし、贈嗟と云った場合にはいわゆる霧島山麓の贈嗟を考えたんでしょう。二つの地名を連想したかも知れないですね。そうした場合、球磨・贈嗟は地名であると考えてもいいんじゃないかと思うのです。二つの地域を考えたとすれば。

中村 でも、風土記の表現としては-----ちょっと今史料が見当らないんですが、-----風土記の原本をちょっと持って来れば良かったのですけれども。今、手元に風土記の原本がありませんので。要するに、風土記では地名としては用いていないということです。風土記では族名。球磨贈嗟を討つという、そういう表現ですから。

平田 単にね「クマソ」を討つと云った場合には「クマソ」というのが南九州に住んで居った先住民だという先入観があるわけですよ。その点について考えると記紀；古事記や日本書紀の中には川上タケルが出て来たりね、クマソタケルが出てきたり、ヤマトタケルが出てきたり、イヅモタケルが出てきたりするわけですよ。 「タケル」というものを共通なものとして考えるとイヅモもヤマトも川上も皆、地名ですし、「クマソ」を地名ととらなきゃ、その説明はつじつまが合わないことになります。大和の英雄がヤマトタケルであり、出雲の英雄がイヅモタケルであり、川上の英雄が川上タケルになります。そうしたら、クマソタケルはクマソという土地のね、英雄でなければならぬ。クマとソオという、まあ肥後の球磨と、こっち側の贈嗟をひっくるめて向うの連中が南九州のことを球磨贈嗟と表現したこともあり得るんじゃないか。そうしたら、地名と考えてもよい。

中村 やっぱり、地名の複合でしょうか。

平田 そうでしょうね。

小川 ちょっと話が大きくなりますけど、熊襲と隼人の関係はどうなっているんでしょうか。別のものんでしょうか、同じものんでしょうか。

中村 私はですね、後の隼人の中の贈嗟の地方に住んでいた人々が、かつては熊襲であった。だから、隼人イコール熊襲ではない。熊襲ではないけども、隼人の一部はかつて熊襲と呼ばれたと考えています。その一部というのは贈嗟の地方に住んでいた人々。そう考えているんですけども。

平田 私はね、贈嗟人が隼人になったという考えです。

中村 贈嗟人？

平田 同じようなことなんです。万葉集を見ますと、木人とか安太人とか須磨人とか、地名プラス人という形が多いのです。隼人は「隼」プラス



「人」でなければならない。けれども、「ハヤ」という地名は見当らないわけです。それで、贈摩人→早人；これも「ソウビト」と読めるわけです。これが隼人に変ったとしたら贈摩の地域の人達が隼人に転化したということが考えられるわけです。畿内の連中がそのような勝手な読み方をしてしまったのでしょうが。

中村 ちょっとそれに近いのですが、この球磨贈摩の球磨が-----

平田 球磨人や贈摩人の例があればいいんですけどね。

中村 これが肥人である。例の言語学者の村山七郎さん。あの方は、これは南方用語では「人」の意味だ、と。そうすると、クマ人はクマの人。これを大林太良さんなどはよく引用されるのです。

平田 球磨人とか薩摩人とか贈摩人とかの云い方が残っておればいいんですけども。

中村 まあ人が付くという例はというのは、あまりいい例では使わないようですね。なにに人という場合、たくさんの例があります。いい例でいう時は、まあ奈良人とかいうような時には奈良の人の意味でいい例ですが、大体がなにに人という場合は、やや蔑称ですね。例えば飛騨人。飛騨といえば飛騨内匠で、ああいう工芸にたずさわる。木人といったら紀伊の人ではあるけれども、彼らは木材を積み出したり切り出す、そういう人々で、農業からかけ離れている仕事をする者を云っていると、そんな印象を受けてるんですけどね。だから、その人が付く場合は隼人であり、毛人であり、蝦夷であり、それから肥人であり、奄美人というのも出て来ますが、全部、夷人である。そういうのが今の解釈ですから人が付くというのは、あまりいい意味では元来使っていないのではないかと思います。

平田 それは地名プラス人の場合？そうでなければ、大宮人とか旅人とか一般的なものは？そこまで

意識してたろうか。昔の人々は。

片岡 亡くなった鹿大の増村先生が贈摩郡の口偏をとるのに、だいぶ難儀をされたのですけど。口偏が付くのはいやしむべき、まあ、そう云った夷人・地名に付けた、と。クマソという場合は贈摩の方だけ付いているわけですから、球磨の方は形容詞になるような感じもしているわけです。蔑視する贈摩の方に口偏を付けたのではないか。球磨の方には口偏が付いていないし、蔑視するのは贈摩の方だけか？また佳字二字を以てすると、それは佳字なのかということも疑問になる。口偏が付く字は佳字なのだろうか。余計なことですが。

中村 口偏が付いたり付かなかったりするもんですからね。

片岡 口偏の例証を増村先生はたくさんあげておられます。

片岡 全然別なことですが、千年前と現在を比較するのはおかしいのですが、私は人吉周辺に石取りに何十回と行くもんですから。駅前の荷物預り所に荷物を預けに行った時、そこのおばちゃん鹿児島の人でした。鹿児島弁で平気で話すんです。人吉の人たちを相手に、鹿児島弁のまま。それはもう平気なもの。あっちで知り合いが何人か出来ました。何人かは鹿児島からお嫁さんを貰っている。それで、品物・衣類・雑貨の仕入は、鹿児島の方。熊本には行かない。そして人吉には山形屋の支店がある。むしろ人吉は鹿児島の方に昔から密接だったと思います。久七峠を越えると、すぐ大口に出ますから。球磨川をずーっとくまくと降りて行って八代まで行くよりも鹿児島の方に近かったと感ずります。加久藤峠を越えるとね。どっちかというとならぬ。結び付きが案外古くから強かったんじゃないか。あちは八代文化圏と云われていますが、それは合わないんじゃないか。そんな気がします。現在を起点に考えているから、おかしいかも知れませんが。

平田 人吉は古くから大隅の中心である国分と、文化的にはある意味で密接な関係があるんじゃないですか。

中村 まあ、要するに、一つの試論として提供したわけですので。

肥後 もうよろしですか。では、どうもありがとうございました。

X X X

### 鹿児島地名研究会会員名簿

池田信夫  
江之口汎生  
江平 望  
小川玄三郎  
片岡八郎  
唐鎌祐祥  
芳 即正  
桐野利彦  
木場武則  
栄 喜久元  
佐野武則  
下野敏見  
富永清志  
中村明蔵  
永山修一  
永山徹弥  
西園一俊  
花園正志  
花田 潔  
原口 泉  
原口虎雄  
肥後芳尚  
平田信芳  
二見剛史  
本田親虎

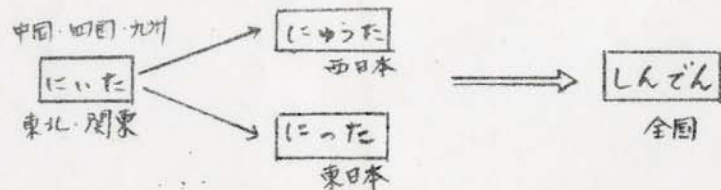
藤浪三千尋  
松田 誠  
松浪由安  
三木 靖  
南 清孝  
山口静也  
山崎盛隆  
山田慶晴  
四本健光  
脇元東明



[ 新田神社 と 新多郷 ]

(1) 新田のよみ 日本地名索引より

1. にった 秋田・岩手・宮城・福島・茨城・千葉・神奈川・静岡・兵庫  
日田 ----- 山形, 仁田 ----- 静岡・長崎
2. にいた・にいた 青森・福島・栃木・島根・岡山・愛媛・大分  
新多 ----- 福岡  
新井田 ----- 青森・千葉  
仁井田 ----- 秋田・福島・高知
3. にゆうた 宮崎  
入田 ----- 岡山・徳島・高知・大分
4. あらた 大分 (荒田は全国的にみられる)
5. しんでん 全国的に見られる。



(2) 「倭名抄 郷名」における「新」のよみ

- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新田 (にふた; にゆうた)<br/>陸奥国新田郡<br/>播磨国揖保郡新田郷<br/>出雲国仁多郡<br/><br/>薩摩国高城郡新多郷 (訓51)</li> <li>2. 新川 (にふかわ)<br/>越中国新川郡 ----- 現在は「にわか川」とよむ。</li> </ol> | <p>新田 (にふた; にゆうた)</p> <p>陸奥国黒川郡新田郷<br/>武蔵国朝夷郡新田郷<br/>上総国畔蒜郡新田郷<br/>上野国新田郡 ----- 延喜式 { 兵部 = ヴ<br/>兵部 = フ</p> <p>下野国芳賀郡新田郷<br/>但馬国城崎郡新田郷<br/>備前国和気郡新田郷</p> |
|---|--|

3. 新居 (にひい; にひい)

- 駿河国益頭郡新居郷  
近江国浅井郡新居郷  
伊予国新居郡  
筑前国唐田郡新居郷  
肥前国彼杵郡新居郷

4. 新居 (にいのい)

- 阿波国勝浦郡新居郷

5. 新居 (にいのみ)

- 讃岐国阿野郡新居郷

6. 新井 (にひい)

- 遠江国城飼郡新井郷  
伯耆国汗入郡新井郷  
阿波国名栗郡新井郷

訓51

7. 新見 (にひみ)

備中国楢多郡新見郷

8. 新野 (にひの)

- 遠江国城飼郡新野郷  
隠岐国周吉郡新野郷  
美作国勝田郡新野郷  
安芸国賀茂郡入農郷

10. 新家

- 河内国志紀郡新家郷  
出羽国田川郡新家郷

11. 新治 (にひぢり)

- 常陸国新治郡  
丹波国丹波郡新治郷  
河内国若江郡新治郷

訓51

(訓51)

- 駿河国有度郡新居郷  
伊豆国四方郡新居郷  
武蔵国榛沢郡新居郷  
河内国古布郡新居郷  
河内国石川郡新居郷  
河内国河内郡新居郷  
伊賀国阿拝郡新居郷  
武蔵国如美郡新居郷  
下総国葛飾郡新居郷  
常陸国鹿島郡新居郷  
常陸国多珂郡新居郷  
美濃国不破郡新居郷  
筑後国下妻郡新居郷

9. 新野・新屋 (にひの)

- 摂津国島上郡新野郷  
上野国甘栗郡新屋郷  
伊予国越智郡新屋郷  
伊予国喜多郡新屋郷  
尾張国海部郡新屋郷  
武蔵国武射郡新屋郷  
伊予国板野郡新屋郷

訓51

- |   |          |        |
|---|----------|--------|
| } | 新屋 (にひの) | 武蔵国新屋郡 |
|   | 新分 (にひひ) | 筑前国鞆手郡 |
|   | 新名 (にひな) | 日向国那賀郡 |
|   | 新城       | 香河内額田郡 |
|   | 新沼       | 河内国若江郡 |